

筑波大学博士（言語学）学位請求論文

親和的關係における否定的評価の研究
—日・韓母語話者の言語行動の比較—

林 始恩

2014年度

目次

第1章 研究の背景と目的.....	1
1.1 研究の背景.....	1
1.2 研究の目的.....	2
1.3 各章の内容.....	3
第2章 先行研究と本研究の位置づけ.....	5
2.1 談話研究のアプローチ.....	5
2.1.1 談話分析 (Discourse Analysis).....	5
2.1.2 会話分析 (Conversation Analysis).....	6
2.1.3 語用論 (Pragmatics).....	7
2.1.4 本研究の分析手法.....	7
2.2 ポライトネス理論.....	9
2.2.1 Brown & Levinson (1987).....	9
2.2.2 談話レベルにおけるポライトネス理論.....	12
2.3 言語行動の日・韓対照研究.....	13
2.4 親しさのコミュニケーションに関する研究.....	15
2.4.1 親しさのコミュニケーションの特徴.....	15
2.4.2 冗談・遊びとしての対立に関する研究.....	16
2.5 評価に関する研究.....	18
2.5.1 評価の種類.....	18
2.5.2 肯定的評価に関する研究.....	19
2.5.3 否定的評価に関する研究.....	21
2.6 本研究の位置づけ.....	23
第3章 研究方法.....	25
3.1 会話収集.....	25
3.1.1 会話参加者の属性.....	25
3.1.2 会話収集の手順.....	27
3.1.3 会話データの概要.....	27
3.1.4 会話の自然さ.....	30

3.2	文字化の方法	31
3.2.1	文字化の記号	31
3.2.2	韓国語の表記法	32
3.3	否定的評価の定義と判断基準	33
3.3.1	否定的評価の定義	33
3.3.2	否定的評価判断基準	36
3.4	否定的評価の発話数	38
3.5	本章のまとめ	40
第4章	否定的評価の発話状況と日・韓の比較	41
4.1	はじめに	41
4.2	関連する先行研究	41
4.3	否定的評価の発話状況	42
4.3.1	行い手主導の否定的評価	43
4.3.2	受け手の言動に対する否定的評価	48
4.3.3	受け手の自己否定に対する同調	60
4.4	発話状況における日・韓比較	64
4.5	本章のまとめ	68
第5章	自然会話における否定的評価の表現形式	70
5.1	はじめに	70
5.2	関連する先行研究	71
5.3	会話データの概要	72
5.4	否定的評価の表現形式と発話数	73
5.4.1	否定的評価の表現形式	73
5.4.2	表現形式における発話数	74
5.5	通常の疑問文と「非難」としての疑問文	75
5.5.1	通常の疑問文	75
5.5.2	「非難」としての疑問文	77
5.6	「非難」としての疑問文の表現方法	80
5.6.1	真偽疑問文 (Yes-No Question)	80
5.6.2	疑問詞疑問文 (WH Question)	84
5.7	考察及びまとめ	92

第 6 章 相手の否定的側面を語る談話の組み立て方	95
6.1 はじめに	95
6.2 関連する先行研究	96
6.2.1 語りやニュースにおける前触れ	96
6.2.2 敬意表現としての前触れ	97
6.2.3 サイド・アクティビティー	97
6.3 会話データの概要	98
6.4 分析	99
6.4.1 話題導入の仕方と談話の組み立て	99
6.4.2 サイド・アクティビティーの挿入	114
6.5 考察及びまとめ	118
第 7 章 否定的評価後の FTA 補償行為	123
7.1 はじめに	123
7.2 談話レベルにおける分析の必要性	123
7.3 否定的評価における FTA 軽減発話の位置	125
7.3.1 FTA 発話の前に行われる場合	125
7.3.2 FTA 発話の途中で行われる場合	128
7.3.3 FTA 発話の後に行われる場合	131
7.4 否定的評価後における FTA 補償行為の種類	131
7.5 FTA 補償行為における日・韓比較	151
7.6 本章のまとめ	152
第 8 章 本研究のまとめと今後の課題	154
8.1 本研究のまとめ	154
8.2 総合的考察	157
8.2.1 日本語と韓国語における言語行動の違い	157
8.2.2 親和的關係における否定的評価	158
8.3 今後の課題	159
参考文献	161
各章と既発表論文および口頭発表との関連	169

第1章 研究の背景と目的

本章では、本研究の背景と目的、そして、各章の内容について紹介する。

1.1 研究の背景

親しい友人同士の関係では、けなしや冗談、悪態など、相手に対して否定的評価を行うこともあるだろう。例えば、親しい友人の部屋に訪れ、汚い部屋を目の前にしたとき、「きつたないなあ」という行為などがそうである。

このような親和的な関係での悪口や冗談などが、親近感の表現であり、お互いの友好的な雰囲気形成に役立つことは、先行研究（大津 2004）でも指摘されている。しかし、「親しき仲にも礼儀あり」ということばがあるように、親しみを表すつもりで行ったものであれ、否定的評価は、発話の状況や表現により、相手のフェイスを傷つける可能性がある。また、お互いの表現認識が異なる異文化接触場面では、ミス・コミュニケーションを引き起こす可能性がより高くなるだろう。

中山（2007）は、「親しさ」は親和的欲求のみではなく、独立性も抱えたまま近づくものであり、特に親しさのコミュニケーションでは、相矛盾する欲求を表す「近づき」と「遠ざけ」の表現をうまく組み合わせて使用することが重要であるという。親しい友人同士で行われる否定的評価は、このような親近感の表明と相手への配慮という二面性がよく表れる言語行為だと思われる。このような二面性が共存する中、実際、日本語母語話者と韓国語母語話者は否定的評価をどのように行っているのだろうか。

本論文では、親しい友人同士の実際の会話を収集して、このような相手への否定的評価がどのように行われているのかを分析する。具体的には、親しい友人同士の会話の中で、否定的評価がどのような状況で、どのように表現されるのか、また、相手の否定的側面を指摘する場面においてはどのような談話的特徴が見られるのか分析することを

目的とする。

近年、日本語を学ぶ若者は、日本の若者に溶け込むことや、友好的な関係を深めることを願っているようである（宇佐美 2002）。最近まで日本語の「丁寧さ」は、敬語などの表現が中心に考えられてきたが、相手との「心地よい人間関係」を築けるコミュニケーションの研究も必要である。否定的評価の研究を通して、親しさのコミュニケーションの特徴の一面を記述できると思われる。

また、日本語と韓国語の言語行動の研究にも寄与できると考えられる。言語行動における日・韓対照研究には、依頼・断り・不満表明・スピーチレベルシフトなどに関する研究が多くなされていた。これらの研究は、相手の領域に踏み込まないための配慮表現に注目し、ネガティブ・ポライトネスを優先している。しかし、相手に親しみを表し、相手の領域に触れようとするポジティブ・ポライトネスに関してもさらなる研究が必要である。否定的評価は、これらの両面の特徴が現れる言語行動であり、否定的評価における日本語と韓国語の母語話者の相違点を明らかにすることで、日・韓対照研究にも役立てたい。

1.2 研究の目的

本研究の目的を以下のように設定する。

- 親しい友人同士の間で、否定的評価がどのような状況で、どのように行われているのか、その際の表現の仕方や談話的特徴について分析する。
- 否定的評価の出現パターンや否定的評価後の補償行為において、日本語母語話者と韓国語母語話者の相違点を分析する。

以上のような目的を達成するために、各章ではどのような分析を行うのか、その内容

について、1.3節で述べる。

1.3 各章の内容

第2章では、先行研究の紹介と本研究の位置づけを行う。

第3章では、研究方法として、前半部分では、データの収集方法と、文字化の方法を示す。そして、後半部分では、本研究の分析項目である「否定的評価」の発話の定義と判断基準を提示し、それに沿って出現した「否定的評価」の発話数を示す。

第4章から第7章までは、「否定的評価」の言語行動に関するデータの分析を行う。

第4章では、まず、否定的評価がどのような状況で、何をきっかけとして出現するのか分析することを目的とする。実際、日本語母語話者と韓国語母語話者の会話からその出現パターンを分類し、出現頻度に日・韓の相違点があるのか探る。そして、なぜ韓国語母語話者による否定的評価がより唐突に見えるのかについて、発話の出現状況からその原因を探る。

第5章では、自然会話における否定的評価の表現形式の中で、疑問文の形式が多くみられることに注目する。そして、疑問文で行われる「非難」がなぜ「質問」ではなく、「非難」として聞こえるのか、その前提を確立し、さらに、「非難」として行われる疑問文はどのように表現されるのかについて分析する。

第6章では、相手の否定的側面を言いにくそうに語っている会話例に注目し、敏感さ(delicate)や慎重さを表すために、話し手と聞き手がどのように談話を組み立てているのか分析する。特に、話題の導入時に見られる話し手の前触れと話題展開の途中に現われる聞き手のサイド・アクティビティーが敏感であることをどのように示しているのかについて検証する。

第7章では、否定的評価におけるFTA補償行為について見る。否定的評価は、発話の状況や話し方により、相手のフェイスを傷つける可能性があるため、否定的評価の後、

FTA 補償行為が行われる場合がしばしばみられる。第 7 章では、まず、談話における FTA 軽減発話の位置を概観し、否定的評価の後に、どのような補償行為が行われるのか分析する。そして、日本語母語話者と韓国語母語話者が使用しているストラテジーの比較を行う。

最後に、第 8 章では、各章の分析をまとめ、総合的な考察を行い、今後の課題に言及する。

第2章 先行研究と本研究の位置づけ

本章では、関連する理論と先行研究を紹介し、本研究の位置づけを行う。まず、2.1節では、談話研究における既存のアプローチについて紹介し、本研究の分析手段について述べる。そして、2.2節では、対人関係調整の理論である Brown & Levinson (1987) の「ポライトネス理論」を紹介する。続く 2.3節では、様々な言語行動における日・韓の対照研究について紹介し、2.4節では、親しさのコミュニケーションに関連する研究を紹介する。2.5節では、「評価」に関する研究を紹介し、特に「否定的評価」の研究にはどのようなものがあるのか見てみる。2.6節では、様々な関連する先行研究と比較しながら本研究の位置づけを行う。

2.1 談話研究のアプローチ

2.1.1 談話分析 (Discourse Analysis)

「談話分析」は、ことばがどのような機能を果たしているかを、談話という単位の中で見る研究である。談話分析は、一つの文の枠を超えた会話やテキストなど、より大きな言語単位を対象とする。談話分析の研究分野は、1960年代から1970年代の初めにかけて、言語学や、社会学、文化人類学、心理学における言語コミュニケーションの研究から盛んになってきた。

狭義の意味としての「ディスコース分析 (Discourse Analysis : DA)」は、談話の言語学分析あるいは、談話文法という意味に限定される (Brown & Yule 1983)。この分野の研究は、これまでの文レベルで有効とされてきた統語論の手法を談話の範囲に広げようとするアプローチであり、実際の談話において言語がどのように運用されるのかを重視するものである。ディスコース分析 (DA) の研究には、「省略」「倒置」「視点」などの文法を中心とした「談話の文法」といった研究や、接続詞、間投詞、副詞などの単

語や句によって言語形式が発話を結びつける「談話標識」の研究などがある。

近年、「談話」という場合には、話し手と聞き手の相互行為に注目した実際の会話、話しことばを指すことが多くなっている（メイナード 2004:3）。これは、社会と言語との関連を扱う社会言語学や、言語使用の法則を明らかにする語用論、会話のメカニズムを明らかにする会話分析の影響を受けていると思われる。

2.1.2 会話分析 (Conversation Analysis)

会話分析 (Conversation Analysis : CA) の研究は、言語が社会的相互行為のための道具であるという観点から、会話を体系的に分析することを試みた社会学の研究である「エスノメソドロジー」から生まれた。

社会学者である Sacks が「自然に生起する相互行為」を記録し、それを繰り返し検討しながら、相互行為の組織のために相互行為参加者たちが利用する様々な「仕掛け(リソース)」を明らかにしようとしていたのが「会話分析」のはじまりである（西阪他 2008）。

会話分析の研究者は、Sacks の手法を受け継いで、日常のことばのやりとりをデータとし、そのデータを繰り返し聞くことで、相互行為上の目的を達成するための手続きを見つけようとした。主な研究分野としては、発話の順番取りシステム（話者交替、割り込みやオーバーラップ、沈黙）、会話の構造（隣接ペア、挿入連鎖、優先組織）、修復、会話の管理（開始・終了の方法等）等がある。

日本語における会話分析の研究としては、2008 年『社会言語科学』の学術雑誌に、「相互行為における言語使用：会話データを用いた研究」についての特集が掲載され、日本語における特定の言語形式が相互行為の上でどのように働いているのか、また、相互行為の中で特定の仕事をを行うために用いる言語形式についての論文がある。

2.1.3 語用論 (Pragmatics)

語用論 (Pragmatics) とは、現実世界の場面において、何かを行ったり意図を伝えるために、言葉がどのように使われるか探究する研究分野である。語用論の研究は、1960年代の哲学者である Austin の「発話行為論 (Speech Act theory)」に端を発する。Austin (1962) は、ある種の発話には本質的に何かの行為を遂行する力があるということを指摘し、それを「遂行文」と呼んだ。例えば、「お詫び申します」という発話は、これを言うことで、実際に詫びるという行為を行う陳述文である。

Austin の研究を受け継いで発話行為を分析したのが、John Searle である。Searle (1969) は、人はどのようにして発話内行為を特定できるのか説明するため、特定の発話内行為（「約束」「質問」等）における規則を提案した。発話行為が成立するための規則としては、「命題内容規則」「事前規則」「誠実性規則」「本質規則」の4つがあり、この規則が発話行為の成立を支配しているという。

Grice (1975) は、「会話の含意」と「協調の原理」を提案し、「語用論的原理」の概念を作りあげた。「協調の原理」には、「量の公理」「質の公理」「関連性の公理」「様態の公理」という4つの「公理」があり、その決まりにより、ある特定のコンテキストにおける「会話の言外の意味」が伝えられるという。

語用論の研究では、その後、様々なテーマが取り上げられ、活発に議論されてきた。そうした中で、Lakoff (1973)、Leech (1983) や Brown & Levinson (1987) らによって提唱された「ポライトネス理論 (Politeness theory)」が、主要なテーマの一つとして注目を浴びてきた。「ポライトネス理論」については、2.2節でより詳細に紹介する。

2.1.4 本研究の分析手法

本研究は、実際に行われた会話を分析する研究である。談話の中でも、話されたことばについての研究であり、一文を超える「談話レベル」における研究として位置付ける。

金珍娥^{キムジナ} (2013) では、自身の研究分野において「談話論」という術語を用いて、「語用論」や「会話分析」「談話分析」の研究を生かしつつ、「話されたことば」の「談話」を見る分野であることを提唱している。金珍娥^{キムジナ} (2013) は、「談話論」構成図を図 2-1 のように示している。

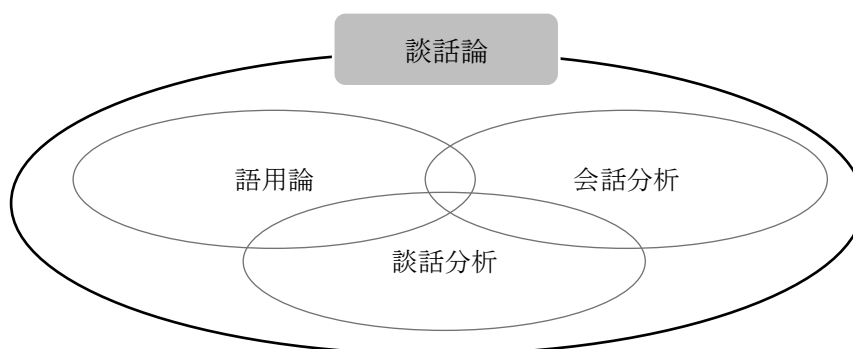


図 2-1 〈話されたことば〉を対象とする〈談話論〉の構成図 (金珍娥^{キムジナ} 2013:49)

本研究の「否定的評価」の分析においても、「談話分析」や「会話分析」、「語用論」のアプローチを併用する。「評価」の言語形式を用いてなくても、ある発話がどのような文脈で「否定的評価」になるのか見ることは、語用論の研究に近いだろう。また、話し手が否定的な態度をどのように示しているか見るために、発話の組み立て方や談話の特徴を詳細に分析することは、会話分析及び談話分析の手法が用いられる。否定的評価を相手のフェイスを脅かす行為として捉え、その話し方やストラテジーを分析することは、ポライトネスが理論的背景になる。このように、各章の目的に適したアプローチに基づき分析を試みる。

2.2 ポライトネス理論

2.2.1 Brown & Levinson (1987)

Brown & Levinson (1987) は、人間には普遍的な言語行動のルールがあると想定し、ポライトネスの普遍理論を提起した。

フェイス概念

「フェイス」の概念は、Goffman (1967) の社会学の研究から始まる。Goffman (1967) は、「フェイス」の概念を、「他者から承認された積極的な社会的自己イメージ」として定義している。Brown & Levinson (1987) では、Goffman の概念を参考に、「フェイス」を社会的イメージと位置付けることに加え、「フェイス」を人々の基本的欲求として扱っている。Brown & Levinson は、フェイスには、次の2種類が存在するという。

- ① 他者に受け入れられたい・よく思われたい欲求である「ポジティブ・フェイス (positive face)」
- ② 他者に邪魔されたくない・踏み込まれたくない欲求である「ネガティブ・フェイス (negative face)」

そして、このフェイスを脅かさないように配慮して円滑なコミュニケーションを維持していこうとする言語行動が「ポライトネス」である。

フェイス侵害行為 (FTA)

言語行為には、それを行うことで不可避免的に相手や自分のフェイスを侵害してしまうものがあり、これを「フェイス侵害行為 (FTA=Face-Threatening Act)」という。Brown & Levinson は、ある種の行為は、本質的にフェイスを侵害する可能性があり、このよ

うなフェイスを侵害する行為 (FTA) としては、批判する、断る、ほめる、約束する、要求する、アドバイスするなどがある。

そして、フェイス侵害度を見積もる方法として、以下のような公式をあげている。

$$W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$$

W_x (weightiness) : ある行為 x の相手に対するフェイス・リスク

D (distance) : 話し手 (speaker) と聞き手の (hearer) 社会的距離

P (power) : 聞き手 (hearer) の話し手 (speaker) に対する力

R_x (ranking of imposition) : 特定の文化内における行為 x の負担度

このように、フェイス侵害度は、社会的距離 (D) と力関係 (P)、ある行為の負担 (R) という 3 つの要素が加算的に働き決まってくるのである。

ポライトネス・ストラテジー

Brown & Levinson は、フェイスを脅かす状況で、その程度を軽減するために用いられるのがポライトネス・ストラテジーであり、ポライトネス・ストラテジーとして、「① FTA 軽減行為を伴わない (bald on record)、②ポジティブ・ポライトネス、③ネガティブ・ポライトネス、④ほのめかし (off record) ⑤FTA を行わない」の 5 つのストラテジーを提示している。この 5 つのストラテジーのどれを選択するかは、相手のフェイス侵害度の見積もりに応じて決定される傾向がある。「フェイス侵害度 (FT 度)」が比較的高い場合は、非明示的ストラテジーが選択されやすく、FT が小さくなるにつれ、ネガティブ・ポライトネス、ポジティブ・ポライトネスの順に選択されやすい。

以下にストラテジーを選択する要因に関する図 2-2 を示す。

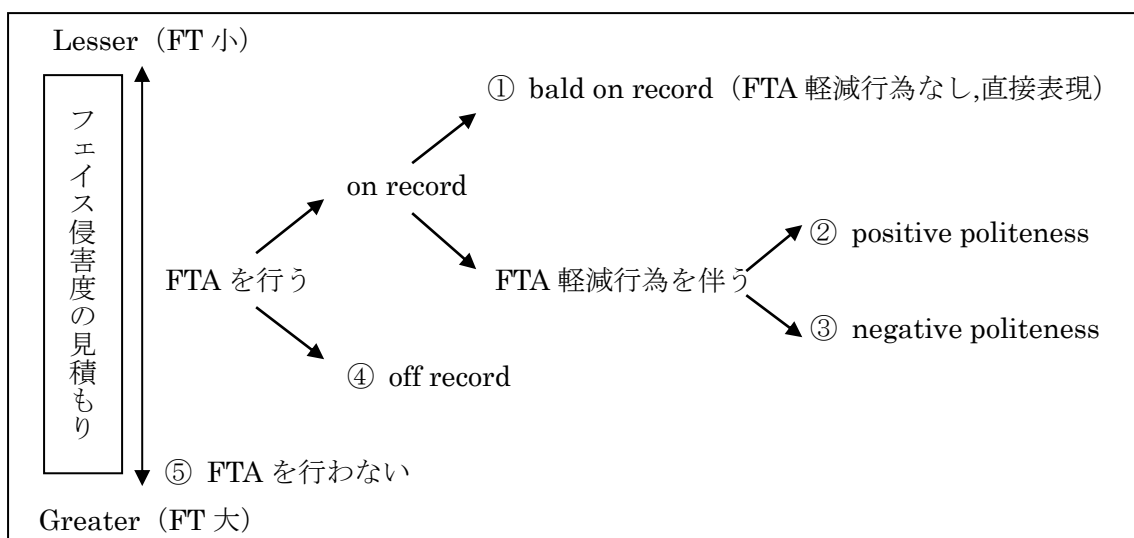


図 2-2 ストラテジーの選択に影響する要因 (Brown & Levinson, 1987:69)

その中でも、相手のポジティブ・フェイスに訴えかけるストラテジーを「ポジティブ・ポライトネス」、ネガティブ・フェイスに配慮するストラテジーを「ネガティブ・ポライトネス」と呼んでいる。ポジティブ・ポライトネスの例としては、相手に興味・共感・賞賛を示す、方言など仲間内の言葉を使う、相手を喜ばせる冗談を言う、相手の欲求・望みを満たすなどの行為がある。ネガティブ・ポライトネスの例には、断り・わび・謝罪を言う、間接表現・婉曲表現を使う、相手の負担を軽減するなどの行為がある。

滝浦 (2008) では、「ポジティブ・ポライトネス」は、直接的表現と近接化的表現によって、相手との距離を縮め、相手と共に事柄に直接触れようとする「表現の共感性」が特徴となることを述べている。一方、「ネガティブ・ポライトネス」は、相手の領域に踏み込むことや直接名指することを避け、遠隔化的表現と間接的表現によって、相手を遠くに置き、事柄に直接触れないようにする「表現の敬避性」を特徴とすることを指摘している。つまり、ポジティブ・ポライトネスは、「共感」のポライトネス、または「連帯」のポライトネスということができ、ネガティブ・ポライトネスは、「回避」または、「敬避」のストラテジーということが出来る。

2.2.2 談話レベルにおけるポライトネス理論

Brown & Levinson (1987、以下 B&L) のポライトネス理論は、文単位あるいは、数回の発話連鎖のみを対象にしている問題点があるため、より長い談話でポライトネスを見る必要性が提案される。Bayraktaroğlu (1991) では、B&L は、FTA を避ける、FTA の効果を軽減することは扱っているが、FTA を遂行した後のことはほぼ言及されていないことを指摘し、これら全てを考慮しなければ、よりダイナミックな関係を説明できないと述べている。そして、参加者同士で「相互作用の不均衡 (interactional imbalance)」が生じることを述べ、FTA の反対概念である FBA (face-boosting acts) の概念を提示した。

日本語の研究として、宇佐美 (2001) は、B&L のポライトネス理論では一発話行為レベルの現象しか取り扱うことができない弱点があるため、「談話レベルの要素」や「周辺言語」にまで扱う対象を広げ、言語行為だけでなく、「発話効果」という観点も考慮にいった「ディスコース・ポライトネス理論 (DP)」を提唱した。「ディスコース・ポライトネス」とは、「一文レベル、一発話行為レベルでは捉えることのできない、より長い談話レベルにおける要素、及び、文レベルの要素も含めた諸要素が、語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクス の総体」と定義している。そして、敬語があるかないかにかかわらず、「社会言語学的規範や慣習に従った言語使用」と「話者個人の方略的な言語使用」、及び両者の相互作用として、談話レベルでポライトネスを捉える必要性を主張している。

三牧 (2008) では、FTA を軽減する試みが、FTA の遂行と同時に、あるいは数回の発話連鎖の中で全て達成できるものなのか問題を提起し、より談話全体を視野に入れたマクロ的な観点の必要性を主張している。そして、相手のフェイスへの侵害度が非常に高い会話を取り上げ、FTA を遂行した側の参加者およびフェイスを大きく侵害された側の参加者の双方が、談話の進行と共にどのように相互行為を行っているのか分析し、

「FTA バランス探究行動¹⁾」を指摘している。

2.3 言語行動の日・韓対照研究

従来の日本語と韓国語の対照研究は、言語体系と言語構造に関する研究が中心であった。例えば、文法や音韻の違いなど言語形式の比較研究が多かった。しかし、国際化時代に伴って世界的にコミュニケーションの機会が増えている中、対照社会言語学的立場からする談話分析や言語行動などの比較研究の関心も高まっている(任榮哲^{イムヨンチョル} 2005)。

「言語行動」とは、人間が言語によって行う思考、表現、伝達の行動及びその行動に対して相手がそれを解釈して理解する行動全体を差す。このような言語行動についてのその実態を発見し、その内部の姿を把握しようとする言語研究の一つの分野を「言語行動論」という。杉戸(1996)では、コミュニケーション上の誤解や行き違いなどの問題は、言語形式そのものだけが原因と考えられる事例は少なく、言語形式以外の要素がからみあった事例が多いという。そのため、このような言語行動の対照研究は不可欠な作業であることを指摘している。

言語行動における対照研究は、大量の質問紙調査を通して行われる研究が多い。洪^{ホン}(2007)の『日韓の言語文化の理解』では、質問紙調査法を利用し、あいさつ行動、ほめ意識、断り行動、不満表現、敬語意識、あいづち、初対面の言語行動など、日・韓の違いが見られる言語行動を中心に、比較分析を行った。また、尾崎(2008)編集の『対人行動の日韓対照研究』では、多人数(計2175人)の言語使用に対する意識調査を実施し、所持物を使う際の言葉の有無、座席選択や身体接触から見た個人テリトリー意識、依頼行動と感謝行動、会話における話題選択などのテーマから日韓比較を行った。

¹⁾ バランス探究行動の具体的なストラテジーは以下のようである。

- 1) 過度のFTAを犯したと認識すると相手からのFTAを誘導し、フェイスを侵害された側も相手からの誘導に応じてFTAを遂行する。
- 2) 過度のFTAを犯した側が、その後自らに対してFTAを遂行する。
- 3) 一方、相手から多めにFTAを受けたと認識すると自発的に相手に対してFTAを遂行する。

このような言語行動の研究は、通常アンケートと呼ばれる質問紙調査を利用しているが、このような調査方法は、質問内容によっては、実際の行動とは関係なく、常識的に最も妥当な選択肢を選んで解答する危険性が存在する。また、発話における状況を提示しているが、相手との相互作用を考慮していない問題点がある。

実際の会話から分析を行っている日韓対照研究も増えている。文末形式の研究としては、李恩美^{イウンミ}（2008）や申^{シン}（2008）等があり、スピーチレベルシフト²においての、両国の異なる言語行動を分析している。奥山（2005）では、初対面の会話における話題導入ストラテジーを日韓で比較している。そして、金庚芬^{キムギョンブン}（2005, 2007, 2012）は、「ほめ」行動について研究しているが、詳細については、2.5.2 節で述べる。実際の会話ではないが、元^{ウォン}（2005）と任炫樹^{イムヒョンス}（2004）は、談話完成テストやロールプレイを用いて、日韓の断りの言語行動の対照研究を行っている。これらの研究の多くは、ポライトネス理論の観点から分析されているのが特徴である。

以上のような言語行動の日・韓対照研究は、日本語教育や韓国語教育に貢献すると共に、日・韓両国の相互の理解を深め、異文化間ミス・コミュニケーションを防ぐのに役立つだろう。

「否定的評価」の研究に関しては、「不満表明」に関する研究として、李善姫^{イソンヒ}（2004, 2006）があるが、友人同士で冗談として相手をけなしたり、否定的評価を述べる研究は少ないと考えられる。本論文では、言語行動としての「否定的評価」を分析し、日本語母語話者と韓国語母語話者に違いが見られるところがあれば、それに注目して比較を行う。

² 「デス・マス体」から「ダ体」へ、あるいは「ダ体」から「デス・マス体」への移行など、スピーチスタイル間の移行をいう（Ikuta 1983）。

2.4 親しさのコミュニケーションに関する研究

2.4.1 親しさのコミュニケーションの特徴

Leech (1983) の『Pragmatics (語用論)』では、丁寧さは、自己と他者と呼ぶ二人の参加者間の関連性に関係することを言及している。そして、「冷やかし」³の原理を以下のように、述べている。

「聞き手との親密性を示すためには、聞き手にとって (i) 明らかに偽りであること、および (ii) 明らかに失礼であることを言え。」(Leech 1983 池上・河上訳 1987:210)

このように、関係が親密になればなるほど、丁寧に振舞うことが必要でなくなるという。つまり、「丁寧さの不足は本質的に親密性のしるしとなりうるものであり、またそれゆえ、冗談で人に失礼に振舞うことができるということは、そうした親密な関係を打ちたて維持するのに役立つことになる」と述べている。

親しさのコミュニケーションの特徴に関する研究は、中山 (1995、2003、2007) の一連の研究がある。中山 (2007:52) では、親しさのコミュニケーションの特徴について、以下のような特徴を挙げている。

- 親しさのコミュニケーションは、親しい関係の中で自然に徐々に身につけるので、意識して学ぶことがない。その結果、問題があっても気づきにくい。
- 親しさは、非言語行動（視線、表情、仕草、等）で表されることが多く、明示的に言語化されないのが普通である。
- 親しさは、「一定の状態」と考えられがちであるが、実は、どんなに安定しているようでも、刻々と、また、長い期間でも変化する。

³「冷やかし」とは、外見上、不快な方法で好意的な振舞いをする事（みせかけの失礼）である。

このように、親しさは、非言語行動で現れることが多く、明示的に言語化されないのが普通である。そして、中山（2003）では、二人の日本語母語話者の約4ヶ月間にわたる会話データ⁴から、コミュニケーションの始め方、ターン数・話題内容・文体使用などの変化、重なり発話、訂正行動などの変化を取り上げた。その結果、親しさのコミュニケーションは、ジグザグの変化パターンを示し、人間の相矛盾する欲求である「近づけ」と「遠ざけ」をバランスよく調整しながら、親しさを心地よく形成しようとする相互作用が見られると言う。

2.4.2 冗談・遊びとしての対立に関する研究

親しい間柄で行われる実際の会話を分析した研究には、大津（2004）、水島（2004、2006）がある。これらは、親しさのコミュニケーションの特徴である、「冗談」「からかい」「つつこみ」「対立」などを対象に分析している。

大津（2004）は、ポジティブ・ポライトネスの一つとして、会話参加者同士が遊びで相手の悪口を言ったり反論したりして対立する場面に注目し、親しい友人同士の雑談を分析した。その結果、遊びとしての対立を開始する方法には、二つのパターンがみられた。一つ目は、開始したいと思った会話参加者が自ら対立を表明することによって始める方法であり、二つ目のパターンは「ボケとツッコミ」と呼ばれるもので、開始したいと思った参加者が自ら対立を表明するのではなく、わざと誤ったことや理不尽なことを言い、相手に対立表明をするように仕向ける方法である。さらに、対立が「遊び」であることを参加者がお互いに伝え合うために用いる主な合図として、(1) 発話の繰り返し、音律の操作、感動詞の使用などによる大げさな感情表現、(2) スタイル・スイッチング、(3) 笑いの三つがあるということがわかった。

水島（2004）は、会話に笑いなどをもたらすことを目的とし、相手に対する批判や

⁴ 30代前後の男女の大学院の同級生に、筆者の仕事のお手伝いと依頼し、約4ヶ月間、週一回程度（全8回）会って、筆者を含め、3人の会話を録音したデータである。

からかい、冷やかしなどを行う発話行為を総じて「疑似批判的発話⁵」と呼んでいる。そして、疑似批判的発話の一例として、「つつこみ」という言語現象に注目し、その実態とフレームを分析した。水島によると、「つつこみ」を含む会話内では、疑似批判的な発話を喚起するような表現（ぼけ）が直前に用いられ、それに呼応する形で批判的なコメントが発せられていたことがわかった。そして、これらの発話の話者の間で通じ合い、笑いやそれに準ずる反応が起こった時、会話参加者はコミュニケーションの成立を確認するという流れを提示している。

中山（1995）は、人間関係の調整手段として、冗談やからかいを研究対象として分析した。二人の人の8回にわたる会話データから、冗談類⁶をどれだけ使用したか、また、どのように行っているのか観察した結果、冗談類は、時間軸に沿って、直線的に発展するのではなく、段階的に、ジグザグに変化していたことがわかった。また、冗談の表現も間接的なものが徐々に直接的になっていた。これは、参加者がその時々相手の出方、全体の雰囲気などの変化を感じ取って調整していく上で行っているためだと論じている。そして、冗談・からかいなどが親しさの表現・交渉手段として成り立つのは、「好意を伝達したい」「これは本当ではない」「共に楽しみたい」という了解が参加者の中で共通に持たされているからであるという。

その他、自然会話ではないが、漫才の「フリ」「ボケ」「ツッコミ」に関して、安部（2005）、関（2005）、金水（1992）などの研究があり、漫才でおかしみを生む構造や、「フリ」「ボケ」「ツッコミ」の言語的機能に注目している。

⁵ 表面上は否定的であるが、本意はそれによって起こる笑いなどを目的としているという発話の擬似性にちなんでいる。

⁶ 「冗談類」として、以下を挙げている。

- 1) 冗談：相手と自分を面白がらせる機能を果たす。
- 2) からかい：相手を対象に、多少気を悪くする、困る、恥ずかしがるなどの相手の反応を共通に笑って楽しむことを目的とした表現方法。
- 3) ふり：発話内容を「演じ」て不自然に強調することによって、真の意図とのズレを楽しむための表現方法とする。
- 4) 悪口：からかいの延長、批判的な内容を持ち、相手の反論・反発を予期するものだが、あくまでも楽しむことが目的であり、批判が発話意図と感じられるものは含まない。

これらの研究でわかることは、つつこみ、冗談などが出現するのは、前の文脈があつて出現する相互作用の結果であるということである。また、親しい間柄で、参加者が対立することは、お互いの信頼性を前提して、楽しめる言語行動として作用することがわかる。

2.5 評価に関する研究

2.5.1 評価の種類

まず、山路（2006）は、「ほめ」や「けなし」のような〈相手を評価する発話〉を「発話意図（親和的意図か攻撃的意図か）」「伝達内容（実際に伝えようとしている評価が肯定的か否定的か）」「発話内容（形式上の評価が肯定的か否定的か）」の3つの軸で整理している。

このような3つの軸を設定することにより、〈相手を評価する発話〉は、表2-1のように分類することができる。「発話意図」は、発話によって期待する効果を、「伝達内容」は、伝えようとしている評価を、「発話内容」は、発話に現れた評価の文字通りの意味を示す。

表 2-1 評価をする発話の分類（山路 2006）

	発話意図	伝達内容	発話内容	評価する発話の種類
A	+	+	+	親和的意図による明示的肯定評価
B	+	+	-	親和的意図による、否定的評価を装った肯定的評価
C	+	-	+	親和的意図による、肯定的評価を装った否定的評価
D	+	-	-	親和的意図による否定的評価
E	-	+	+	攻撃的意図による肯定的評価
F	-	+	-	攻撃的意図による、否定的評価を装った否定的評価（存在せず）

G	-	-	+	攻撃的意図による、肯定的評価を装った肯定的評価
H	-	-	-	攻撃的意図による否定的評価

A から D までは、形式や伝達意図が異なっている点では共通である。例えば、親しい友人の部屋を訪れて、その部屋について何か感想を述べるとすると、以下のような発話が考えられる。

A : きれいな部屋を目の前にして「きたない部屋」と言う。

B : きれいな部屋を目の前にして「きれいすぎて落ち着かない」と言う。

C : 汚い部屋を目の前にして「きれいな部屋だよ、まったく」などと言う。

D : 汚い部屋を目の前にして「きったないなあ」などと言う。

一方、E から H までは、相手の心理にマイナス方向に影響を与えようとするものである。D と H を比べると、D の「親和的意図による否定的評価」で期待していることは、けなすことによって相手との親しさを表すことであるのに対し、H の「攻撃的意図による否定的評価」は、けなすことで相手を不快にしようとするものである。

本論文で扱う親しい間柄での否定的評価は、D の「親和的意図による否定的評価」に該当するものである。

2.5.2 肯定的評価に関する研究

肯定的評価である「ほめ」に関する日本語の研究は、熊取谷（1989）がある。熊取谷（1989）では、ほめの機能、表現形式、談話構造を分析し、ほめ行動の全般的特徴を分析している。川口・蒲谷・坂本（1996）では、待遇表現としての「ほめる」表現行為を「発話意図」の観点から、「実質ほめ」と「形式ほめ」とに分け、日本語教育へ

の示唆を提示している。その他、対話インタビューからほめの機能を分析した小玉（1996）、シナリオからほめの対象や応答を分析した大野（2005）などが見られる。

「ほめ」に対する日韓対照研究としては、^{キムキョンブン}金庚芬（2005、2007、2012）がある。金（2005）では、日・韓の大学生の会話に見られるほめの対象（所持物、外見、外見の変化、才能、遂行、性格、行動）を分析した。その結果、日韓共に「遂行」に関するほめは多かったが、韓国語母語話者の場合、日本語母語話者と違って、「外見」に関するほめが多かったことが指摘されている。この結果から、韓国の大学生社会では、「外見（の変化）」に肯定的な価値を置いているのに対して、日本の大学生社会では、「遂行」「行動」に肯定的な価値を置いていると考えられるという。さらに、フェイスの観点から、日本語母語話者において、「外見」はフェイス侵害度が高い話題であるが、韓国語母語話者の場合、「外見」に積極的に言及することが相手を心地よくさせるためのポライトネスとなっているようだ。このような結果は、「ほめ」に関するアンケート調査を実施した^{ホン}洪（2007）でも指摘されており、「外見」に対する言及が、韓国語母語話者には私的領域に属する話題ではないが、日本語母語話者には私的領域に属する話題として受け止められていたという。

日韓の「ほめの談話」を分析した^{キムキョンブン}金庚芬（2007）では、会話の中で、ほめの前の先行連鎖やほめの後の後続連鎖を記述し、その機能を分析している。日本語の場合、ほめの先行連鎖を伴う場合が多く、聞き手をほめの場面に自然に取り入れ、ほめを行っていたが、韓国語の場合、先行連鎖なしでほめを行う傾向が強かった。このことから、日本語では、相互に相手のフェイスを優先するストラテジーを用いていたが、韓国語では、自分（話し手）のフェイスを優先するストラテジーが多く使われると考察している。

このように、^{キムキョンブン}金庚芬（2005、2007）の研究は、大量の日・韓母語話者の自然会話を収集し、日韓の使用傾向を分析すると同時に、ポライトネス理論を用いてその原因を考

察している。

2.5.3 否定的評価に関する研究

否定的評価に関する日本語の研究は、星野（1971、1989）、西尾（2001、2007）、関崎（2013、2014）などがある。

星野（1989）は、「マイナス敬語」としての軽卑語・罵詈雑言・悪口は、聞き手に対する親愛や鼓舞したい気持、信頼感に立った毒舌の応酬といった「プラス価値」に転ずる場合が少なくないことを述べ、待遇表現の一つとして位置付けている。

さらに、西尾（2007）は、「マイナス待遇表現」について論じている。「マイナス待遇表現行動」とは、話し手が表現対象を低く悪く（マイナスに）評価し、それを表明する言語行動である。話し手は通常、所属する言語社会の中で、対人関係を維持するためのルールを守って話しているが、それらのルールから逸脱する言語行動を行うことによって、悪態性が生じ、相手を低く待遇する効果をもつ場合があるわけである。そして、マイナス待遇表現行動の産出プロセスを図式化し、対人関係に危機をもたらす可能性があるため、配慮の必要であることを述べている。具体的な調査として、西尾（2001）は、話し相手から非礼や迷惑を受ける場面を設定し、その場面設定で、話し手がどの程度怒るか、その怒りをどの程度表現するかについて、質問紙調査を行った。そして、表現形式には、命令／禁止表現／詰問表現／マイナス評価を意味的に有する「ジャマ・メーカー」に分け、表現形式の評点ごとの出現率を地域別・世代別に示している。

関崎（2013、2014）の一連の研究では、日本人大学生の実際の会話をデータとして、否定的評価の対象、表現方法や開始部から収束の流れ全般について分析している。関崎（2013）では、否定的評価の表現方法として、〈価値づけが表現される場合〉、〈価値づけの対象となる事柄が表現される場合〉、〈価値づけの基準が言及される場合〉の三つのケースを挙げている。〈価値づけが表現される場合〉とは、否定的な価値づけの意味を

持つ言語形式を含んだ否定的評価の発話文であり、ばかだ、うるさい、おかしいなどの評価語を含んで述べているものである。〈価値づけの対象となる事柄に言及する場合は、ある事柄に何らかの否定的態度を持っていることが示唆されるものである。例えば、（会話が録音されている状況で）「名前出したな」と相手の行為を言語化する行為は、実名を出すという行為が不適切だという否定的な態度を現すものである。最後に、〈価値づけの基準が言及されるもの〉は、例えば、「それはね、大人として隠すべきだね」という発話のように、成人の基準から見ると隠すことが妥当である基準が示されているケースなどを言う。このように、発話は「事柄」「基準」「価値づけ」のいずれかの要素に言及することで、否定的評価として機能するが、どのような表現方法を用いるかはフェイスへの配慮に応じるという。このような研究は、どのような発話が否定的評価になるのかという本質的な問題を解明している点で意義がある。

その他、関崎（2014）では、実際の会話データを利用し、否定的評価の対象や表現方法、発話のきっかけとデザイン、そして、否定的評価の談話の収束について分析しており、これらをフェイス侵害度（FT 度の高低、逸脱を認識したかどうか）と関連付けて、発話のストラテジーを選択していることを指摘している。

本研究でも実際の会話データを用いて、否定的評価における前後の文脈や談話全体を対象に分析する点は関崎（2014）の研究と共通している。しかし、本研究では、ストラテジーの選択やその要因を分析するのではなく、否定的評価をどのように行っているのかという言語行動自体に焦点を当てる。つまり、どのような文脈において、どのような言語的要素を手掛かりとして否定的評価を伝えているのかに注目するということがある。さらに、否定的評価における日本語と韓国語との言語行動の比較を通して、両国のコミュニケーションの一面を明らかにする。

2.6 本研究の位置づけ

談話分析には、「話されたことば」と「書かれたことば」の研究があるが、本論文では、話されたことばである「会話」を分析の対象とする。

会話の場面には、参加人数（1対1、数人、多人数等）、メディア介在の有無（対面、電話、電話媒体であるメール・チャット・スカイプ等）、参加者間の人間関係（親疎関係、上下関係、役割関係⁷等の有無）、会話の目的（社交的な自由会話、課題解決、ビジネス等）、場面（フォーマル度など）等によって様々な形態が存在する。そして、これらの要素が絡み合い、談話全体の構造や、展開のあり方が左右される（三牧, 2013）。

本論文で対象にする会話の場面は、基本的に、親しい友人同士でおしゃべりをする日常会話の場面である。会話は、会話収集方法によって、2つのタイプに分けられる。すなわち、予め話題が設定されている会話と、話題が設定されていない会話である。話題が設定されている会話の場合は、会話を進めることにおいて、相互が課題を行っているようなふるまいを行っている場面も見られる。そのため、分析する目的によって、話題が設定された会話データと話題が設定されていない会話データは別のものとして扱い、章を分けて分析する。

分析の対象とするのは、山路（2006）の「親和的な意図による否定的評価」である。否定的評価の定義は、関崎（2013）の定義に従い「会話の相手と、相手に属する人／モノ／コトに対して特定の基準に合わない、逸脱したものとして低く価値づけそれを表現すること」とする。したがって、相手の事柄に対して、低く価値づけする機能を持つものは、全て「否定的評価」の発話として見ており、けなしや非難、冗談（批判的な内容を含むもの）、ツッコミ等の発話行為も全て含む。「否定的評価」の発話の判断基準については、3章の3.3節でより詳しく見る。

ポライトネス理論に基づくと、「否定的評価」は、FTA（Face-Threatening Act）に

⁷ 店員と顧客、医者と患者、教師と学生、上司と部下などの関係を指す。

該当する。本研究で扱っている「否定的評価」の発話は、三牧（1997）で指摘されている FTA 場面⁸と重なる。しかし、相手をけなすことは、親しさを表すコミュニケーションの特徴にもなりうる（中山 2003）。このような二面性がポライトネス・ストラテジーの選択にも影響するだろう。実際、否定的評価の発話を行うとき、FTA 軽減行為を伴う場合もあれば、FTA 軽減行為を伴わない場合もある。ただし、本研究では、ストラテジーの選択要因である、フェイス侵害度は、測ることが困難であると判断し、ストラテジー選択の要因を分析するというよりは、どのように発話行っているかというストラテジー自体に焦点を当てて見ていくこととする。そして、「否定的評価」を分析する際は、否定的評価の発話だけでなく、前後の文脈などより周辺なものまで考慮する必要があるため、談話全体を視野に置く。

本論文では、どのような状況で否定的評価が出現し（第4章）、否定的評価は日常会話でどのように表現されるのか（第5章）、相手の否定的側面を言いにくく述べているときはどのような談話的特徴があるのか（第6章）、そして、否定的評価を行った後はどのような補償行為をするのか（第7章）について詳細に分析する。また、これらにおいて、日本語と韓国語の違いが見られる場合は、それについても記述する。

⁸ 三牧（1997:63）では、Brown & Levinson の FTA のうち、脅威の程度が強い「FTA 場面」として、「(1)聞き手に対して否定的評価を述べる、(2)聞き手に対する話し手の否定的感情を述べる、(3)聞き手を非難/批判する、(4)聞き手の問題を指摘する、(5)危険な話題を持ち出す、(6)話し手と聞き手の意見が対立する、(7)聞き手の依頼/提案を断る」という場面に限定している。

第3章 研究方法

本論文は、日本語母語話者と韓国語母語話者の実際の会話における「否定的評価」を分析することを目的とする。そのため、3.1 節では、会話データはどのように収集するのかについて、3.2 節では、会話をどのように文字化するのについて述べる。3.3 節では、「否定的評価」の発話はどのように判断するのかについて基準を提示する。そして、3.4 節では、実際、会話データから「否定的評価」の発話はどれくらい出現していたのかについて示す。なお、5 章では 3.1 節で説明する会話データではなく、友人 3 人の自然会話を分析する。このデータの詳細については 5 章で説明する。

3.1 会話収集

3.1.1 会話参加者の属性

本研究では、親しい友人同士の 1 対 1 による会話を資料とした。会話収集は、2009 年 6 月から 8 月にかけて行った。日本語母語話者による会話と韓国語母語話者による会話をそれぞれ 8 会話ずつ録音したが、相手の否定的評価を述べるやりとりがみられたのは、日本語母語話者 4 組、韓国語母語話者 5 組であり、これらの会話資料を研究対象とする¹。

日本語母語話者の会話参加者は、全員筑波大学の大学（院）生であり、年齢は 20 代前半から 20 代後半である。全員同性同士の会話であり、同年齢あるいは同学年である。

韓国語母語話者の会話参加者は、5 組の中で、3 組は韓国の高麗大学の大学生であり、年齢は 10 代後半から 20 代後半である。残りの 2 組中、1 組は日本での滞在期間が 3 カ月未満の研究生の男性同士の会話であり、1 組が韓国に在住する社会人の 20 代女性

¹ 研究対象としなかった会話は、相手についてのマイナス的な印象が述べられることがなく、肯定的な評価だけ出現したり、提供された話題以外で雑談していたケースだった。

の会話である。韓国語母語話者の場合、ペアごとに、少し属性のばらつきがあるが、全ペアが同学年のごく親しい友人同士の会話であった。

各々の会話参加者の属性は以下の表の通りである。表 3-1 は、日本語母語話者の会話参加者の属性であり、表 3-2 は、韓国語母語話者の会話参加者の属性である。

表 3-1 日本語母語話者の属性

資料番号	参加者記号	性別	年齢	学年	出身
日本語会話資料①	J1	男	21	4年	茨城
	J2	男	21	4年	埼玉
日本語会話資料②	J3	男	22	修士1年	
	J4	男	23	修士1年	
日本語会話資料③	J5	女	25	修士2年	山梨
	J6	女	23	修士2年	千葉
日本語会話資料④	J7	女	21	4年	福岡
	J8	女	21	4年	香川

表 3-2 韓国語母語話者の属性

資料番号	参加者記号	性別	年齢	学年	出身
韓国語会話資料①	K1	女	23	4年	ソウル
	K2	女	22	4年	ソウル
韓国語会話資料②	K3	男	20	1年	ソウル
	K4	男	19	1年	ソウル
韓国語会話資料③	K5	男	20	1年	忠清道
	K6	女	19	1年	京畿道
韓国語会話資料④	K7	男	27	研究生	ソウル
	K8	男	27	研究生	ソウル
韓国語会話資料⑤	K9	女	25	社会人	ソウル
	K10	女	25	社会人	ソウル

3.1.2 会話収集の手順

会話参加者には、紙に書いてある話題について15分間、話すように依頼した。話題は、「相手の初対面の印象について、相手のくせについて、相手の性格について」の三つに設定した。提示された話題の中から一つまたは二つ以上の話題を選び、会話をしてもらい、提示された話題で会話に詰まったら、他の話題について話してもよいと指示した。また、なるべく普段雑談している感じで話し合ってもらおうよう依頼した。会話はICレコーダーで録音した。

会話録音の場所は教室や部屋など静かな室内で行われ、会話開始から15分が過ぎたら、筆者が室内に入って、会話を終了させた。会話終了後は、参加者の属性や会話の自然さについて聞く簡単なアンケートを行った。

3.1.3 会話データの概要

二人の親しさと、会話の流れを概観するため、二人の詳細な関係と大まかな会話の内容を以下にまとめる。

<日本語母語話者同士の会話>

- 日本語会話資料①：20代男性（J1）— 20代男性（J2） 18分

同学年の同じ研究室を使っており、研究室の机を隣で使っているようである。会話の内容は、お互いの初対面の印象や相手のくせについて述べている。J1は、J2に対して、声の大きさや、よく走っているくせ、おっちょこちょいな性格等を指摘している。J2は、J1の眉毛の様子を指摘したり、几帳面な性格を指摘している。また、J2は自身の机の汚さについて言及することで、J1の同調を得ている。

- 日本語会話資料②：20代男性（J3）— 20代男性（J4） 15分

修士課程、同じ専攻の同学年の友人同士であり、同じ研究室に所属している。会話内容は、お互いのくせや性格について述べている。J3は、J4のくせや場に外れた発言をすることを

指摘し、いじられるのが好きな性格であることを述べている。J4は、J3のおおざっぱで計画性がない性格を指摘するが、後ろでは、J3のことを輝いている存在だとほめている。

● 日本語会話資料③：20代女性（J5） — 20代女性（J6） 16分

修士課程、同じ専攻の同学年の友人同士であり、研究室の机を隣で使っている。会話内容は、お互いのくせや初対面の印象について話し合っている。J5がJ6のくせや印象を述べる場面が多く、J5はJ6について、変な動きすることや独り言が多いことを指摘している。さらに、J6の発言が不思議であることや、初対面の印象が付き合いづらかったことも述べている。J6は、J5のくせ（目の瞬きの動き）について少し言及している。

● 日本語会話資料④：20代女性（J7） — 20代女性（J8） 14分

同学年の同じサークルに所属している友人同士であり、お互いのプライベートの話をよくしている間柄である。お互いを指摘する活動は、初期の5分間で終わっており²、J8がJ7の印象として、今とは違って、自分の周りにいそうな印象ではなかったことを述べている。そして、残りの時間はJ7が彼氏とのエピソードを語り、その後は性格について、血液型と関連づけた内容が出ている。

<韓国語母語話者同士の会話>

● 韓国語会話資料①：20代女性（K1） — 20代女性（K2） 13分

同じサークルに所属しており、同学年であるが、K1が一つ年上であるため、K2はK1を姉さん（オンニ）と呼んでいる。会話内容としては、初対面で会ったときのお互いの印象やお互いの恋愛スタイル等について話している。K2は、K1について、パーマ姿の初対面の印象や男を束縛する性格について指摘しており、K1は、K2と知り合った当時の事件やK2の男とよく会う性格について述べている。

● 韓国語会話資料②：20代男性（K3） — 20代男性（K4） 15分

同じサークルに所属しており、同学年であるが、K3がK4より一つ年上であるため、K4はK3を兄さん（ヒョン）と呼んでいる。会話内容として、最初の5分以内ではお互いの初対面について語っており、その他の時間では、歯科で高額を払ったエピソード等、別の話

² 提示した話題で話すことがなければ、別の話題で話してもいいと指示している。

題で話している。K3 は、K4 に対して、学期の初期の頃一人で遊んでいたことを指摘している。K4 は、K3 の気難しかった初対面の印象について言及するが、それ以外は K3 に対して述べていない。

● 韓国語会話資料③：20代男性（K5）— 10代女性（K6）15分

同じサークルに所属しており、同学年であるが、K5 が K6 より一つ年上であるため、K5 は K6 を兄さん（オッパ）と呼んでいる。唯一の男女ペアであり、言い争いや対立の場面が多く見られた。会話内容は、初対面の印象や性格について述べている。K5 は、K6 について、目障りだった化粧の様子や、酒癖、普段連絡をよくしないことを指摘している。K6 は、K5 について、女と仲良しである性格や、普段大学の班の活動をもっとしてほしいことを述べている。

● 韓国語会話資料④：20代男性（K7）— 20代男性（K8）13分

修士課程、同じ専攻の同学年の友人同士であり、同じ研究室に所属している。二人とも来日して1年を少し過ぎており、K7 が半年先に来日している。会話内容は、お互いの初対面の印象や、ファッション、そして、習慣や性格について話している。K7 は、K8 について、K8 が送ったメールの内容を見て初めは独特な人であると思ったことを述べている。K8 は、K7 について、韓国人らしいファッションであり、外見を見てヘビースモーカーだと想像していたことを指摘している。

● 韓国語会話資料⑤：20代女性（K9）— 20代女性（K10）7分

二人とも社会人であるが、高校の時から親友である。会話内容は、初対面の印象やお互いの普段の話し方について述べている。K9 は、K10 の普段の話し方が冷たいことを指摘しており、それに対して、K10 は、K9 の初対面の印象が冷たかったことについて言及している。

以上のように、各ペアにおいて少しずつ属性が異なっているが、お互い1年以上の付き合いで、普段プライベートの話をしており、同学年の上下関係が存在しない親しい友人同士である点は一致している。

3.1.4 会話の自然さ

本論文で対象にする会話の特徴は、基本的に、親しい友人同士でおしゃべりをする場面であるが、予め話す話題が設定されている会話と話題が設定されていない会話がある。話題が設定されている会話の場合は、話題について話さなければいけないという制約があるため、話題導入の仕方において、課題を行っているように始めるなどの不自然さも存在した。例えば、以下のような会話が見られた。

【会話例 3-1】日本語会話資料②

- 01 J3: T {J4 のあだ名} けっこう:
 02 (2.2)
 03 J3:→ .hh くせ:: (0.6) .hh 会話のとき, う::んとか:→「くせ」という話題を冒頭に置く
 ((省略))
 14 J3:→ ° それから° あと目線を: →「あと」と列挙している
 15 J4: うん
 16 J3:→ 下にそらす. →言いきりの形式を使用
 17 J4: そうだね. hhhh .hh
 18 (2.6)
 19 J3: じゃ: 逆に: (.) おれのくせ::= →「逆に」と相手に発話の順番を指定
 20 J4: くせ::: くせ::: →「くせ」について考えていることを示す

上の会話のように、会話の進行において、相手の特徴を「言いきり³⁾」の形式で列挙したり、順番取りの仕方として、次の人に話題を言わせたりすることで、両者が課題を行っているように振る舞っている。全ての会話がこのように行われたわけではないが、このような自然会話とは少し異なるやりとりがしばしば見られた。

このように、多少自然さが欠けている場面も観察されるが、話題が設定されている会話の場合も、話し手と聞き手が直接会って相互行為の中で行われる会話であるため、相

³⁾ 発話文末の要素を追加しない形式

互行為や言語行為のストラテジーを分析するのに価値があると考えられる。

3.2 文字化の方法

3.2.1 文字化の記号

文字化の表記は、音声的情報をできるだけ正確に記述することを原則とする。会話資料の文字化の方法は、Gail Jefferson が会話分析のために開発した表記の方法を用いている。

- ・ 語尾の音が下がって区切りがついたことはピリオドで示される。
- , 音が少し下がって弾みがついていることはカンマで (,) で示される。
- ? 語尾の音が上がっていることは疑問符 (?) で示される。
- [複数の参加者の発する音声が重なり始めている時点は、角括弧 ([) で示される。
- [] 重なるの終わりが示されることもある。
- = 二つの発話が途切れなく密着していることは、等号 (=) で示される。
- () 聞き取り不可能な個所は、() で示される。空白の大きさは聞き取り不可能な音声の相対的な長さに対応している。
- (言葉) 聞き取りが確定できないときは、該当文字列が (言葉) で括られる。
- (m.n) 音声途絶えている状態にあるときは、その秒数がほぼ 0.2 秒ごとに () 内に示される。
- (.) 0.2 秒以下の短い間合いは、(.) という記号で示される。
- 言葉:: 直前の音が伸ばされていることは、コロンの数で示される。コロンの数は引き伸ばしの相対的な長さに対応している。
- 言- 言葉が不完全なまま途切れていることは、ハイフンで示される。
- h 呼気音は h で示される。h の数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している。
- .h 吸気音は .h で示される。h の数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している。

- 言葉(h) 笑いながら発話が産出される時、そのことは、呼気を伴う音の後に(h)を挟むことで示される。
- ¥ ¥ 発話が笑いながらなされているわけではないが、笑い声でなされることもある。そのときは、該当箇所を(¥)で囲む。
- 言葉 音の強さは下線によって示される。
- ° ° 音が小さいことは、該当箇所が°で囲まれることにより示される。
- ↑ ↓ 音調の極端な上がり下がり、それぞれ上向き矢印(↑)と下向き矢印(↓)で示される。
- > < 発話のスピードが目立って早くなる部分は、左開けの不等号と右開けの不等号で囲まれる。
- < > 発話のスピードが目立って遅くなる部分は、右開けの不等号と左開けの不等号で囲まれる。
- (()) 発言の要約は、二重括弧で囲まれる。
- { } 非言語行動やその他の注記は{ }で囲まれる。

3.2.2 韓国語の表記法

韓国語の表記法については、^{キムジンナ}金珍娥 (2013) の韓国語の表記法と^{イウンミ}李恩美 (2008) の論文にある BTKS (宇佐美他 2007) の特徴を参考にして、本論文で採用している特徴を以下に示す。

- 「読みやすさ」を重視し、韓国語ではハングル文字を使用する。
- 正書法に合わせて「分かち書き」を行う。
- 基本的には韓国語表記の慣習に従って한글맞춤법 (ハングル綴り法) で表記するが、話しことばの特徴を反映するために、音声的情報をできる限り正確に記述する。例えば、強調された発音、音の脱落、通常の発音からの逸脱が大きかったものは、発音された通りに記す。

例) 어쩔(어쩌면) (もしかしたら)、달른거야(다른거야) (ちがったの)、갈애(갈아)

(みたい)、누굴(누구를) (誰かを)、뭐했냐(뭐했어) (何してた)、
 뭐든(무엇든) (何でも)

- 間投詞や擬態語の類は発音に最も近いと判断される表記を用いる。

例) 헉, 아휴, 껍떡, 좃, 쫓, 쫄쫄쫄

なお、日本語の訳は、「意識」を基本とするが、日本語にない表現は、直訳し、脚注で類似した表現を解説することを原則とする。

3.3 否定的評価の定義と判断基準

3.3.1 否定的評価の定義

本論文で扱う「否定的評価」は、親しい友人同士で行われるけなし・冗談・悪口などを含むものであり、「ほめ」の反対概念である。定義としては、関崎 (2014:12) の「否定的評価」の定義をそのまま用いて以下のようにする。

「会話の相手と、相手に属する人／モノ／コトに対して特定の基準に合わない、逸脱したものとして低く価値づけ、それを表現すること」

一般的に「評価」の言語行動とは、評価を含んだ単語 (いい／悪い、すばらしい／ひどい等) や価値づけされたもの (大きい、おかしい) を指す。しかし、会話の中では、特定の言語形式を含まなくても評価として機能する発話もある。例えば、以下のような相手の行動を描写する発話も「否定的評価」の発話とする。

【会話例 3-2】日本語会話資料①

01 J1:→ 昨日もなんか::(.) すごい短時間のときに- たんじ- 短時間の中で-
 なんか2回ぐらいこぼしたよ(h)ね。 〈否定的評価〉

発話例のように、「ものをこぼす」ことは、大人の行為として、社会的規範・常識から外れる行為であり、相手がそのような行為をしたことを言語化して表現することは、相手を低く価値づける機能を持つ。これは、関崎（2013）の否定的評価の表現方法の中で、評価の対象となる「事柄」について言及したものに該当する。このように、相手の否定的な行為を指摘することも「否定的評価」の発話とする。

さらに、出現する文脈や状況から、「否定的評価」として機能する場合もある。例えば、以下のような会話例がある。この会話は、普段仲がよくて、研究室の机が隣である二人の会話である。

【会話例 3-3】日本語会話資料①

- 01 J2: 自分のつくえも:: .hh なんかちょっと:: (.) 掃除しようかな:: と思ったら
めちゃくちゃしちゃうよでも.
- 02 J1:→ .hh .hh ほ(h)ん(h)と hh?=
〈否定的評価〉
- 03 J2: =¥うん¥
- 04 J1:→ .hh 見たことな(h)い.
〈否定的評価〉

J2 は、「研究室の机も掃除しようとしたらめちゃくちゃしちゃう」と自分の行動を述べている。この事柄について、J1 は笑いながら「ほ(h)ん(h)と?」と疑いを示しており、「見たことな(h)い」と相手の行動を否定している。これは、前の話者が「掃除をする」という社会的な通念から肯定的な価値を持つ行為をしたことを述べているため、疑いを示したり、否認したりすることは、相手を低く価値づける結果になる。

このようにある状況や文脈で、ある発話がどのように否定的評価として機能するかについての詳細は、第4章の否定的評価の出現状況で述べる。

「価値が低いと価値づける」基準においては、社会的規範や一般常識、道徳・倫理などがある（関崎 2014:12）。このような基準は、各社会で異なる場合もあれば、国によ

って異なる場合もある。また、個人の習慣・信念が含まれることもある。しかし、否定的評価の話し手と受け手の信念・通念が一致しなければ、受け手が疑問を示す場合もある。例えば、以下のような韓国語の会話例がある（日本語で訳されている）。K5は、自身の酒癖として、酔っ払ったら隣にいる人に抱き付くという情報を述べている。

【会話例 3-4】韓国語会話資料③

- 01 K5: 僕は酔っ払ったら:: (1.0) こう抱きつく
((省略))
- 06 K6:→ すごくこわい酒癖だね: <否定的評価>
- 07 K5: なんでこわいの? 価値づけの不一致
- 08 (0.5)
- 09 K6:→ いきなり抱きつかれたらこわいでしょう:: <否定的評価>
- 10 K5: あ、そんなすごく そんなに襲うってわけじゃないけど::
- 11 K6:→ それでも:: とにかく: 気持ち悪いでしょ:: <否定的評価>

K6は、K5が酔っ払ったら抱きつく習慣があることに対して、「こわい酒癖である」と否定的に評価している(06行目)。人に抱きつく行為が「こわい」と価値づけされたことに対して、K5は、「なんでこわいの?」とK6の価値づけに疑問を示している。ここでは、両者の価値づけが一致しないので、K5は、相手の否定的評価を受け入れていない。そして、その後、K5は、「そんなすごく そんなに襲うってわけじゃないけど::」と抱きつく程度に対してK6が誤解していると弁明するが、このような弁明により「抱きつく」という行為に対して、両者が考えている程度の調整を行っている。この弁明に対して、K6は、「それでも:: とにかく: 気持ち悪いでしょ::」といいながら、程度の問題ではなく、抱き付く行為自体が「気持ち悪い」行為であると否定的な態度を示している。

この会話例で見られるように、価値づけの基準は、社会集団だけでなく、個人でも異

なる場合があるが、否定的評価を行う側は、あくまでも社会常識的な基準からして、逸脱していると捉えるように否定的評価を行っている。

本研究では、このように、「評価」の概念を、表現形式のみを指すのではなく、発話に込められた話者の態度や働きかけの姿勢を表すものを含め、相手の事柄に対して、否定的な態度を示すものは全て「否定的評価」の発話をして捉えた。

3.3.2 否定的評価判断基準

関崎（2014）では、否定的評価として機能しているか否かの判断として以下の2つの基準を挙げている。

- 発話の内容や口調から、話者が対象を低く価値づけていると判断できること
- 当該の発話の聞き手が反論や修正、弁解、謝罪等を行っていること

（関崎 2014:43）

本論文でも上記の判断基準に従って判断すると共に、対象を低く価値づけている発話として、具体的に、以下のような表現を用いているものを「否定的評価」の発話と判断した。

① 思考・主観的判断の言及

相手の普段の行動、性格、外見などについて否定的な価値判断が含まれており、評価語を用いて述べる行為である。

例) 日：せいかく::? おおざっぱ. hhhh

韓：안 어울렸던 거 같애. (似合わなかったみたい)

② 自己感情の表明

相手の行動や性格、外見などについて、自身の否定的感情を表明する行為である。

例) 日 : え(h):: どうしたの::

韓 : 슬프다, 실망이다. (悲しい、がっかりだ)

③ マイナス的な行動の指摘

相手について見たり、聞いたりした情報の中で、(社会通念から) マイナスイメージを持つ行動や事実について取り上げている。

例) 日 : 昨日もなんか:: ((略)) 短時間の中で2回ぐらいこぼしたよね.

韓 : 학기초에 막 혼자 놀(h)더라고;. (学期の初期に、一人で遊んでてさ::)

④ 相手に不利な状況・事実の指摘

相手の否定的評価の根拠になる事実や相手に不利な情報を述べている。

例) 日 : そういうなんかアジアンのワンピースとか、なんかロングスカートとか、私今まであんまり着とる子みたことなかったけん.

韓 : 그런 옷 잘 안 입어. (そんな服、あまり着ないよ)

⑤ 忠告・助言

評価や何らかの反応を求められる場面において、相手のマイナス的な行動について、改善するように働きかける発話は、否定的評価として機能する。

例) 日 : しっかりしたほうがいいんじゃない? hh

韓 : 반 활동을 좀 더 많이 할 필요가 있어. (もっと班の活動をすべきだよ.)

以上のような判断基準から、否定的評価の発話を抽出した。抽出の正確性を高めるた

め、日本語母語話者2名、韓国語母語話者2名にも、否定的評価の判断に協力してもらった。それぞれの4人には、以上の判断基準を提示し、会話データを一緒に聞きながら、「否定的評価」の発話として判断できるのか、意見を聞いた。その結果、日本語データの場合、一致率⁴が90%、韓国語データの場合、一致率が93%であった。判断が一致しない部分においては、それぞれの意見を交わしながら訂正する作業が行われた。そして、意見が一致しなかったものについては、否定的評価の対象に入れなかった。

否定的評価と判断されるものは、文字化の記号として、矢印「→」で表示した。会話データから、「否定的評価」の発話と判断される発話数を3.4節で示す。

3.4 否定的評価の発話数

収集した会話資料では、日本語母語話者と韓国語母語話者の否定的評価の発話数⁵は、表3-3のようになった。日本語母語話者の否定的評価の発話数は95回、韓国語母語話者の発話数は99回、計194回である。

表 3-3 日本語母語話者と韓国語母語話者の否定的評価の発話数

	会話資料分量 (時間)	否定的評価の発話数
日本語母語話者	63分 (4組)	95
韓国語母語話者	63分 (5組)	99
合計	126分 (9組)	194

日本語母語話者と韓国語母語話者の各々のペアにおける否定的評価の発話数は次のようにみられる。表3-4は、日本語母語話者のペアごとの否定的評価の発話数であり、表3-5は、韓国語母語話者のペアごとの否定的評価の発話数である。資料の録音時間が

⁴ 一致率＝一致数／(一致数＋不一致数)×100で計算

⁵ 杉戸(1987)の定義に従い、一人の参加者のひとまとまりの音声言語連続(笑いや短いあいづちを含む)を、他の参加者の音声言語連続やポーズによって区切られる単位としてみた。

少しずつ異なるため、10分あたりの発話数を換算して示した。

表 3-4 日本語母語話者 4組の否定的評価の発話数

日本語母語話者	資料分量 (時間)	否定的評価の 発話数	10分あたり 発話数
会話資料① (J1-J2)	18分	31	17.2
会話資料② (J3-J4)	15分	24	16
会話資料③ (J5-J6)	16分	33	20.6
会話資料④ (J7-J8)	14分	7	5
合計	63分	95	平均 14.7

表 3-5 韓国語母語話者 5組の否定的評価の発話数

韓国語母語話者	資料分量 (時間)	否定的評価の 発話数	10分あたり 発話数
会話資料① (K1-K2)	13分	21	16.2
会話資料② (K3-K4)	15分	14	9.3
会話資料③ (K5-K6)	15分	39	26
会話資料④ (K7-K8)	13分	19	14.6
会話資料⑤ (K9-K10)	7分	6	8.6
合計	63分	99	平均 14.9

10分あたりの否定的評価の発話数を見ると、日本語母語話者の場合、否定的評価の発話数が最も多かったのは、会話資料③の J5-J6 ペアで、10分あたりの発話数が 20.6 回である。発話数が 2 番目に多かったペアは、会話資料①の J1-J2 ペアで、10分あたり 17.2 回の否定的評価が現れていた。会話資料④の J7-J8 ペアの場合、他のペアに比べ、否定的評価の発話が 10分あたり 5回であり出現していなかったが、これは、別の話題で話している時間が多かったためであろう。

韓国語母語話者の場合、否定的評価の発話数が最も多かったのは、会話資料③の

K5-K6 ペアであり、10分あたりの発話数が26回現われていた。この資料は、唯一男女ペアであったが、お互いけなし合う場面が多かったからである。次に、会話資料①のK1-K2 ペアが16.2回、会話資料④のK7-K8 ペアが14.6回で、ほぼ同じ発話数が出現していた。会話資料②のK3-K4 ペアは9.3回、会話資料⑤のK9-K10 ペアは8.6回で、否定的評価が比較的少なかった。

以上、日本語母語話者と韓国語母語話者の各々のペアごとに、否定的評価の発話数を見てみたが、ペアによって、発話数に大きな違いがあることがわかる。

3.5 本章のまとめ

本章では、会話の収集方法や本研究の分析対象である「否定的評価」の定義や判断基準を提示し、否定的評価の発話数を記述した。第4章からは、具体的な分析に入る。

第4章 否定的評価の発話状況と日・韓の比較

4.1 はじめに

我々は、ごく親しい間柄で、会話の途中、あるいは普段の相手の発話や行動に対してけなしたり、非難したりする場合がある。本章では、まず、否定的評価がどのような状況で出現しているかを概観する。相手に対する否定的評価は、話し手が思い出したことを自発的に述べる場合もあれば、相手が行った直前の発話や行動に対して言及する場合もある。

このように、否定的評価が出現する様々なきっかけや状況があるが、まずは、否定的評価の発話がどのような状況で、何を対象として行われているのかについてそのパターンを分類する。また、日本語母語話者に比べ、韓国語母語話者の否定的評価がより強く、唐突である印象があるが、この原因を探るため、両国の否定的評価の発話状況の頻度数を比較する。

4.2 節では、関連する先行研究を紹介し、4.3 節では、日本語と韓国語の会話例から否定的評価の出現パターンを分類する。4.4 節では、日本語母語話者と韓国語母語話者の出現パターン別頻度数を比較し、韓国語母語話者の場合、なぜ否定的評価をより唐突に行っているように見えるかを考察する。4.5 節では、第4章の内容をまとめる。

4.2 関連する先行研究

否定的評価の反対の言語行動である「ほめ」の談話を分析した金庚芬^{キムギョンブン} (2007) は、日本と韓国の大学生の会話データを用いて、「ほめの談話」の流れを分析し、やりとりの特徴を明らかにしている。そして、ほめの連鎖の前にほめと何らかの関連のあるやり取りを「先行連鎖」として見て、先行連鎖があるかないか、先行連鎖が誰によるもの(ほ

め手か受け手か)が多いか、どのようなストラテジーを使用しているかを分析している。その結果、日本語ではほめる前にそれに関連する話題を導入するが、韓国語ではいきなりほめることから始まるやりとりが多かった。また、ほめ手主導の先行連鎖は、ほめの対象を話題として導入することで、対象に対する関心を示し、相手もその話題に注目させる機能をしていることを指摘した。受け手主導の先行連鎖は、ほめの対象を話題として導入し、相手の「ほめ」を引き起こす機能を担っていることを証明した。

また、からかいの表現フレームを分析した水島(2006)は、実際のからかい表現の相互パターンでは、からかい表現が、からかい手により何の前触れもなく談話上にもたらされることはあまり見られず、直前に位置する受け手の発話や行動に呼応する形で導き出される場合の方が圧倒的に多いことを述べている。中には、受け手が、自身のからかい発話を積極的に誘導する例もみられた。

以上のような研究があるが、「否定的評価」も何らかの先行する発話や状況があって、出現することが多いと思われる。本章では、否定的評価の発話がどのような状況で、何をきっかけとして出現するのか、そのパターンを分析する。また、日本語母語話者と韓国語母語話者の出現数に違いが見られる場合、その相違点についても記述する。

4.3 否定的評価の発話状況

否定的評価は、我々の会話の中で、いつ、何をきっかけとして出現するのか。便宜上、否定的評価を行う側の参加者を「行い手」、否定的評価を受ける側の参加者を「受け手」と呼ぶことにする¹。

否定的評価の発話の出現状況において、ある対象について否定的評価を行うきっかけを誰が提供するかにより、「行い手主導の否定的評価」「受け手の言動に対する否定的評

¹ ただし、相手の否定的評価を言い返すとき、受け手が同時に行い手になる場合もある。例えば、J1がJ2に対して、「お前の部屋、汚いな」と否定的評価を行ったとき、J2がJ1に対して、「お前のほうが汚いよ」と言い返す場合がある。このような場合、J2は、否定的評価の受け手でありながら、行い手にもなっている。

価」「受け手の自己否定に対する同調」に分けることができた。その分類の仕方については図4-1に示す。

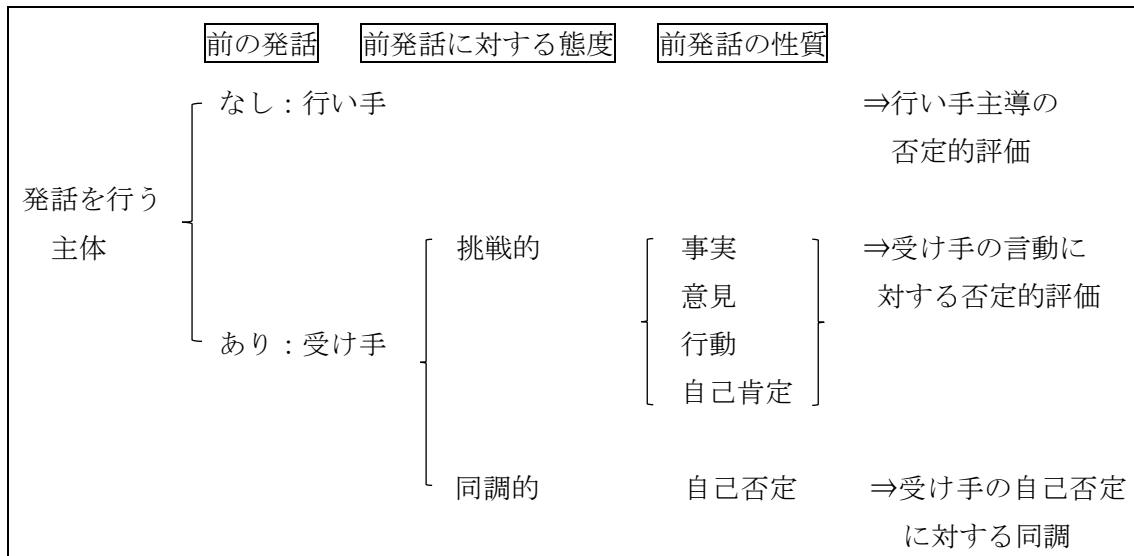


図 4-1 否定的評価の発話状況

「行い手主導の否定的評価」とは、否定的評価の行い手が自発的に、普段あるいは過去の相手について、ネガティブに思っていたことを話題として取り上げ言及する行為である。「受け手の言動に対する否定的評価」は、会話を行っている最中、受け手の言動に何らかの逸脱的な要素があり、それに対して、批判・非難をすることで、否定的評価が行われるパターンである。そして、「受け手の自己否定に対する同調」の否定的評価は、受け手が自身の不利な情報（ネガティブな側面、失敗談等）を述べ、行い手がそれに同調することで否定的評価が行われるパターンである。それぞれのパターンを会話例から分析する。

4.3.1 行い手主導の否定的評価

まず、否定的評価を行う「行い手」が相手の普段あるいは過去の事柄（行動、性格、外見等）について思っていたことや、感じたことを話題として導入し、否定的評価の会

話を進めるパターンを見てみる。このようなパターンは、話題導入の表現がある場合もあれば、話題導入の表現なしで、否定的評価が行われる場合もある。

① 話題導入の表現がある場合

否定的評価の行い手は、否定的評価を行う前に、評価の対象に関連する質問や確認をしたり、当時の状況を説明するような話題導入の表現を用いることがある。このような話題導入の表現は、金（2007）のほめの先行連鎖と同じく、評価を行う対象に注目をさせ、否定的評価を行う手続きとして作用する。

【会話例 4-1】では、J5 が J6 の初対面の印象について述べる場面である。01 行目で、J6 がこの会話実験の話題をことばで述べようとしているとき、J5 が「最初なんだっけな：なんか」と思い出した事柄を言い出そうとしている（02 行目）。

【会話例 4-1】 日本語会話資料③ 11:05

- 01 J6: 最初 (.) どんな印象[いだいてるか]
 02 J5: [最初なんだっけな：なんか .h
 03 J6: [う::ん
 04 J5: [で(h)も ¥最初に会ったのが自治会の集まりだったじゃん:¥
 05 J6: そう.
 06 J5:→ で自治会の集まり出たらす:ごいいやそんな顔して(満面の)h.
 07 J6: あほんと:↑::
 08 J5:→ ¥ちょうめんど[くせ::¥みたいな(h)
 09 J6: [うっそ::
 10 J5:→ もう[まじ帰りてえみ(h)た(h)[いな::
 11 J6: [() [hhhhh うそ::
 12 J6: へ:: ° 自覚なかつ t°

J5 は、「最初なんだっけな：なんか」と初対面の印象について、最初の記憶に戻って

いることを表現している。そして、笑いながら、04行目で「で(h)も ♪最初に会ったのが自治会の集まりだったじゃん:♪」と二人が最初に会った場面が自治会の集まりだったことを挙げ、相手に確認を求めている。それに対して、J6が「そう。」と短く確認を与えている。このように、二人が初めて会った場面に関して、二人の共通認識が成立した後、J5は、「で自治会の集まり出たら」と当時の状況を言い出し、「す:ごいいやそんな顔して(満面の h).」と相手の当時の表情が「いやそんな顔」だったことを指摘している。

このような指摘に対して、J6は、「あほんと:↑」と、新たに知った情報のように驚きの反応を示している。その後、J5は、続いて08-10行目で、「♪ちようめんどくせ::♪みたいな(h)」「もうまじ帰りてえみ(h)た(h)いな::」と相手の過去の「いやそんな顔」について、相手の感情になったように描写している。

このように、話し手が、相手と最初に会った場面の確認を行うことで話題を取り入れ、その当時の場面に対する共通認識を確立した後、当時の相手の否定的な行動（いやそんな顔をしていたこと）について言及しているのである。

韓国語の会話例でも否定的評価の対象が過去の事柄である場合、当時の状況や出来事を叙述して、話題を導入することが見られた。【会話例 4-2】は、韓国語母語話者の会話で、K2がK1の初対面の印象を述べる場面である。K2は、K1に対する第一印象は、入学した時、パーマをかけていた姿であったと述べている。

【会話例 4-2】 韓国語会話資料① 00:24

01 K2: 첫인상?

K2: 第一印象?

02 (2.0)

03 K2:→ 그것밖에 생각 안 하는데. (0.8) 언니가: (1.0) 입학했을 때:: (.) 머리를 파마를 하고 와서: HAHHAHA

K2:→ あれしか 思い出せないけど. (0.8) 姉さんが: (1.0) 入学した時:: (.) 髪にパーマを かけて来て: HAHHAHA

- 04 K1: 너무 강렬했구나.
 K1: {印象が} あまりにも 強烈だったんだ.
- 05 K2:→ .hh .hh 그게 첫인상이 너:무 강렬해서::=
 K2:→ .hh .hhそれが 第一印象が す:ごく 強烈で::=
- 06 K1: =아휴:[:::
 K1: =ああ:[:: {ため息をつく擬態語}
- 07 K2:→ [나는 언니가: (0.4) 나이가 훨씬 더 많은 줄 알았잖아(h), 과마하고
 와서::hh
 K2:→ [私は 姉さんが: (0.4) 年が すごく もっと 上かと思ってたよ(h).
 パーマかけて きて::hh
- 08 (0.8)
- 09 K1: 실수였어.
 K1:ミスだった.

K2は、初対面の場면을挙げて、K1の初対面の印象を述べている。最初、K2は、「第一印象?」と自問の形で話題を挙げ、2.0秒の沈黙が生じた後、「あれしか思い出せない。」と「あれ」というダミー語²を用いて、何かを思い出したことを言い出している。そして、「姉さんが: (0.8) 入学した時::(.) 髪に パーマかけて来て:」まで述べて、「ハハハ」と大きく笑っている。パーマをかけて来た事実まで述べて、述部をほのめかしているが、その後大きく笑うことにより、その姿がおかしかったことが予測される。実際、受け手であるK1は、「強烈だったんだ。」(04行目)と相手が言っている意図を予測し、その印象を自分で評価付けている。この発話に対して、K2は、「それが 第一印象が す:ごく 強烈で::」と同調する形で否定的評価を加えると、K1は、「ああ::」というため息によって応答している。続いて、K2は、07行目で、K1のパーマ姿の第一印象を見て、自分よりすごい年上に見えたという感想を述べている。

この会話例では、初対面の印象の中で、入学当時、K1のパーマ姿が印象的であった

² 「あれ」の指示対象が後続の発話の中で特定されることを予示・予告しているものである(林2008)。

ことを述べるが、入学当時の場面に戻ることで、話題を取り入れている。このような話題導入の表現は、評価の受け手に、評価の対象に関して注目を向ける役割を担っている。杉浦（2011）は、評価対象について参加者間で認識的均等（状態）を確立することで、評価発話の構築基盤を作り出し、評価発話が産出されることを指摘している。つまり、自分の評価が相手と共有できるものであるという見通しに至って評価がなされるのである。

② 話題導入の表現がない場合

否定的評価の行い手が評価の対象を取り入れる時、否定的評価の対象が事前に話題として導入されることなしに否定的評価が開始される場合もある。【会話例 4-3】では、J2 が J1 のくせを指摘する場面である。J1 と J2 は、「くせ」とはどのような類のものがあるか話している中、自分がどのように足を組んでいるかについて話し合う。その後、J2 が J1 の「くせ」の一つとして、眉毛の様子について言及し始める。

【会話例 4-3】 日本語会話資料① 07:03-

01 J2:→ .hhh でもくせね:(.) ボッチのね、くせはね::

02 J1: うん.

03 J2:→ なんかね、変なときにわらうとね、眉毛がこう八の字になる.

04 J1: ehe[hehehe

05 J2: [hhhhh

06 J1: え>いついついつ.<

07 J2: いや(h) なんやろう (.) へ↑:: (.) 笑ってるとき.

01 行目から、J2 は、息を吸いながら「でもくせね:」と、新しい話題を転換するマーカーを使って言い出しており、「ボッチ{J1 のあだ名}のね、くせはね::」と相手のくせについて言及し始めている。この発話に対して、J1 は、「うん」とあいづちのみを発し、

聞く姿勢を維持している。続いて、J2は、「なんかね、変なときに笑うとね、眉毛がこう八の字になる。」と相手が笑うときの眉毛の様子が「八の字になる」とおかしな姿を描写している。

ここでは、前の会話例のように、否定的評価の対象に関する事前の話題導入なしに、相手の否定的評価を行っていることがわかる。しかし、それ以前の会話と全く違う話題の中で、否定的評価を行っているのではなく、「くせ」という話題の枠組みの中で、相手のくせの一つとして、眉毛の様子を取り入れているのである。

以上、否定的評価の行い手が話題を取り入れて自発的に相手の否定的評価を行う例を見た。このような会話例は、話題が「相手の初対面の印象について」「相手のくせについて」と設定されているため、相手の否定的評価をせざるを得ない状況が作用しているだろう。行い手は、普段・あるいは過去の相手の行動や外見の中で、何らかの逸脱的な要素を取り上げ、それについて、ネガティブに述べているのである。

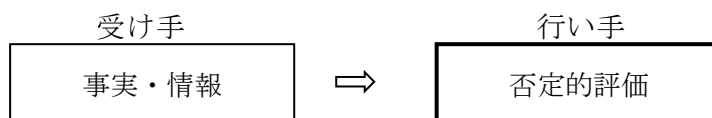
4.3.2 受け手の言動に対する否定的評価

「行い手主導の否定的評価」が、相手（受け手）の過去あるいは普段の事柄に対して、ネガティブに言及していることに対し、「受け手の言動に対する否定的評価」とは、会話の最中、受け手の直前の発話や行動に逸脱的な要因があり、それに対してネガティブに言及することである。このような場合、評価の対象が直前のものを指すため、話題導入の表現なしで否定的評価が行われる場合が多い。否定的評価の直前の受け手の発話や行動がどのような性質のものかにより、パターンを分類する。

① 受け手の情報提供に対する否定的評価

話者が自分に属する情報や事実を述べたとき、それに対して、否定的に評価する場合がある。ここで述べる事実や情報は、ポジティブなことでもなく、ネガティブなことでも

もない、中立的なものであり、主観的判断を含まない事柄である。



次の【会話例 4-4】では、受け手が述べる事実に対して、行い手が、評価を下すことが見られる。前の会話で、J4 が J3 の性格について、「好きなことには計画派であるが、好きじゃないことは時間に追われている」と指摘したことに対して、別の話題が挟まれるが、J3 自身が再度その話題を持ち出し、03-05 行目で、「好きなことに関しては、好きでやる」と自身の性格に関する情報を述べている。

【会話例 4-4】日本語会話資料② 04:45

- 01 J3: でももし:=
 02 J4: =う[ん
 03 J3: [まあ好きなことに関しては:
 04 J4: うん
 05 J3: まあ好きでやるから: まあ::
 06 J4: う::ん
 07 (1.0)
 08 J3: ° ね, (やりたいん)ですよね° =
 09 J4:→ =そこまでやるか::とか思ったのね hhhh
 10 J3: >やるやる.<
 11 J4:→ そこまでやるか(h)::みたいな.
 12 J3: そう. やるよ. そりゃ::
 13 J4: hh

J3 は、03-05 行目で、「好きなことに関しては好きでやる」と自分の性格について言及している。これは、自分の性格に関する情報である。そして、「(やりたいん)ですよね」と、

自身の願望を独り言のように小さい声でつぶやいている。03-05、08 行目の発話は、以前の会話で、J4 が J3 の性格について、好きにことには相当時間をかけていると指摘したことに対しての弁解として行われている。

このような、相手 (J3) の性格に関する情報に関して、J4 は、「そこまでやるか…:とか思ったのね」と自身の否定的な感想を述べて笑っている。これは、相手の好きなことに関して好きなだけやるという事実に対して、「そこまでやるか」とその程度の度が過ぎていることを批判している。そして、この発話を述べた後、笑うことにより、相手領域への侵害度を軽減している。

韓国語の会話例も見てみよう。【会話例 4-5】では、受け手が述べる事実に対して、行い手が、評価を下すことが見られる。K3 は、K4 が学期初期の時、一人で遊んでいたことを指摘する。すると、K4 は、01 行目から、弁明として、新入生オリエンテーションの後、一週間学校に行かなかったことを述べている。これに対して、K3 が当時何をしていたか質問すると、K4 は、オーストラリアに行っていた事実を話す場面である。

【会話例 4-5】 韓国語会話資料② 01:43

01 K4: 어 그러니까, 내가: 처음에: (.) 새터 갔다가: (.) 뭐지 일주일 동안: (.) 학교 안 나갔잖아:

K4: うん だから、僕が: 最初に: (.) オリエンテーション行って: (.) なんだけ一週間 (.) 学校 行かなかったじゃん:

((省略))

05 K3: 뭐 했냐 그때?

K3: 何してた その時?

06 K4: 그때, 유럽- 호주 갔어. 호주.

K4: その時、ヨーロッパ- オーストラリア 行った. オーストラリア.

07 K3: 그때?

K3: その時?

08 K4: 어, 그때 갔었어.

- K4: うん、その時 行ってた.
- 09 K3:→ 배신자네:.
K3:→ 裏切り者だ:.
- 10 K4: 왜:.
K4:なんで:.
- 11 K3:→ hh배신(h)자네(h): h
K3:→ hh裏(h)切り者だ(h): h
- 12 K4: hh 그때 갔다 오니까 다 친해져 있더라고, 딱 조 애들은 또-
K4: hh その時 行って 来たら 皆 仲よく なっててき、組の子たちは また-

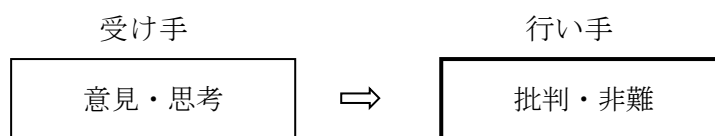
05行目で、K3がK4に「何してた、その時?」と質問すると、K4は、オーストラリアに行った事実を述べている(06行目)。その情報に関して、K3は、「その時?」と聞き返し、K4は、「うん、その時行ってた。」と答える。そしてK3は、K4が一人でオーストラリアに言った事実について、「裏切り者だ」と非難をしている(09行目)。

このように、K4がオーストラリアに行ったことは、客観的な事実である。しかし、K3は、K4が当時一人でオーストラリアに行った事柄に対して、「裏切りものだ」と否定的な評価をしている。そして、このような否定的な価値づけが納得できないK4は、「なんで」と理由を聞きながら相手の否定的な価値づけを拒否しているが、これに説明を与えず、「hh裏(h)切り者だ(h):h」と笑いながら前のことばを繰り返している。

このように、受け手が述べる客観的な情報や事実に対して、行い手が否定的評価を行うパターンがある。

② 受け手の意見・思考に対する批判・非難

受け手がある事柄について、自分の意見や考えなど、主観的な判断を語ることがある。行い手は、この発話に対して反発・否認することによって、批判や非難の態度を表す。



【会話例 4-6】では、話題として挙げられた「相手のくせ」が何であるか悩んでいる J1 に対して、J2 が「くせ」に関する自身の意見・推測を述べる場面である。

【会話例 4-6】 日本語会話資料① 05:37

- 01 J1: ° なんだろうな: (.) くせ:??
 02 J2: けっこういっぱいあるよ:: たぶん.
 03 (.)
 04 J1: くせが↑::
 05 J2: んん. >ていうか< ま:: なんやろうな、短所みたいなもんやろう.
 良かったければ.
 06 J1:→ hh [いやまずさ::
 07 J2: [やっぱり.
 08 (.)
 09 J1:→ ひとの短所ばかり言うのやめようよ.
 10 J2:ahaha [(いやそうじゃないけど)
 11 J1: [hhh
 12 J2: ¥ほんとむずかしいよおい¥ .hh

会話実験中、与えられた話題の中、相手のくせは何があるか J1 が悩んでいることに対して、J2 は、05 行目で、「>ていうか< ま:: なんやろうな、短所みたいなもんやろう. 良かったければ。」と「くせというのは、短所みたいなものである」と自分の主観的な考えを述べている。「だろう」という文末形式を使い、自分が推測したことであることを表す。

このような J2 の意見に対して、J1 は、少し笑った後、06 行目で、「いやまずさ::
 という直前の相手の意見に反対意見を予告するマーカーを使い、「ひとの短所ばかり

言うのやめようよ。」と相手の意見に対して否定的な反応を示している(09行目)。これは、忠告・助言の形であるが、「人の短所ばかり言うのはよくない」という意味が含まれており、相手の意見を低く価値づけている態度を示している。この発話を冗談として聞いたJ2は、10で、大きく笑いながら、短所を含まなくせを指摘することはむしろかしいことだと弁解している(12行目)。

韓国語の会話では、受け手の意見や考えに対して、直接的に非難する場面が比較的多く出現していた。【会話例 4-7】では、ヘアーアイロンを使うと、熱い部分が頭皮についてしまう恐れがあることを心配しているK1に対して、K2は自分で使うとなかなか頭皮につかないことを述べている場面である。

【会話例 4-7】 韓国語会話資料① 07:31

- 01 K2: 근데:: 자기가 하면:: 그렇게 못 해. 안 당(h)아(h), 잘.
K2: でも:: 自分がしたら:: そうならないよ. つか(h)ない(h)、よく.
- 02 (0.8)
- 03 K1: 그래도:: 잘못 해가지고 손이라도 집으면 어떡해.
K1: でも:: 誤って {ヘアーアイロンで} 手でも 挟んだら どうしよう.
- 04 K2: .hu::?
K2: へ::?
- 05 K1: 이렇게 이렇게 하고 가다가 손 콧 집으면 어떡해.
K1: こうやって こうやって やりながら 手 ぎゅっと 挟んだら どうしよう.
- 06 (1.0)
- 07 K2:→ 바보야(h)? 머리카락을 잡고 하면 되지:: hh
K2:→ ばかじゃないの(h)? 髪の毛を つかんで やれば いいでしょう:: hh
- 08 (0.8)
- 09 K1: 아이씨:
K1: ええ:
- 10 K2: h:[:
- 11 K1: [바보다 그래. hhh

K1: [ばかだよ そう. hhh

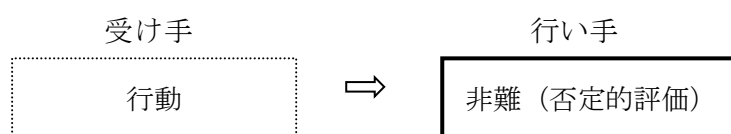
K1 は、03 行目で、「誤って手でも挟んだらどうしよう」と、ヘアアイロンに自分の手を挟んでしまうことを心配している。このような相手の考えについて、K2 は、04 行目で「へ::?」と息を吸いながら驚きを示している。さらに、K1 は、「こうやってこうやってやりながら手ぎゅっと挟んだらどうしよう。」と実演しながら、手を挟むことを仮定し、その可能性を心配する態度を示している (05 行目)。

このような意見について、K2 は、07 行目で、笑いながら「ばかじゃないの(h)? 髪の毛をつかんでやればいいでしょう:: hh」と、相手の意見について、「ばか」という悪態の表現を使って、相手への非難を行っている。続いて、「髪の毛をつかんでやればいいでしょう:: hh」と、アドバイスを加えながら、相手の意見の間違えを訂正している。

このように、韓国語母語話者同士の会話では、前の話者が意見や考えを述べることに對して、あからさまに批判する場面が、日本語母語話者より多く見られた。

③ 受け手の行動に対する非難

会話の最中、受け手が直前に行った逸脱的な行動について、行い手がそれを言語化し、否定的評価を行うことがある。



次の会話例では、J4 が J3 のくせについて何があるか質問され、何を話すか戸惑っている様子を見せる場面である。

【会話例 4-8】 日本語会話資料② 01:12

- 01 J4: くせ:: なんか せ- .hh な-なに 性格的なくせ? hh
- 02 J3: 性格的にはくせやろ:
- 03 J4: 性格的なくせ↓:
- 04 J3: なになに:?? ° 性格的なくせ°
- 05 (.)
- 06 J4: なんやろう. あの::
- 07 (6.0) {何かを置く音}
- 08 J4: hh な(h)んだ(h)ろう(h) .hh
- 09 J3:→ なに恥ずかしがってるんだ:
- 10 J4: いやいやいや::

J4 は、J3 のくせについて聞かれて、01 行目で、くせとは性格的なものかどうかの確認を行っている。ここで、J3 は、性格的なものもくせであると確認を与える (02 行目)。そして、J4 は、「性格的なくせ:↓」と語尾を下げながら、それについて考えていることをことばに示している。J3 は 04 行目で「なになに?」と相手の発話を促している。しかし、J4 は、06 行目から「なんやろう. あの::」と言い淀みながら、「あの::」と何かを言おうとするが、何も言わず、6.0 秒の沈黙が生じる (ここでいろんな雑音が聞こえ、何か別のことが起きた可能性もある)。そして、その後も、笑いながら「hh な(h)んだ(h)ろう(h)」と性格的なくせが何であるのか悩んでいることを表示する。

このような異常に悩む相手の行動に対して、J3 は、09 行目で「なに恥ずかしがってるんだ:」と相手の行動を「恥ずかしがっている」と言語化している。また、「なに～だ」という疑問詞疑問文を用いて相手の行動を追及している様子見られる。我々の日常会話では、このように疑問文の表現形式を用いて、相手の行動を追及する「非難」が行われる場合が多いが、詳細については第 5 章で論じる。

受け手の行動に対して追求する韓国語の会話例も見てみよう。【会話例 4-9】は、K6 (女) が K5 (男) に大学の役員の仕事をもっとするように忠告する場面である。

【会話例 4-9】 韓国語会話例③ 12:20

- 01 K6: 그래도 임원이니까 더 해야 되는 거지::
 K6: それでも 役員だから もっと {活動を} すべきでしょう::
- 02 K5: 아이: 시러:: {콧소리로 말하다}
 K5: ああ: やだ:: {鼻声で言う}
- 03 K6→ 아: 왜 애교부러::
 K6→ あ:なんで 愛嬌ふりまくの::
- 04 K5: 내가 언제?
 K5: 僕が いつ?
- 05 K6→ 아: 시러:: 이랬잖아, 방금.
 K6→ あ: やだ:: こう言ったじゃん、今.

K6はK5に、クラスの役員なのでもっと活動をすべきであると忠告しているが、K5が何度も反発すると、再度01行目で、「それでも、役員だからもっとすべきでしょう::。」と「役員」という事実を引き合いに出し、期待される仕事をすべきであることを強調している。

この発話に対して、これ以上反発できないK5は、「ああ: やだ::」と鼻声で拒否している(02行目)。このようなふるまいに対して、K6は、03行目で「あ:なんで愛嬌ふりまくの::」と、相手の行動を「愛嬌ふりまく」と言語化し、「なんで~の」という疑問詞疑問文の形式で「非難」を行っている。この非難の後、K5が「僕がいつ?」と聞き返すことで反発すると、再度「あ: やだ:: こう言ったじゃん、今」と相手の発言を再現しながら非難している。

④ 受け手の自己肯定に対する否認

我々は、自分自身に関して、肯定的な行動や性格を述べたり、自己を肯定化して弁解したり、自慢をすることもあろう。このような自己肯定や自画自賛に対して、行い

手が否認することで、結果的に否定的評価が行われる場合がある。



次の会話例は、J1 が J2 の研究室の机が汚いと指摘したことに対して、J2 は、自分が掃除をするときは徹底的にしていると弁解する場面である。

【会話例 4-10】 日本語会話資料① 13:57

- 01 J2: ん:: だから: 研究室のあ[の: あそこも::
 02 J1: [うん
 03 J2: 自分のつくえも:: .hh なんかちょっと:: (.) 掃除しようかな:: と思ったら
 めちゃくちゃしっちゃうよでも.
 04 J1:→ .hh .hh ほ(h)ん(h)と hh?=
 05 J2: =¥うん¥
 06 J1:→ .hh 見たことな(h)い.
 07 J2: >あるあるあるある.<=
 08 J1: =ほん↑と:
 09 J2: ぜったいね、[ちょうきれいにしてるよ::
 10 J1: [()]
 11 J1:→ たぶん覚えてないんだけどあるんだ[ね.
 12 J2: [こうね::
 ((省略))
 17 J1:→ ちょっとす↑::ぐ汚くなるからわかんねえよ:

J1 による J2 の研究室の机が汚いという指摘に対して、J2 は、01-03 行目で、掃除をしようとしたら徹底的にすることを述べている。このような自己肯定的発話について、J1 は、笑いながら「.hh .hh ほ(h)ん(h)と hh?」と疑いを示し、「見たことな(h)い。」と

否認している (06 行目)。さらに、J2 は、09 行目でもきれいにしていると強く主張しているが、J1 は、「たぶん覚えてないんだけどあるんだね。」(11 行目) と部分的にのみ承認し、非同意に近い答えになっている。このような「主張—疑い」のやりとりが続き、17 行目に至って、J1 は、「ちょっとす↑…ぐ汚くなるからわかんねえよ:」と、相手の自己肯定的な発話を強く否定している。ここで、「す↑…ぐ」と極端的に音を上げたり、「わかんねえよ:」と乱暴な言い方になっているのは、冗談であることを示すメタ・メッセージになっている (大津 2004)。このように、自分の机の掃除を徹底的にするという相手の自己肯定的な発話を否認することは、結果的に否定的評価になる。

似たような現象が見られる韓国語の会話例も見てみよう。【会話例 4-11】では、K6 が K5 に、自分の性格はどうか聞きながら、「私性格いいでしょう?」と自分の性格がいいのではないかと聞いている。

【会話例 4-11】 韓国語会話資料③ 12:32

- 01 K6: 그럼 내 성격은? 나 성격 좋지?=
K6:じゃ私の性格は?私性格いいでしょう?=
02 K5: =네가 니 성격 어떤거 같은데? 니가 생각할 때.
K5: =あんたは自分の性格 どうだと思ふ? あんたが考えたとき.
03 K6: 내 성격? 좋은 거 같은데.
K6: 私の性格? いいと思ふけど.
04 K5: 어떤 면에서?
K5: どのような面で?
(省略)
14 K6: h: {한숨} .hh그냥, 예를 들어 고민 있다 이래도: (.) 그걸 별로 고민을 안하고: 그냥 잊자잊자 이려고 잊는 다고.
K6: h: {ため息} .hhただ、例えば、悩みがあっても: (.) それをあまり悩まずに: ただ忘れよ忘れよ こうやって忘れるってこと.
15 K5: 흠::
K5: ふ::ん

- 16 (2.5)
- 17 K6: 좋은 거 아닌가?
K6: いいんじゃない?
- 18 K5:→ 내가- 내가 더 좋아. 그런 면은.
K5:→ 僕が- 僕が もっと いいよ. そういう 面は.
- 19 K6: 그래서 내 성격이 좋은 거 같애?
K6:それで 私の 性格 いいと 思う?
- 20 (2.0)
- 21 K5:→ 아직 잘 모르겠어.
K5:→ まだ よく わからない.
- 22 K6: 어머:hhhhh 내 성격이 별로 안 좋아 보인단 말(h)이(h)야(h)?
K6: ええ:hhhhh 私の 性格 あまり よく み(h)えな(h)いの(h)?

01行目のK6の「私性格いいでしょう?」という発話に対して、K5は、02行目で、同意も非同意もせず、逆にK6は自分の性格についてどう思っているか聞き返している。これについて、K6は、「自身の性格がよいと思う」と自分自身について肯定的な評価を下している(03行目)。そして、K5が04行目でどういう面で性格がよいと思うのかと質問すると、K6は、自分の性格がよいと判断した根拠を挙げていき、14行目では、悩みがあってもすぐに忘れるようなポジティブな側面があることを述べている。

K5は、このような相手の自己肯定的な発話に対して、同意も非同意もせず、「ふ::ん」と弱く反応を示し(15行目)、2.5秒の沈黙が生じる。K6は、「いいんじゃない?」と相手の同意を促すが、この発話に対して、K5は、「僕が- 僕がもっといいよ. そういう面は。」と相手の質問には答えず、自分自身の性格のよさに焦点を当てている。K6は、19行目で「それで、私の性格いいと思う?」と再度焦点をK6自身に戻し、答えを求めるが、K5は何も答えず(20行目)、「まだよくわからない。」と答えを回避する(21行目)。

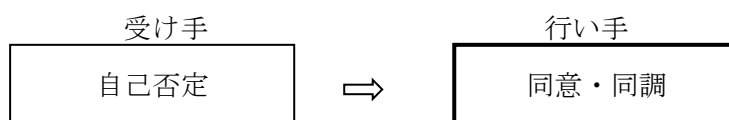
このように、同意を求める第一評価に非同意を示すことは、非優先的な行為になってしまう(Pomerantz 1984)。同意を求める評価に対して、沈黙したり、「わからない」

と答えを回避していることは、非優先的な行為の特徴であり、それは、「非同意」として捉えられる。実際、21行目で、「まだよくわからない」と答えを回避している K5 に対して、K6 は、「ええ:」と驚きを示し、笑いながら「私の性格あまりよくみ(h)えな(h)いの(h)?」と、相手の発話を非同意として聞いている。

以上、会話の最中におきる受け手に対する否定的評価は、受け手の直前の逸脱的な発話・行為に対する批判や否定であり、前の発話や行為が何であるかにより、否定的評価の仕方が様々であることがわかった。

4.3.3 受け手の自己否定に対する同調

我々は、自ら、自身について、マイナス的な行動や性格、失敗談など、自身に不利な情報を述べることもある。このような先行発話に対して、同意・同調することは、結果的に受け手に対する「否定的評価」になる³。



【会話例 4-12】は、J2 が自ら声の大きさについて述べている部分であり、このくせに対して J1 が「危ない」と評価する場面である。これ以前の会話で、J1 が J2 のくせとして声の大きさを一度指摘するが、他の話題に移っていた。しかし、J2 は、自分の声の大きさを再度話題として持ち出している (01-02 行目)。

【会話例 4-12】日本語会話資料① 08:26

³ 4.3.2 の①でも受け手が自分に関する事実・情報を述べているが、4.3.2 の①における自分の情報は、中立的な情報や事実であるのに対し、4.3.3 の「自己否定」になる情報は、受け手自身にマイナスになるネガティブな情報である。

- 01 J2: .hhh なんでだろうね:: ほん t- 声でかくなっちゃうんだよね:: (.)
 02 J2: もうね:: (0.4) くせなんだろうね. =なんか もうほんとに:: .hh (.)
 03 J1: う[:ん. [まあ-
 04 J2: [俺よ:<[言われるほんとに.
 05 (.)
 06 J2: 飲み会とかほんとにもう:=
 07 J1: =そうだね.
 08 J2: ちょうこええぐらい.
 09 J1:→ 危ないね.=
 10 J2: =危ない.
 11 J1:→ ほんと危ない[よね.
 12 J2: [あのね:.

01 行目からは、J2 は、自分の声がいつの間に大きくなってしまふ事実を述べ、04 行目から、「俺よ:<言われるほんとに.」と他の人からも声が大きいことをよく言われると述べている。そして、06 行目では、「飲み会とかほんとにもう:」と「飲み会」の場面を新たに挙げ、「ちょうこええぐらい.」と自分の声の大きさについて、「こわい」と否定的な感情を示している。このような発話は、自身のくせについてネガティブに述べる「自己卑下」になる。

J2 の自己卑下的な発話に対して、J1 は同調しながら、「危ないね.」と相手のくせについて否定的な評価を行っている (09 行目)。「飲み会で声が大きい」という事柄に対して、「こわい」というのは、J2 自身の否定的な感情を表すものであるのに対し、J1 の「危ないね.」は、より客観的な価値づけを行うものである。10 行目で、J2 が「危ない.」と相手の意見に同意すると、J1 は「ほんと危ないよね.」と程度を強め再度否定的評価を行っている (11 行目)。

このように、相手 (受け手) が自らの否定的な側面を述べ、それがきっかけとなって

行い手が同調する形で否定的評価を行うものは、日本語会話のデータで特に多く見られた。

韓国語の会話例も見てみよう。【会話例 4-13】では、K7 が与えられた話題の中で、自ら自分自身の性格を述べる場面である。K7 は、03 行目で、自分の性格は好き嫌いはっきりしていると述べ、それが社会生活をするのにはよくないと自己評価を行っている (12-14 行目)。

【会話例 4-13】 韓国語会話例④ 07:58

- 01 K7: 모- 난 모 아니면 도라는 좀 그런 게 있어 성격상:
 K7: す- 俺は 好き嫌い はっきりしていて ちょっと そういうのがある 性格上:
- 02 K8: 어: 그래?
 K8: あ: そう?
- 03 K7: 맞으면 맞고 안 맞으면 안 맞다는게 명확:해. 나는.
 K7: 合うなら 合う 合わないなら 合わない 明確:だよ. 俺は.
 ((省略))
- 12 K7: 응. 그 중에 맞고 안 맞고를 떠나서 솔직히 (.) 사회생활하려면 (0.8)
 다 잘해야 되잖아: (0.8) 맞건 안 맞건. 근데 그게 안 돼.
 K7: うん. その中で 合う 合わない 関係なく 正直 (.) 社会生活するためには
 (0.8) 皆 仲よくする べきじゃん: (0.8) 合っても 合わなくても.
 でも それが よくできない.
- 13 (1.0)
- 14 K7: 그게 안 맞으면 그냥 안 맞는 대로 그냥. (0.8) 그게 [나의 단점이라고
 생각해 난.
 K7: 그게合わなかったら 合わないまま ただ いる. (0.8) 그게 [自分の
 短所だと 思う 俺は.
- 15 K8: [(그런거보면-
 K8: [(そういえば-
- 16 K8:→ 근데 너는 줌::
 K8:→ でも お前は ちよっと::

- 17 K7: 어
 K7: うん
 18 (1.0)
 19 K8:→ 얼굴에 다 좀 드러나.
 K8:→ 顔に 全部 出る.
 20 K7: 어. 난 단점이야 그게 난.
 K7: うん.俺は 短所だよそれが俺は.

01行目から、K7は、自身の性格には、好き嫌いがはっきりしているところがあると述べている。この話し方は、相手に新たな情報を与えるように述べられている。これに対して、K8は「あ:そう?」と新情報を聞いた反応を示している(02行目)。K7は、さらに03行目で、自分が合う人と合わない人が明確であるとより詳細に説明している。

しかし、12行目から、「社会生活するためには(0.8)皆仲よくするべきじゃん:」と同意を誘う形(「じゃない?」)で、社会一般的な常識を挙げている。「でもそれがよくできない。」と、自分が社会的な規範から逸脱していることを言語化して述べている。そして、「それが自分の短所だと思う.俺は」と、そのような側面が自身の「短所」として評価まで下している。このように、ここでは、自身の性格が「好き嫌いがはっきりしている」と特性を述べて、さらに、その特性が社会規範から外れることを述べ、最後にそれが短所であると、自己評価をしている。

このようなK7自身のネガティブな自己評価に対して、K8は、「でもお前はちょっと:」と言い出し、1.0秒の沈黙の後、「顔に全部出る」と、そのようなK7の性格が顔に出てくる事実を指摘している。Pomerantz(1984)によると、相手の自己卑下に対する優先的な行為は、非同意することである。例えば、ここでは、相手が自己卑下的な発話をしたら、それに対して、否定や非同意をすることが優先行為である。しかし、ここでは、相手の自己卑下に同調しているため、「ちょっと」と程度を軽減したり、沈黙が挟まれる等、非優先的な行為の特徴が表れている。

このように、受け手が自身の短所を述べたり、失敗談を先に述べ、自己卑下的な話題を導入し、行い手がそれに同調することで否定的評価が行われるケースが見られることも少なくなかった。相手の否定的な側面を述べなければいけない状況で、自らの非を述べる行為は、相手の否定的評価を引き出しやすい環境を作っているとも言えるだろう。

以上、会話例から、否定的評価がどのような状況で出現するのか、誰が、何を対象に言及するのかにより、そのパターンを分類した。4.4節では、このような出現パターン別に日本語母語話者と韓国語母語話者の頻度数を比較する。

4.4 発話状況における日・韓比較

前節では、否定的評価がどのように行われるかに関して「行い手主導の否定的評価」「受け手の言動に対する否定的評価」「受け手の自己否定に対する同調」の3つのパターンを観察した。この節では、日本語と韓国語の会話を比較するために、それぞれのパターン別使用頻度を調査する。まず、日本語会話と韓国語会話からパターン別使用頻度を数えた結果を表4-1として提示する。

表 4-1 否定的評価の出現パターン別頻度数

否定的評価の出現パターン		日本語母語話者		韓国語母語話者		検定
(1) 行い手主導の否定的評価		44 (46%)		43 (46%)		
(2) 受け手の言動に対する否定的評価	① 事実・情報	22 (23%)	9 (9.5%)	35 (38%)	13 (14%)	*
	② 思考・意見		9 (9.5%)		16 (17.5%)	
	③ 行動		1 (1%)		4 (4.5%)	
	④ 自己肯定		3 (3%)		2 (2%)	
(3) 受け手の自己否定に対する同調		29 (31%)		15 (16%)		*
合計		95 (100%)		93 ⁴ (100%)		

*:p<.05

⁴ 日・韓の出現頻度の比較のため、韓国語会話資料⑤の発話数は、除外している。

「(1) 行い手主導の否定的評価」は、日本語母語話者と韓国語母語話者両方とも 44 回、43 回で (46%) で、およそ同じように出現していた。これらの発話が多かったのは、お互いのネガティブな側面を話すように誘導された話題（「相手の第一印象について」、「相手のくせについて」、「相手の性格について」）の影響が大きいだろう。また、行い手主導の否定的評価の場合、エピソードを語る中、相手への否定的評価の発話が連鎖的に続くことが多く（【会話例 4-1】の 06・08・10 行目を参照）、発話の頻度として多く出ていた。

日本語話者と韓国語話者との否定的評価の出現パターンの頻度において、カイ二乗検定で分析したところ、5%水準で有意差が見られた ($\chi^2(2)=7.41, p<.05$)。特に、有意差が見られる(2)と(3)のパターンに注目したい。日本語話者の場合、「(3) 受け手の自己否定に対する同調」パターンが次に多く (31%)、「(2) 受け手の言動に対する否定的評価」は比較的少なかった (23%)。一方、韓国語話者の場合は、「(2) 受け手の言動に対する否定的評価」(38%) が、「(3) 受け手の自己否定に対する同調のパターン」(16%) より 2 倍以上多く出現していた。

日本語話者の場合、「(3) 受け手の自己否定に対する同調」のパターンが多かったが、これは、受け手が先に自分の非を述べることが多く、それに対して、行い手が意見を加える形で否定的評価が行われていたからだと思われる。日本語話者の場合、相手が否定的評価を行ったことに対して、自分の非を認める場面が多く、また、自ら、自身の非を談話上にもたらず場面が多かったので、このような結果が出たと考えられる。例えば、【会話例 4-12'】で、J2 は、自ら、声の大きさの話題を再度持ち出し、声が大きくて「飲み会」の場面でこわいぐらいと述べているが、この自己否定的な発話に対して、J1 は「危ないね」と受け手の意見に同調しながら、否定的評価を行っている。

【会話例 4-12'】日本語会話資料② 08:26

- 01 J2: .hhh なんだろうね::ほん t- 声でかくなっちゃうんだよね:: (.)
 ((省略))
- 06 J2: 飲み会とかほんとにもう:=
- 07 J1: =そうだね.
- 08 J2: ちょうこええぐらい. <自己否定>
- 09 J1:→ 危ないね.= <同意→否定的評価>
- 10 J2: =危ない.
- 11 J1:→ ほんと危ない[よね.

また、「(3) 受け手の自己否定に対する同調」のパターンは、受け手自ら先に自分の非を言い出し、それに行い手が同意する形であり、他の出現パターンに比べてフェイスの侵害度が低いので、話し手が否定的評価をしやすい環境だと思われる。このような傾向は、日本語の否定的評価のきっかけを分析した関崎（2014:127）の研究でも指摘されている。さらに関崎は、否定的評価のきっかけとして、「相手（本稿での「受け手」と同じ）の自身への否定的発話」の頻度が比較的多かったことを指摘しているが、その原因として、お互いの評価が一致するのを待つ配慮が影響していることを述べている。

一方、韓国語話者の場合、「(2) 受け手の言動に対する否定的評価」のパターンが多かったのは、受け手が述べた発言の内容や考えに対して、直接的に非難や否定をしている場面が多いからであると思われる。下位分類において特に、最も多かったケースが「② 受け手の思考・意見に対する否定的評価」（17.5%）である。その理由は、例えば、【会話例 4-7】の K2 の発話「バカじゃないの」のように、受け手の意見や考えについてあからさまな非難を行って、受け手をけなしている場面が多いからである。

【会話例 4-7】 韓国語会話資料① 07:31

- 05 K1: 이렇게 이렇게 하고 가다가 손 꼭 집으면 어떡해.
 K1: こうやって こうやって やりながら 手ぎゅっと 挟んだら どうしよう.
 06 (1.0)

07 K2:→ 바보야(h)? 머리카락을 잡고 하면 되지:: hh

K2:→ ばかじゃないの(h)? 髪の毛をつかんでやればいいでしょう:: hh

その他の会話例でも、受け手の思考や意見に対して、「それしか覚えてないの」「お前は考えが多過ぎる」「そんなこと覚えてって社会生活に役に立たない」など、評価語を用いて、あからさまに非難を行う発話が多くみられた。このような受け手の思考・意見に対する否定的評価は、日本語話者の場合、あまり見られない例であり、出現していたとしても、露骨な非難よりは、「hh いや まずさ:: (.) ひとの短所ばかり言うのやめようよ。」(【会話例 4-6】)のように笑いながら冗談めかして話していたり、「それはね (.) 言い過ぎだと思う」のような緩和表現を用いて婉曲的に伝えている。

鈴木(1997)は、聞き手の領域には段階性があり、一番制限が強いのは、聞き手の欲求、願望、意志、能力、感情、感覚など個人のアイデンティティに深くかかわる「聞き手の領域」であり、これに関係する内容の発話は回避されると指摘されている。しかし、韓国語話者の場合、受け手の意見や思考についても緩和表現を使わず、あからさまに否定的評価を行う様子がみられる。

また、「①受け手が述べる事実・情報に対する否定的評価」も韓国語話者(14%)の場合、日本語話者(9.5%)より多く出現していた。表現の仕方においても、韓国語話者の場合、受け手が述べた事実や情報に対して、「裏切り者だ」(【会話例 4-5】)や、「(受け手が述べた酒癖について) すごくこわい酒癖だ::」など、直接的な否定的評価が行われていたが、日本語母語話者の場合、「そこまでやるか::とか思ったのね hhhh」(【会話例 4-4】)のように感想を述べる形で行っていたり、「でも時々発言が不思議だよね::」のように、相手に同意を求めている形になっていた。

「③受け手の行動に対する否定的評価」の発話の仕方は、「なに恥ずかしがってるんだ」(【会話例 4-8】)「なんで愛嬌ふりまくの::」(【会話例 4-9】)など、日・韓両言語とも、受け手の行動に焦点を当てた疑問表現で行われるケースが多かったが、このように否定的

評価として機能する疑問表現については、自然会話を分析した第5章で詳細に述べる。

4.5 本章のまとめ

以上、第4章では、否定的評価の出現パターンを「行い手主導の否定的評価」「受け手の言動に対する否定的評価」「受け手の自己否定に対する同調」の三つに分けて会話例を分析した。

否定的評価の出現する環境をみると、否定的評価を行う側の参加者が、相手に対する過去や普段のある事柄を談話に取り入れ、会話を進める場合もあれば、相手の直前の発話や行動に対して非難を行う否定的評価も観察された。また、相手の自己卑下や失敗などに同調する形でも否定的評価が行われていた。

このように、否定的評価の発話は、行い手がいきなり行うのではなく、相手とのやりとりの中で行われることであり、何かのやりとりを契機として行われる様子が見られた。

日本語母語話者と韓国語母語話者の否定的評価の出現パターンの相違点としては、日本語母語話者の場合、受け手の自己否定に対する同調のパターンが多かったのに対して、韓国語母語話者の場合、受け手の発話・行動に対する批判・否定のパターンが多くみられた点が挙げられる。日本語母語話者の場合、受け手が先に否定的評価の対象となる事柄を導入し、それに対して同調する形で否定的評価が行われていたが、韓国語母語話者の場合、受け手の意図しなかった発話や行動について、けなす場面が多かった。このような否定的評価の表現は、日本語母語話者にとっては唐突な印象を与えると思われる。また、否定的評価の表現の仕方においても、韓国語母語話者の方は、日本語母語話者のように婉曲的な表現はあまり用いず、より直接的な表現を用いていた。このような表現も日本語母語話者にとっては必ずしもよい印象を与えないものとなる可能性がある。

以上、相手の否定的側面を述べなければならない場面を誘発するため「相手の初対面の印象について、相手のくせについて、相手の性格について」という話題を設定しての

会話を分析した。このような話題設定により、否定的評価のデータを多数収集することができたが、通常 of 自由会話とは異なる設定であるという制約があったことは否めない。そこで、以下の5章においては、そのような話題設定を行わずに自由な雰囲気 で語り合 う友人同士の会話を分析する。特に、収集したデータで最も多く出現した疑問表現を用 いての否定的評価を中心に、否定的評価の表現形式について考察する。

第5章 自然会話における否定的評価の表現形式

—疑問文を中心に—

5.1 はじめに

人は、ある発話行為を理解するとき、記号の意味だけではなく、文脈や非言語行動を手掛かりとして理解する。通常、疑問文の形式は、何か不明な情報があり、その情報を埋めようとする「質問」として機能している。しかし、疑問文は、単に、情報や確認を要求しているだけでなく、それ以上の行為を行うことがよく見られる。例えば、依頼をしたり、申し出をしたり、話題を提供する際にも用いられる。さらに、疑問文は、「非難」の表現形式としてもよく用いられる。我々は、自分の基準や社会的常識から外れた人の行為や発言に対して、「なぜ」「どうして」という疑問を持ち、そのような行為・発言に至った経緯・過程を理解したいためであろう。

同じ疑問文の形式を使っているにもかかわらず、単に欠けている情報を要求する「質問文」である場合もあれば、相手に対する「非難」や「からかい」などの否定的評価として行われる場合もある。例えば、「どういうことですか」という疑問文の形式は、直前の発話の意味を聞く質問文でもあるが、相手が行った言動に対する不理解を表示する「非難」としても機能する場面がある。そして、受け手は、先行する疑問文が情報や確認の要求として行われているのか、あるいは「非難」として行われているのかを理解し、適切な対応を行う。

第5章では、自然会話に近いデータを用いて、ある疑問文がなぜ「非難」として聞こえるのか、その要因を分析し、「非難」としての疑問文が日常会話でどのように行われているのか概観する。5.2節では、関連する先行研究を紹介し、5.3節では、5章で使用する会話データの概要を述べる。5.4節では、自然会話における「非難」の表現形式と発話数を示し、5.5節から分析に入り、通常の疑問文と「非難」としての疑問文がどの

ように異なるのかを述べる。5.6節では、「非難」としての疑問文がどのように表現されるのか分析し、5.7節では、考察及びまとめを行う。

5.2 関連する先行研究

会話分析 (Conversation Analysis) では、先行する発話の問題を指摘する行為が非難・非同意などの挑戦的行為を示すと指摘する研究がいくつかある。

Schegloff (1997) では、質問表現、繰り返しなどの他者修復 (Other-initiated repair) が理解・聞き取りの問題が生じたことを示すだけでなく、それ以外の行為も遂行していることを述べている。その一つが挑戦的、否定的評価の態度を表すことである。

また、Bolden & Robinson (2011) は、Why-Question が、単に知らないことに対して理由の説明を要求している場合もあるが、知っていることに対する説明要求の場合もあり、後者の場合、不満・批判・非難などの挑戦的態度を示すこともあると指摘している。

Park (2013) は、英語の Yes-No Question が先行する発話に対する適切性や正確性に疑問を持つ挑戦のフレームになることを指摘し、否定形平叙疑問文 (negative declarative question) と否定形疑問詞疑問文 (negative interrogative question) との違いを分析している。

最後に、韓国語の他者修復のタイプと機能について分析した Kim (1999) では、他者修復が共同的な態度を表す場合もあるが、非同意の前兆となることも指摘している。

このように、英語や韓国語の質問表現や他者修復の遂行が、先行する発話に対する挑戦的態度を表す行為になっていることは指摘されている。では、日本語では、「非難」・「からかい」などの発話はどのように行われているのだろうか。本章では、日本語母語話者の友人同士の自然会話からこのような非難や挑戦の態度を表す発話の表現形式を取り上げ、疑問文が「非難」として聞こえる要因について説明し、どのように行われて

いるのかを分析する。

5.3 会話データの概要

本章で使用する会話データは、同じ研究室に所属する3名の日本語母語話者の自由会話2組分（計6人）である。全員20代半ばの年齢であり、それぞれの組の3人は、普段、研究室でおしゃべりをよくしている仲である。会話は、研究室の休憩室で行われており、机を囲み、話をする場面を録音・録画した。録音・録画時間は一組当たり約40-50分（計90分）である。会話参加者には、お菓子や飲み物を提供し、話題を与えず、自由に食べながら話すことを指示している。2組それぞれの参加者の性別と、録音・録画時間は、表5-1に示す。会話が録音されたカメラの位置と人物の配置に関しては、図5-1に示す。

表 5-1 会話参加者の情報

	参加者の表記と性別	年齢	録音時間	話者の関係
資料① ¹	O(男)、Y(女)、T(男)	20代	40分	同じ研究室所属
資料②	A(男)、S(女)、I(女)	20代	50分	同学年、同じ研究室所属

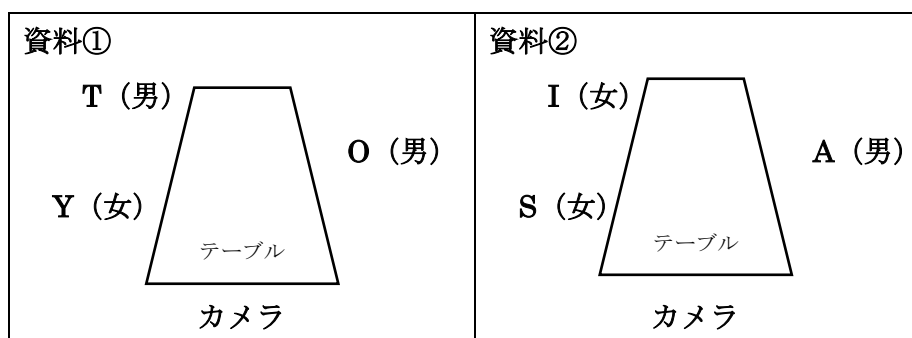


図 5-1 人物の配置

¹ 資料①は、砂川コーパスの会話資料の一部である。砂川コーパスは、筑波大学人文社会科学研究所、文芸・言語の専攻開設授業で収集された音声・映像資料である。資料②も、資料①と同じ会話環境で、別のメンバーを対象に会話を収集したものである。

5.4 否定的評価の表現形式と発話数

5.4.1 否定的評価の表現形式

西尾(1998)のマイナス評価の表現内容²を参考に、相手の逸脱した言動に対する「否定的評価」の表現形式について、会話例から以下のように分類した。

(1) 疑問文

① 真偽疑問文

例) (お菓子を開ける相手の姿を見て) そんなガチで開けるんですか。

② 疑問詞疑問文

例) (愛嬌をふりまくような相手の発話を聞いて) 今のものは何ですか。

(2) 行為の指摘・描写

例) (相手が時計を見せようと片手を上げるポーズを見て) なんかかっこつけてた::

(3) 否定的な価値づけ

例) (相手が誰かの悪口を言ったときの反応として) ひどいでしょいまの
(ラジオの何を聞くかをいう質問に「FM」と答えた相手に) なんか漠然としすぎて

(4) 否定・否認・禁止 (いや、ちがう、だめ)

例) (普段言わないような作例を作った相手に) ぜったい言わないでしょう
(俳句作りの活動で不適切な俳句を作った相手に) だめじゃん

² 西尾(1998)では、不満が出るような状況でどのように「マイナス評価」するかについて、表現内容として、以下のように分類している。

A 発話の切り出しに関する表現：断り、よびかけ

B 話し手のマイナス評価が明示的ではない場合：状況描写、現状にどう対処するか相手の意向を問う

C 話し手のマイナス評価が明示的な場合：問いつめ、非礼の停止を求める、非礼の改善を求める、非礼の指摘・批判、罵倒・感情表明、接触回避表明

(5) 共感・理解の不可の表示（わからない、理解できない）

例) (失敗談を語る相手に対して) ずっとわけわからないんだけど

(何かを訴えようと「ほら」と言った相手に) 今のほらにはまったく共感できないんですけど

(6) 否定的感情の表出

例) (動作を見て予想外のことを思い出した相手に) A さん一番初めにこれ思い出すとはショック

5.4.2 表現形式における発話数

自然会話における「否定的評価」の発話を以上の表現形式に基づいて分類し、その頻度数を表5-2に示す。さらに、第4章で使用されている話題が設定された会話データにおいても「否定的評価」の表現形式を以上の方法で分類し、その頻度数も示す。

表 5-2 「非難」の表現形式と発話数

会話データの種類		自然会話		話題が設定された会話	
疑問文	真偽疑問文	23 (28%)	43 (52%)	5 (5%)	8 (8%)
	疑問詞疑問文	20 (24%)		3 (3%)	
行為の指摘・描写		13 (16%)		44 (47%)	
否定的価値づけ		10 (12%)		23 (24%)	
否定・否認・禁止		8 (10%)		4 (4%)	
非共感・不理解		6 (7%)		5 (5%)	
否定的感情の表出		3 (3%)		5 (5%)	
受け手の自己否定に対する同意 ³		0 (0%)		6 (7%)	
合計		83 (100%)		95 (100%)	

³ 「受け手の自己否定に対する同意」の形式とは、例えば、相手が自分について「変な議論が多い」「オーバーリアクションをしている」と自己否定することに対して、否定的評価の行い手が「わかる」「確かに」のように、単なる同意を示す形で行われる否定的評価である。

表 5-2 でみられるように、自然会話における「否定的評価」の総発話数 83 回の中で、疑問文の形式は、43 回と、全体の 5 割以上を占めていた。一方、自然会話に比べ、話題が設定された会話の場合、総発話数 95 回の中で、疑問文の形式は、8 回 (8%) のみであり、行為の指摘や描写が 44 回で、ほぼ 5 割を占めていた。

話題が設定された会話の場合、相手への言及をしなければならない話題が設定されているため、その活動に応じた相手への指摘や描写が多く出現しているだろう。しかし、自然会話では、このような話題が設定されず、相手の逸脱的な言動が出現したら、その場で「疑問文」の形式を用いて、否定的評価を行っていることが見られた。

本章では、「否定的評価」の様々な表現形式の中で、自然会話で比較的頻度が多く出現していた「疑問文」の形式に注目し、より詳細な分析を試みる。また、本章で扱われている疑問文の形式における「否定的評価」は、「けなし」というよりは、相手の非を追及して問い詰めようとする「からかい」混じりの「非難」として解釈されるものであった。そこで、以下では「否定的評価」の代わりに、「否定的評価」の下位の分類である「非難」という用語を用いることにする。

5.5 通常の疑問文と「非難」としての疑問文

5.5 節では、通常の疑問文と「非難」としての疑問文の違いを会話例から分析する。

5.5.1 通常の疑問文

まず、疑問文が通常の「質問」として行われる場合を見てみる。通常の「質問」とは、疑問文のもつ、聞き手から情報を引き出そうとする機能を持つ。安達 (2002:175) では、「質問」の機能として、以下の二つの基本条件を挙げている。

- a. 話し手には何らかの情報が欠けているために、判断が成立していない。
- b. 話し手は聞き手に問いかけることによって、その情報を埋めようとする。

aで規定される条件を「不確定性条件」、bで規定される条件を「問いかけ性条件」と呼ぶ。そして、典型的な「質問」は不確定条件と問いかけ性条件の二つによって規定されているものである。このように、通常の「質問」は、何らかの情報が欠けているため、話し手が聞き手に問いかけて情報を要求する機能を担っているのである。

また、会話分析の研究においても、疑問表現を用いた際、それが「質問行為」として解釈されるためには、〈情報の要請・情報の提供〉という隣接ペア⁴によって支えられる必要があるとされる。つまり、疑問文が質問文となるのは、その質問が答えを期待し、相手が答えとなる情報を提供するという場における相互行為の交渉を通して可能になると考えられている（メイナード 2000）。

まず、ある疑問文が直前の発話に対して情報を要求している例を見てみよう。次の【会話 5-1】では、会話参加者達が、自分の地元のスーパーについて話している場面である。Aの地元のスーパーが「いなげや」であることを話した後、飲み物をつぐやりとりが挟まれている。Sは、01行目から「相鉄ローゼンでした。私の(.)地元は。」と自身の地元のスーパーの名前を挙げている。

【会話例 5-1】 [相鉄ローゼン_ASI] 25:20

- 01 S: 相鉄ローゼンでした。私の(.)地元は。
02 A: あ全然知らな[い。
03 I: [>なににな[に.<
04 S: [相鉄線だから。相鉄[ローゼン。
05 A: [あ∴
06 I:→ ローゼンってなに?
07 S: っていうスーパー。
08 I: あ スーパーなの。今スーパーの話してたのか。=

← 情報要求

⁴ 隣接ペアとは、「質問—応答」・「挨拶—挨拶」・「呼びかけ—応答」「依頼—受け入れ／拒否」というような発話のペアである（Schegloff 2007）。ペアの第1成分が完結した際に、特定のタイプの第2成分の産出が強く期待される。第2成分が産出されない場合、「あるべきものがない（officially absent）」という含意が生じる。

09 S: =うん. スーパーで例えれば.

Sは、「相鉄ローゼンでした. 私の(.)地元は.」と、地元が比較的近くて、「相鉄ローゼン」を知っている可能性が高いAに向けて話している(01行目)。これに対して、Aは、「あ全然知らない.」とその対象を知らないことを述べている。一方、Iは、03行目で、「なにになに.」と聞き返している。この「なにになに」は、相手の前の発話が聞き取れなかったことを示す疑問文である。

このようなAとIの発話に対して、Sは、「相鉄線だから. 相鉄ローゼン.」と相鉄ローゼンの名前の由来を述べている。ここでAは、「あ:::」と納得したことを示す。しかし、Iは、さらに06行目で、「ローゼンってなに?」と聞いている。

ここでIは、Sが述べている「相鉄ローゼン」が何を指しているのかわからない。つまり、対象に対する情報が欠けている状態である(不確定性条件)。そのため、「相鉄ローゼン」を知っている聞き手に「~ってなに?」と意味を聞く形式の疑問文を用いて、欠けている情報を埋めようとしている(問いかけ性条件)。この情報要求に対して、Sは「っていうスーパー」と簡潔に答え、スーパーの名前であるという情報を与えている。このような情報提供に対して、Iは、「あ」とそれを今知ったことを示し、「今、スーパーの話してたのか.」と、どんな話題が話されていたのか自分が理解したことを述べる。

このように、通常の疑問文は、何か情報が欠けていて、聞き手にその情報を要求する機能を持つ。

5.5.2 「非難」としての疑問文

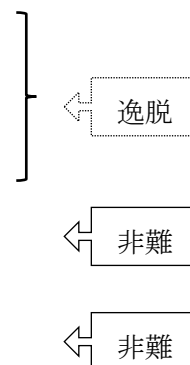
上と同じ「~ってなんですか」という疑問文を用いる形式が「非難」として機能しているケースを見てみよう。

次の【会話例5-2】では、Yが文字も流行があると説明していく中、Tから、丸文字以

外の流行が何なのか聞かれる。Yはその例を説明するため、実際にノートを開いて、字を書いてゆくが、この様子をOとTが見ている。

【会話例 5-2】 [流行の文字を書く_OYT] 30:43

- 01 Y: 丸文字もそうだけどさ::
 02 (4.0) {ノートを開く}
 03 Y: なんかこう- (1.0) こう- (1.0) こう- (1.0) こう書いたりさ::
 04 O: [° うん?
 05 Y: [hh
 06 Y: 「お」とかを::
 07 O: ° なに↑°
 08 (2.0) {ノートに書く}
 09 Y: ° あh:と (.) これ変だな° (.) hhh
 10 O:→ 「お(h)もいで(h)」ってなんすか, h[h hh
 11 Y: [h::
 12 O:→ なん- どうしたんです[か, [hh hh
 13 Y: [hh
 14 T: [なにを書く-
 15 T: >最初からおもいでって[書こうとしてましたいま.<
 16 O: [hhh
 17 Y: いや(h)、おのつ(h)ぎなんてか(h)こ(h)う(h)=
 18 Y: =>こうさなんか< (.) あの: 右上がり調に書くみたいな.
 19 O: あ::



Yは、02行目辺りからノートを開き、09行目まで、丸文字以外の流行の文字を説明するために、字を書いてゆく。06行目辺りに「お」という字を例えとして書き始め、いくつか文字を書いた結果、「おもいで」になったようである。この書かれた文字の内容に対して、Oは、10行目で、「お(h)もいでってなんすか, hh hh」と笑いながら相手が書いたことについても尋ねている。

「～って何ですか」という疑問文は、相手にことばの意味や対象に関する情報を求める場合に用いられる形式である。しかし、ここでは、Oが「おもいで」という字が何なのか、実際にわからなくて聞いているのではない。ゆえに、相手に「おもいで」の意味の説明を求めているのでもない。

「お(h)もいで(h)ってなんすか。」という発話は、相手を書いたものが「おもいで」という単語になっていることを言語化し、そこに焦点を当て、相手の行為を追及している行為である。しかも、「お(h)もいで(h)」の部分が笑い声でなされ、そのことばに笑える要素があることを示している。ここでは、若い女性が「おもいで」といえば、恋人との思い出などロマンチックな情景やセンチメンタルな情景が想像されることが多い。こうした単語を文字の説明のために選択したことが、Oの笑いにつながったと思われる。

Oは、さらに「どうしたんですか. hh hh」と聞きながら笑っている(12行目)。ここでも、相手の真の意図がわからなくて聞いているのではなく、相手を書いた文字の内容から相手がセンチメンタルな感情になっていると想定し、そのように書いた理由を聞く「からかい」を行っているのである。

OやTの「非難」に対して、Yは、「おのつ(h)ぎなんて書(h)こ(h)う(h)」と「お」の次に何を書くか迷ったことを笑いながら述べている。これは、「おもいで」が何なのかの説明ではなく、自分が書いたものが偶然「おもいで」という単語になった経緯・思考の過程を説明し、相手のからかいに対して弁解しているものである。そして、18行目で、「>こうさなんか<」と急いで話題を移し、元の文字を説明する活動に戻っている。このように、聞き手も、相手の発話を質問とは聞かず、「非難」や「からかい」として対応しているのがわかる。

【会話例 5-1】のように、「ローゼンってなに?」という疑問文の場合、「ローゼン」という対象が何を指すかわからず、相手にその情報を要求しているので、「質問」行為である。一方、【会話例 5-2】の「お(h)もいでってなんすか. hh hh」という疑問文は、「お

もいで」がわからなくて聞いているのではなく（不確定性条件の違反）、また、相手に「おもいで」が何なのか説明を要求しているのでもない（問いかけ性条件の違反）。つまり、通常の「質問」の条件を満たしておらず、このような場合は、疑問文の形式を用いているが、「質問」ではなく、「非難」や「からかい」として機能する。

さらに、発話末のイントネーションも異なる形で産出されている。「ローゼンってなに？(↑)」という疑問文は語尾を上げている。しかし、「お(h)もいでってなんすか。(↓)」は、語尾を下げながら言っている。また、後者は、笑いながら言うことで、真剣に質問しているのではないことをパラ言語的に示している。

以上、ある疑問文が「非難」として機能する場合、通常の質問とは異なり、知っていることを聞いており、相手に情報を要求しているわけでもないことを述べた⁵。

5.6 「非難」としての疑問文の表現方法

ある疑問文が「非難」として行われる場合、それはどのように行われているのだろうか。5.6節では、様々な疑問文の形式が「非難」として機能するケースを取り上げ、なぜ通常の質問としては聞こえないのか、どのように非難を行っているのかについて、会話例から分析する。

5.6.1 真偽疑問文 (Yes-No Question)

真偽疑問文は、命題が真であるか否かを知らないときに用いられる疑問文の形式である。この種の疑問文が「非難」として用いられる場合には、命題が真であることを知っているにも関わらず、確認を行っていることになる。本節では、「非難」として用いられる真偽疑問文の会話例を見てみる。その表現方法には、相手の直前の行為を言語化し

⁵ 「質問」で知っていることを聞くケースは他にも存在する。例えば、教育の場面でも、学習のため、先生が学生に知っていることをあえて質問する場面がある。これらは、単なる「質問」として機能するのではなく、何か別の目的があるため、質問していると考えられるが、これらについてはさらなる分析が必要であろう。

確認したり、相手の直前の発話をそのまま繰り返したり解釈したりして、その適切性を問う形が挙げられる。

● 相手の行為を言語化し、確認する

まず、会話の途中、逸脱的な言動が出現したときに、その行為や発話をそのまま記述し、確認する行為を試みる。次の会話例は、Tの「スナックのお菓子とか食べます?」という質問に対して、Yが、「コンディションによる。」と答えていた以降の会話である。Yは、コンディションによってどのようなお菓子を食べているのか挙げた後、01行目から「でも無性にお腹すいてるときは::」と、例外のケースを挙げ、「ばりばり食べる。」と述べている。

【会話例 5-3】 【お菓子食べる_OYT】 36:28

- | | | | |
|----|-----|---------------------------|------|
| 01 | Y: | でも無性にお腹すいてるときは:: | |
| 02 | | (1.0) | |
| 03 | Y: | ばりばり食べる. | |
| 04 | | (1.0) {両手を口の方向に向けてぐるぐる回す} | ← 逸脱 |
| 05 | O:→ | hh 両手ですか. | ← 非難 |
| 06 | Y: | hh:[: | |
| 07 | O: | [hh | |
| 08 | O:→ | まさかの[両手でですか. | ← 非難 |
| 09 | Y: | [° .hh h° | |
| 10 | Y: | 表現の問題です. | |
| 11 | O: | hhh | |
| 12 | Y: | ° ばりばり.° | |

Yは、01行目で、「でも無性にお腹すいてるときは::」まで言い、持っていたコップを置き、「ばりばり食べる」と言うときは、両手を口の方向に回しながらばりばり食べ

る動作を実演している。この動作を見た O は、少し笑った後、相手の両手を回す動作を真似しながら「hh 両手ですか::」と聞いている (05 行目)。

Y が両手を使っていることは既に見てわかる。つまり、命題が真であるかどうかはわかっている。通常であれば、何かを食べるときは片手で食べるのが一般的であるが、両手を速く回しながら食べる Y の動作を言語化し、それを確認する形でからかっているのである。

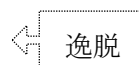
この「両手ですか::」の疑問文の形の発話が「からかい」だと理解した Y は笑いで対応している。続いて O は、「まさかの両手ですか。」と意外性を表す副詞を加え、からかいの強度を上げている。これに対して、Y は、Yes か No で答えず、「表現の問題です。」(10 行目) と両手を使った自身の行為を説明し、言い訳をしている。

● 相手の発話の適切性を問う

【会話例 5-4】では、相手の発話を言語化して、筋道が通っているか疑問文の形式で確認する例を見てみる。早口の人、頭の回転が速いかという話題の中、S は、「授業の〇〇先生⁶の早口はかわいい」と述べている (01 行目)。

【会話例 5-4】 [〇〇先生_ASI] 41:25

- 01 S: でも〇〇先生の早口はかわいい.=
02 I: =かわいい. h[hh
03 S: [hhh
04 I:→ >待(h)って.< まず[大丈夫? 今[の(h)::
05 S: [hhh [hhhh
(省略)
09 I: 今のピーって入るわh.
10 S: 早口はピー::



⁶ 実際の会話では実名が出ている。

- 11 I: hhhhh .hh hh はやく(h)ち(h). ピーhh.
 12 I:→ .hh 述(h)部のほうに[ピー入るの(h)]. ← 非難
 13 S: [hhh]
 14 S: そこを隠す.
 15 I: hhh

01行目から03行目まで、SとIは、「(授業の)○○先生の早口がかわいい」と言っているが、これに対して、Iは、「かわいい」とSの発話に同意を示し(02行目)、二人とも笑っている。しかし、04行目から、Iは即時に態度を変え、「>待(h)って.<」と今行っているやりとりを止め、「まず大丈夫? 今の(h)」と直前のSと自身の発話が大丈夫であるかと確認をしている。

会話が録音されている状況で、先生の実名を出して、その先生の早口がかわいいと表現するのは、礼儀に欠ける行為である。これは、大丈夫であるか、実際に相手の意見を聞くために行っている質問ではなく、今の自分達の行為が道徳的に適切ではないことを問題として捉え、確認を行うことでやりとりを中断させているのである。

その後、Iは、09行目で、「今のピーって入るわh」と、ピー音(放送禁止音の比喩的表現)で、ある部分を隠すべきであると訂正を促す。すると、Sは、10行目で、「早口はピー」とピー音を入れ、01行目の文をやり直している。

これを聞いたIは、大きく笑ったあと、「はやく(h)ち(h). ピーhh」と相手の発話を笑いながら繰り返し、そこに何か笑うべきものがあることを示す(11行目)。そして、「述(h)部のほうにピー入るの(h).」と語尾を下げ、相手の発話を解釈し、確認を行っている(12行目)。

ここでは、会話が録音されている状況で、先生の実名が出されていることが問題の焦点である。しかし、Sは「早口はピー」と述部の方を隠しているため、文の意味自体がわからなくなり、規範から外れた発話になっている。その逸脱に対して、Iは、相手の

発話が「述部のほうにピーを入れる」と言語化し、あえて確認することにより、適切性を問うことを行っている。この確認要求に対して、Sも、発話行為が「からかい」だと理解し、笑った後、「そこを隠す」と冗談を続けている。

以上のような真偽疑問文 (Yes-No Question) の例は、命題の真偽を問う形をとっているが、命題の内容 (対象) が現場で起きている事柄であるため、直接、見て、聞いて、わかる情報である。つまり、命題が真であるか否かは、話し手が既に知っていて、聞き手にその答えを要求しているわけではない。従って「質問」行為の条件は満たされず、「非難」として認識される。

5.6.2 疑問詞疑問文 (WH Question)

疑問詞疑問文 (WH疑問文) の場合も、相手の行為や発話に焦点を当て、その意味を聞くことで、「非難」として機能している。特に、「なんで～ (の) ですか」や「～ってなんですか」という形式は、日常会話で、情報を要求している「質問」より、「非難」として機能しているケースが多いだろう。会話例から、相手の行為に対して理由や意味を聞く形で行われる「非難」について見てみる。

- 相手の行為に対する理由を聞く

「なんで」は理由や原因が不明でそれを問う疑問詞である。しかし、「なんで」の後に、相手の行為が言語化される場合、「非難」として、機能するケースが多い⁷。【会話例5-5】では、「なんで～ (の) ですか」形式の疑問文が強い「非難」として聞こえる例がある。次の会話では、会話の話題が切れたとき、Tが、Yに向け、「Yさん、とりあえず

⁷ データでは、「なぜ+行為」の疑問文が「ほめ」を行っている事例も観察された。

I: うちもそれ安かったから[買ったんだ。

S: [あ…

S:→ え? いや、すごいね。○○ちゃん、なんでそんな上手に買えんの…

面白い話してください」と言っている。このような、突然の指示に対して、Yは、最初は、「なに↑それ。」と強く反発している(03行目)。その後もTとOのからかいが続くが(省略)、18行目から、Yは、「さいきん: ちょっとひとつ:: (.) なんか。」と最近のできごとを語り始めようとしている。

【会話例5-5】 [面白いこと_OYT] 25:28

- 01 T: じゃYさんとりあえず面白い話してください。
02 (0.5)
03 Y: .hhなに↑それ. h::[: .hhh
04 T: [いつもの.
(省略)
18 Y: 最近: ちょっとひ[とつ:: (.) なんか.
19 O: [ch ch {咳}
20 T: ° はい°
21 (0.8)
22 Y: あの: おもしろいことが(h):: ← 逸脱
23 O: hh:
24 T→ だから(h):: だから::
25 Y: .hh だって おも(h)[しろいん· .hh
26 T→ [まいかいゆっている:[のほ::
27 Y: [(だ(h)よ)
28 T→ な↑んで最初にそうやってなんかハードルを上げるん[ですか. ← 非難
29 Y: [だって面白いことって
30 いうからじゃあ私面白いこと話す: (.) よ. 今から(h)::
31 O: hhh[hh
32 Y: [hh hh
33 T→ おもしろい(というより)わからないといえいいのに.

Yが、18行目から「最近ちょっとひとつ:: (.) なんか:」まで言い出し、最近のできごと

とについて何か語ろうとすると、Tは、「° はい° 」と聞く姿勢を示す(18行目)。しかし、その後、Yは、「あの:: おもしろいことが(h):: 」と、面白い話をすることを予告するが、Y自身も途中で笑ってしまい、発話を中断してしまう(22行目)。これは、TとOのからかいがあったにも関わらず、自分の語りがおもしろいものと事前に特徴づけるのは、常識から外れた行為であるためであろう。そのことをY自身も承知しているため、笑ってしまう。

このようなYの逸脱行為に対して、Tは、24行目から「だから(h):: だから:: 」と直前の発話を受け、「毎回言っているのは:: 」と、Yの行為が以前にも何回かあったことを示唆し、「な↑んで最初にそうやってなんかハードルを上げるんですか? 」と、理由を聞く形式で相手の行為について聞いている(24-28行目)。これはその理由が不明なため聞いているのではなく、また、相手に理由説明を要求しているのでもない。この発話は、「おもしろい話してください」という要求に、自分の語りがおもしろいと事前に特徴づけるYの行為が「ハードルを上げる」行為だと解釈し、その行為を問いつめるものである。

Yも、「だって」と理由を述べる形で、「面白いことっていうからじゃあ私面白いこと話す: (.) よ」(27-28行目)と、自分は相手から要求されたことを話ただけであることを述べている。これは、なんでハードルを上げるかについての理由説明ではなく、相手の質問が「非難」であると理解し、自分の行為に対する弁解として行われたものである。

今回の会話データで、「なんで～(の)ですか」の形式で行われる疑問文は、「(「マザー牧場」という場所を何度も繰り返し尋ねる相手に対して)「なんでそんなマザー牧場にこだわ(h)るの。」と言ったり、(びっくりマークのエピソードをおもしろい話として男性に語った相手に対して)「なぜそれを男性に放り込んでしまったんですか。」などがあるが、これらは理由を聞く「質問行為」というより、「非難」として聞こえる。これらは、相手の直前の逸脱した行為を言語化し、その行為が行われた経緯・理由を聞く形

で、相手の行為を低く価値づけているものである。

- 相手が行った行為や使った言葉に対して、意味を聞く

【会話例5-2】の「お(h)もいでってなんすか。」のように、相手が使ったことばの意味を聞く形式は、その言葉遣いの逸脱を指摘する表現としてよく用いられる。また、相手の直前の言動に対して、「なにそれ」のような意味を聞く疑問文も「非難」として慣用的に使われる行為である。

次の【会話例5-6】では、Yが「世界中で起きている地震が日本大地震の原因である」と言うことで始まった話題であり、Oは、地震の仕組みを確認しながら、「境目じゃないところは関係ないのではないかと異議を提起する(01行目)。しかし、Yは、12行目から、どこかの地域でプレートが動いたら、繋がっている他の地域のプレートも動くのではないかと予測したことを述べている。

【会話例5-6】 [地震の仕組み_OYT] 23:47

- 01 O: だから境目じゃない[()-
02 T: [境目じゃないところが[じゃ::
03 O: [関係ないんじゃないですか?
04 (0.4)
05 Y: かもね.
06 O: hhhh .hh
(省略)
12 Y: .hh でもほら どっかでき:: 動いたらちょっと あ:(.) ° 大丈夫?
ちょっとどけますよ(h): ぐ(h)ら(h)い hh {肩を横に回しながら} ← 逸脱
13 O:→ なんですか そのプレートさん. ← 非難
14 Y: hhhh プレート(h).
15 T:→ どういうことですか. ← 非難
16 O: hh

- 17 Y: [プレートさん hh
18 T:→ [全然伝わらないんですけど.
19 O: hh hh

Yは、境目じゃないと関係ないという異論と提示するOとTに対して、12行目で「.hhでもほら どっかでき:: (プレートが) 動いたらちょっと あ: (.) ° 大丈夫?° ちょっとどけますよ(h): ぐ(h)ら(h)い hh」と、あるプレートが動いたら、他のプレートも動くことを、人が他人を避けるように描写しながら説明している。Yは、この発話を言うとき、肩を横に回しながら、何かをよける動きを演じるが、プレートが「大丈夫? ちょっとどけますよ。」と人の感情を持つように比喻されるのはおかしな記述である。

このようなプレートを擬人化するYの行動に対して、Oは、Yを指差しながら「なんですかそのプレートさん。」と、相手に対して、「プレートさん」と名付けてその行動を追及している。

ここでも知らない対象について意味を聞いているだけではなく、直前の相手の行為に対して、「からかい」として用いられている。Yも相手の発話が「からかい」だと理解し、相手の発話をそのまま繰り返し、笑いで対応している。

● 会話の規範から外れた行為に対して、訂正を要求する

次の会話では、会話の規範から逸脱した行為に対する相手の「ツッコミ」という現象を見ていく。次の会話は、「ゆあさ家⁸」という苗字の話題が出たとき、OがYの苗字が珍しい苗字ではないかと質問している。

【会話例 5-7】 [めずらしい苗字_OYT_10:50]

- 01 O: ゆあさってめずらしいですね.

⁸ 仮名である。

- 02 (1.5)
 03 Y: いや p.
 04 (3.0) {下を向いたままお菓子を噛んでいる} ← 逸脱
 05 Y: そうかもね.
 06 O:→ ど(h)へ h- ど(h)っちですか。 ← 非難
 07 Y: ° hh°
 08 (0.8)
 09 Y: でも (.) さ: 温泉地は多いのかな:: と思って.

「ゆあさって珍しいですよね::」(01行目)という発話は、相手の苗字が珍しい苗字ではないかと同意を求めながら確認をしている。「よね」は話し手の認識が聞き手の認識でもあるかを確認する終助詞である。ここでは、Oも日本に居住している日本人であるため、Yの苗字を持つ人がどれくらいいるか直感的な知識は持つが、Yほど知識を持っていないため、確認を求める形で質問をしている。

この確認要求に対して、Yは、初めは、「いや。」と短い応答詞で答える。同意を求める確認要求に、「いや」と否定応答詞のみで答えることは、何か後ろにさらなる説明が来ることを期待させる(串田 2005)⁹。しかし、Yは、何も言わず下を向いたまま、お菓子を食べている(04行目)。3.0秒の比較的長い沈黙の後、Yは、「そうかもね。」と、確信度は低いが一部同意する応答をしている。

「珍しいですよね」という同意を求める質問に対する答えは、肯定か否定の二つの選択肢がある。しかし、Yは、「いや」と否定した後、「そうかもね。」と、一部肯定を行っている。この応答は、どちらの答えにもならず、相反する答えになっており、真偽疑問文の応答になっていない。このように会話の規範に違反している行為が出たとき、Oは、笑いながら、「ど(h)へ h- ど(h)っちですか。」とどちらが答えなのか聞いている。これは、Oにとって、曖昧にされた相手の答えのおかしさを指摘している「ツッコミ」で

⁹串田(2005)は、「いえ」はそれだけで完結した発話になることがままあるのに対し、「いや」はそれだけで完結した発話になることがほとんどないという。

ある。

このような、ツッコミに、Yは、「でも(.)さ: 温泉地は多いのかな:: と思って。」(09行目)と、「温泉地」という特殊な地域においては自身の苗字が多いことを述べている。これは、どちらかを選べなかった理由、つまり、規範から違反した答え方をした理由を述べているものである。

● 相手の冗談に対して、その意味を問う

今までのケースとは異なり、最初から冗談・遊びを行っているという認識の枠の中で行われる疑問文について見てみる。我々は、友人との日常会話の中で、冗談のやりとりをよく行うが、話し手の冗談に対して聞き手も冗談で対応し、冗談のフレームが形成されることがある。「フレーム」とは、会話の当事者が「自分たちが談話の中で何を行っているか」を特定する際の、抽象的な認識の枠組みである(水島 2006)。【会話例 5-8】は、冗談フレームの中で、相手へのツッコミが行われる場面である。

これ以前の会話で、Iは、この会話が録音・録画されていることに対して、「後でこの会話データのCDのジャケットを撮ろう」と冗談を述べている。この冗談に対して、Aは、「普通、このような録音されている内容を学会とかに出してほしくないとか言うが、自分たちは、逆に押し出し過ぎじゃないか」と、自分たちをけなしている。その後もIは、「オリコンチャートとか狙いましょうよ」と冗談を続けている(01行目)。

【会話例 5-8】 [オリコンチャート_ASI] 34:43

01 I: オリ・ オリコンチャートとか狙いましょうよ.

← 逸脱

02 S: hahaha

03 I: だい・ 第二↑位: [みたいな, {アナウンサーの真似}]

← 逸脱

04 S: [hhhh ° だいに(h)い°

05 A: オリコンチャート対象にならない[でしょう.]

← 非難

06 S: [hahaha]haha

- 07 I: [hhh
 08 A: → ど[ういうことや。 ← 非難
 09 I: [すげ- すげ:: 売れてる[(みんな).
 10 S: [hhhh

Iは、今行われている会話実験のデータで「オリコンチャートとか狙いましょうよ」と冗談で提案している。そして、アナウンサーの声の真似をしながら「だい- 第二↑位みたいな。」とオリコンチャート上の仮想の順位を述べ、冗談を続けている。このような会話実験のデータが音楽のランキングであるオリコンチャートに入ることは明らかに非現実的なことであり、冗談・遊びとして言っているものである。

この冗談に対して、Aは、「オリコンチャート対象にならないでしょう」と叱るように、相手の発話を強く否定している。

その後もAは、「どういうことや。」と冒頭にアクセントを置き、イントネーションを下降調にして、相手の直前の発話を追及している。「どういことですか」という形式は、相手の直前の発話に理解の問題が生じ、その意味を聞くために用いる質問の形式である¹⁰。しかし、ここでは冗談のフレームの中で、相手が冗談を行っていることが明確である。このような場面で、相手に「どういうことや」と意味を聞くことは、情報が欠けているため質問をしているわけではなく、直前の相手の発話が常識から外れていることを責めるために行っている「ツッコミ」である。

¹⁰ 実際、次の会話では、Oは、「どういことですか」という疑問文の形式で、直前のYの発話に対する意味を聞いている。Yも理解の問題が生じたと把握し、問題になっている発話の説明を行っている。

[目元ちゃん_OYT] 29:30

- 01 Y: だってなんか販売員の人も[さ:: なんか[ね(h):(.)目元ちゃん:とかいうんだ(h)よ(h)::
 02 O: [hh [° hhh°
 03 O: → >どういことですか.< <情報要求>
 04 Y: 目元を: (1.0) に: こうやってぬってあげるといいですよ[とかいうんだけど.
 05 O: [° はいはい°
 06 Y: 目元ちゃん↑に:: [こうやってぬってあげる[と::
 07 O: [あ:: [いやですわ::

これは、大津（2004）で言われている、話し手がわざと誤ったことや理不尽なことを言い、相手が対立表明をするように仕向けるという方法、つまり、ボケとツッコミのような行為に当てはまる。東京出身のAが「どういうことや。」と、わざと大阪方言を使って述べていることも、ボケとツッコミのようなやりとりを想起させる。そして、Iも、これをツッコミだと理解し、応答せず、「すげ:: 売れてる」と冗談の発話を続けている。

以上、様々な疑問文の形式で行われる「非難」のやり方について見てきた。これらは、対象について情報が欠けているわけでもなく、聞き手に真面目にその答えを要求しているのでもない。逸脱した行為が出現したとき、それについて言語化し、確認したり、意味を聞いたりすることで、「非難」として機能していた。

5.7 考察及びまとめ

本章では、自然会話における「非難」の表現形式を概観し、その中でも頻度が多かった疑問文の形式に注目した。疑問文は、通常、情報を要求する言語形式であるが、あるときは、「問いつめ」「ツッコミ」など「非難」としても機能していた。

まず、ある疑問文が「非難」として機能する場合、通常の質問文と比べて、何が違うかを見た。通常の「質問」は、ある事柄や対象に対して欠けている情報があり（不確定性条件）、その情報を聞き手に求めている行為である（問いかけ性条件）。一方、疑問文が「非難」として理解される場合は、対象に対して情報が欠けているわけではなく、聞き手に対象に対する情報を求めている行為でもないことが会話例からわかった。

続いて、「非難」として機能する疑問文がどのように行われているのか、様々な形式の疑問文から分析した。会話例を見てわかるように、会話の最中、先行する相手の言動が、通常ではない、あるいは、社会的常識から外れた行為が出現する場合、その言動を言語化し問うことは、「非難」として聞こえる。

本章では、真偽疑問文は、相手が行った行為をそのまま言語化し確認する場合、相手

の発話が道理に合うか、筋道が通っているか確認する場合の会話例を見た。これらの例は、聞いている対象（言動）自体は、会話の現場で、見て、聞いて知っていることである。これらは、命題自体が真であるかどうかを聞くのではなく、既に相手の直前の言動に逸脱があることを判断し、疑問文の形式を用いて指摘しているのである。

また、疑問詞疑問文は、相手が行った発話や行為の理由を聞く、相手が行った発話や行為の意味を聞く例が多く見られた。その他に、相手が会話の規範に反する時、訂正を促す、冗談に対してわざとその意味を問う疑問文も「非難」や「からかい」として理解されることを検証した。これらは、対象に関して、情報を知りたくて質問しているのではなく、相手の行為・発話自体をおかしいものとして捉え、それに対する意味・経緯を聞いているのである。

それでは、なぜ、「非難」には、質問の形式を用いるのだろうか。疑問文は、不理解を表示する手段である。逸脱的な言動が出現したとき、それに対して疑問を示すことは、対象になる言動が、自身の判断基準から外れ、理解できないことを示すことになる。そのため、それが不適切である、ふさわしくないという感情を表す手段になるのだろう。

また、「質問—応答」連鎖で、質問は、相手の応答を強く要求する行為である。特に、会話の最中、相手が不理解を表示したとき、それに応答することは、他の発話行為より優先される。不理解が生じてしまうと、会話が進めないためである。会話の中で、相手の言動に逸脱的な要素が現れたとき、疑問文の形式で不理解を表示することは、相手の言動を止めて、それを指摘する強力な手段になるだろう。

メイナード（2000:253）では、なぜたずねることもなく、答えを期待することもないのに、疑問表現を用いるのかについて、疑問文が質問文とならない場合も含めて会話行為をうながすことになる事実を指摘している。主体が疑いを持つこと、そしてその答えを何らかの反応として誰かに求めるという〈場〉における人間の相互行為の動機があるから、我々は、答えを期待しなくても疑問表現で自分の心を表現するのであるという。

そのような〈仮想の会話〉を想起することで、主体は自分の感情を理解し、納得し、受け入れ続けることを指摘している。

本章では、疑問文が「質問」として行われているか、「非難」として行われているか比較的区别されやすい会話例を分析した。しかし、我々の日常会話では、実際に相手から何か質問されたとき、その行為が、単なる情報を要求しているのか、「非難」として行われるのか、判断がつかない場合もあるだろう。このように、「行為」を特定することがむずかしい場合もあり、これを見分けるには、様々な要因から判断する必要がある。今後は、このような曖昧な場合も分析の対象とし、本章での提案をより体系化していきたい。

第6章 相手の否定的側面を語る談話の組み立て方

6.1 はじめに

親しい友人同士で否定的評価が行われる場面を観察すると、冗談でさりげなく話す場面が多いが、一方、言いにくそうに相手に関する否定的側面を伝える場面もみられる。後者のように、相手のネガティブな事柄を指摘する行為は、敏感（delicate）な話題を取り入れることになり、会話において、話し手の慎重な態度が観察される。このような慎重な態度は、一文で端的に表れることがあまりなく、少しずつ様々な手続きを経て、相手に伝えられる。また、否定的評価の発話はあからさまに述べられるのではなく、暗示的に伝えられるのが特徴である。これは、聞き手である受け手¹にも察知され、受け手の反応の仕方にも影響を及ぼす。その結果、話し手が敏感な話題を取り入れるときは、話し手と聞き手の様々な相互行為を通して談話が組み立てられる。

本章では、相手に関する否定的な側面を取り上げて語る時、どのように談話を組み立てていくのかに注目し、我々が敏感な話題を導入する際、話し手と聞き手がどのような行為をしているのかを分析する。特に、話題の導入時に見られる開始部の話し手の行為と話題展開の途中に現われる受け手の行為に注目し、お互いが敏感であることをどのように示しているのかを検証していきたい。

慎重さや敏感さをどのように表しているかは、一発話文で行われるものではなく、言おうとしていた発話に至るまで、長い連鎖を通して行われている。第6章では、このような言語的手続きを見ていくため、データを詳細に観察し、質的な分析を試みる。会話データから言いにくそうに相手の否定的側面を述べる3つのケース（日本語データ2つ、韓国語データ1つ）を詳細に観察し、①話し手は話題をどのように導入しているのか、②相手の否定的側面はどのように伝えられるのか、③聞き手はどのような行為を行うのか、

¹ ここでは、否定的側面を受ける聞き手を「受け手」とした。

という3点を中心に分析する。

6.2節では、本章の会話データで見られる話し手と聞き手の行為の特徴と関連がある先行研究を紹介する。6.3節では、本章で分析する3つの会話データの概要を示す。続く6.4節では、データを詳細に分析する。6.4.1節では、話し手の話題導入行為と否定的な側面を述べる発話を分析する。6.4.2節では、聞き手の介入について分析し、何を行っているのか考察する。最後に、6.5節では、本章の考察及びまとめを行う。

6.2 関連する先行研究

6.2節では、本会話データで見られる特徴的な行為に関連する概念を紹介する。特に、前触れあるいは前置き (preliminary) やサイド・アクティビティ (side activity) について見てみる。

6.2.1 語りやニュースにおける前触れ

語りやニュース告知における前触れ (pre-announcement) は、語りの前にそれがニュースであることを表したり、そのニュースに対しての話し手の態度を表す (Terasaki 2004, Schegloff 2007)。例えば、“Guess what”, “Y’know ~”, “Did you hear the terrible news?”などの発言がそうである。このような前触れの聞き手の応答としては、go-ahead (先に進むこと促す) / blocking (阻止) / hedging (条件次第で先に進むこと促す) という三つの種類が考えられる。そして、その応答様式によって、語り手は次の発話を組み立てていく。つまり、このような前触れは、次の語りを行うための準備行為として行われる。

本稿で扱う語りは、相手の事柄について話す特殊な語りである。否定的評価を行う話し手は、否定的評価を発する前に、「前触れ」を通して、これから行う行為が多少敏感な話題であることを伝えている。このような前触れが実際の会話でどのように表れてい

るのかを分析する。

6.2.2 敬意表現としての前触れ

杉戸（2001）では、「悪いけど」や「言っていないかなあ」のような前触れ表現を敬意表現²の一つとして扱っている。「言っていないかなあ」は、話すという言語行動の主体（話し手）が自らの言語行動について、ある種の「判断」をしたり、その判断を躊躇したりしていることを、独り言として（場合によっては相手に聞こえるように）言語化したものである。このような「メタ言語行動表現」は、言語行動研究の領域で、言語行動についての意識あるいは態度という概念として議論されるものであり、具体的な言語行動を実現する際に、行動主体が意識することで、当の言語行動の姿を決定する要因になるという。

本章で扱う前触れ表現もこのような、「メタ言語行動表現」に該当し、配慮表現の一つとしても考えられるだろう。しかし、杉戸では、作例で提示しているため、実際に行われている会話を分析していない。実際の会話では、メタ言語行動表現がどのように行われているのか、その後どのような行動が行われるのかを分析する必要があるだろう。

6.2.3 サイド・アクティビティー

林（2005）では、会話例の中で、飲み会に参加できるかどうかについての説明をしている話し手の発話の文内の途中で、待ち合わせ時間を確認するアクティビティーが挿入された例を取り上げ、「括弧にくくられたアクティビティー」であると説明している。この会話例で「メイン・アクティビティー」はあくまでも進行中の状況説明であり、挿入されたアクティビティーは補足的な「サイド・アクティビティー」である。このサイド・アクティビティーは、単なる「わき道にそれた余談・脱線」などではなく、メイン・

² 杉戸（2001）では、「敬意表現」とは、コミュニケーションにおいて、相互尊重の精神に基づき、相手や場面に配慮して使い分けている言葉遣いを意味する。

アクティビティを完遂するために欠かせない重要な「予備行為」であると指摘している。

林（2005）では、文脈に依存した「確認要求－訂正」「ことば探し」のサイド・アクティビティを例示しているが、本稿で扱うサイド・アクティビティは、形としては、会話連鎖上、「括弧にくくられたアクティビティ」である。聞き手が話し手の話題導入時に割り込んで行う「わき道それた余談・脱線」に近いと言える。このような挟み込まれた活動は何を行っているのか、またなぜその位置でその活動が行われたのかより詳しく分析する。

6.3 会話データの概要

本章で使用する会話データは、20代の親しい友人同士の会話である。会話実験は、相手の否定的評価を誘導するために、「相手のくせについて、あるいは、相手の初対面の印象について」という話題を事前に設定し、会話参加者に話してもらうことを依頼した。そのため、会話参加者は、提供された話題について語る事が会話の目的になっている。このような特殊な状況を前提とした上で、分析を行う。

本章では、会話データの中で、日本語データ2つと韓国語データ1つを詳細に分析していく。これらは、全て女性同士で行われた会話であり、ある一方の話者が相手の否定的側面を伝える場面である。【会話例 6-1】は、J8がJ7の初対面の印象について語る場面であり、今の印象と違って、初めあったときは自分の周りにいそうなタイプの人ではなかった感想を述べている。【会話例 6-3】は、J5がJ6のくせについて語る場面であり、J5はJ6が普段変な動きをすることを指摘している。韓国語データである【会話例 6-4】は、K2がK1の性格を述べる場面で、普段はあっさりした性格であるが、誰かを好きになると、その男に執着してしまう特徴を指摘している。

会話データは、話題を取り入れるところから次の話題への転換までをひとまとまりの

談話として焦点を当て、どのように話題を導入して、話し手と聞き手がどのように談話を組み立てていくのかを分析する。

6.4 分析

6.4.1 話題導入の仕方と談話の組み立て

我々は、言いにくいことを話題として取り上げるとき、何らかの前触লেরなものを先に述べて、核心なところを後ろに言うことがある。本節では、まず、話題導入時から否定的評価の発話が行われるところまで、その手続きの詳細を見るために、①話題導入部と、②相手への否定的側面を述べる部分とに分けて分析する。

(1) 大まかな評価を先に述べる

まず、話題導入部で大まかな評価を先に述べる会話例から見ていく。【会話例 6-1】は、J7 と J8 がお互いの初対面の印象について話している際に、J8 が J7 に対して、初対面の印象が今とは違って、自分の周りにいそうな人物ではなかったことに言及する場面である。今はお互いが親しい関係であるが、初めに会ったときはそうではなかったことを述べることは、それ自体が相手に対するマイナス面に触れる可能性が高い。このような敏感な話題を取り入れる際、J8 は、どのように発話を組み立てていくのか。

分析に先だって、これ以前の会話内容を説明する。J7 が J8 の印象について、積極的でなれなれしい姿だったことを述べたが、それに対して J8 は、サークルで J7 を初めて見た時、サークルの皆から注目を浴びる、中心的な存在だったことを話す。このような「ほめー反応」の一連のやりとりの後、J7 は「そんな (.) 初対面の: (.) 印象。」と今までの話題を述べることでトピックに区切りをつけて、この話題を締めくくっている(01 行目)。しかし、その後 J8 は、04 行目から「そうなんか」と、今思い出したように何かを言い出し、J7 の初対面の印象について今までとは違う側面を語り始める。

【会話例 6-1】日本語会話資料④ 初対面の印象 01:47

- 01 J7: そんな(.) [初対面の:(.) 印象.
 02 J8: [(ん:)
 03 (.)
 04 J8:→ そうなんか >初対面の印象<、私けっこうバンチョウは:
 05 (.)
 06 J8:→ .hhh なんやろうね.
 07 (1.5)
 08 J8:→ なんかね、今の印象と違うかも.(.) [¥けっこう.¥
 09 J7: [まじ↓で:
 10 (0.8)
 11 J7: .hh 私、あんま変わつとらん.
 12 J8: ま(h)、そ(h) うや(h) ね hh[h
 13 J7: [hhh
 14 J8: ま:たぶんなんか私、全然変わらん[人やと思う-
 15 J7: [なんか、明るくて、いい子、みたいなさ::
 16 J8: あ:: hh ありがとう huhuhu
 17 (.)
 18 J8:→ .hhh バンチョって[最初たぶんなんか:
 19 J7: [その-
 20 J8:→ .hh あんまり:: (2.0) なんやろうね: なんかべ↑つに (.) 苦手とかじゃない
 んやけど:=
 21 J7: =¥うん¥
 22 (1.0)
 23 J7: [あの-
 24 J8:→ [けっこう:(.) グッチと一緒にいる感じのタイプではないかなって[う感じ
 はあった. さいしょ.
 25 J7: [あ::::
 26 (0.8)
 27 J8: ¥なん:やろうね.¥
 28 J7: hhh .hhh

- 29 J8: [う:ん:
 30 J7: [あんまり、まわりにおらんかった:
 31 J8: ん:: ま-まわりに:(.) .hh ち↑がうところにおった.
 32 J7: あ:(.) おんなじところにおらんかつた
 33 J8: [おんなじところにおらんかった,
 感じかな:(.) って思っったけど:
 34 (1.0)
 35 J8: でも違ったね.

① 話題導入部

まず、話題導入の仕方から分析する。04行目からJ8は、「そうなんか >初対面の印象<、私けっこうバンチョウ (J7のあだ名)は:」と相手の初対面の印象について語り始めている。04行目の発話の組み立て方をより詳しくみると、「そうなんか」で始めることによって今思い出したことであるように話題を取り入れている。そして、「>初対面の印象<」というトピックを冒頭で改めて述べ、何か今までとは違う性質の話を始めると示している。これは今行っている行為が課題（初対面の印象を話す課題）として与えられた設定を利用した言い方でもある。そして「私けっこうバンチョウは:」と相手に対する自分の意見を述べるが、ここであえて「私」という一人称を使用し、評価の主体が「私」一個人の意見であることを取り立てている。これは、先立つ会話で、J7が注目を浴びる中心的な存在だったとほめる時と、「皆」がそのように評価していたと述べる時とでは対照的であり、この後語ることは、評価の主体が「私」一個人であることを際立たせる。

そして、主語まで言って発話を一時止め、息を吸いながら「.hhh なんやろうね。」(06行)と自問の形で言い淀んでいるが、このような言い淀みは、なにかがあるが、それを表現する適切なことばがあるのか考えていることを示している。そして、それ以上のことを言わず、1.5秒の長い沈黙が生じる。このような言い淀みや沈黙は、相手の初対面

の印象の述部の産出を遅らせている行為であり、核心の部分遅らせているものである。これは、非優先的な行為の特徴であり (Pomerantz 1984)、後ろにネガティブな事柄が来ることが予測される。

そして、08行目で「今の印象と違うかも。」と初対面の印象と今の印象が異なるという意見を、「かも」という不確かさの表現をも用いて述べている。上でも述べたように、現在親しい関係で、初対面の印象が今と違うと述べることは、後ろで相手についてネガティブなことに触れることに志向している。特にこの発話の前まで、言い淀んだり、沈黙が挟まれ、言いにくさを表示していることから、ネガティブなことについて言及しているように聞こえる。

ここで「今の印象と違うかも。」という表現は、大まかな評価であり、どこがどのように違うのかは、後ろで具体化される可能性が高い。「違う」という評価の後、具体的説明が後続する他の会話例を見てみよう。【会話例 6-2】では、J5 が J6 を初め会ったときと今の印象が違ったことについて言及している。

【会話例 6-2】日本語会話資料③ J6 の最初の印象 10:38

- 01 J5: のんちゃん初めと印象違うな:
- 02 J6: あそうかな.
- 03 (.)
- 04 J5:→ うん. なんか: もっとね:: つきあいづらい人かと思った. [はじめ.
- 05 J6: [あほんと?
- 06 J5: うん.
- 07 J6: へ…… (0.5) ° そっか:° =

J5 は、J6 について、「初めと印象違うな」と会ったときの印象と今の印象が異なることを述べている。そして、J5 は、04 行目で、「なんか: もっとね:: つきあいづらい人かと思った. はじめ。」と言い、J6 について、初めは「つきあいづらい人」とすると予

測していたことを述べている。これは、01 行目で、先に述べた「違う」という大まかな評価に対して、どのように違ったのかより具体化した説明である。このように、「違う」という評価は、どこがどのように違うのか、含意されるものがあり、「違う」という評価を聞いた受け手は、どこがどのように違うのかについて説明が来ることを期待する。

再度、【会話例 6-1】の分析に戻る。このような話題導入の仕方は、これから相手の否定的側面を述べることを予告している。語りやニュースの前触れ (pre-announcement) のように、次の行為を強力に予告しているわけではないが、ここでは次の行為をネガティブに描写することが予測される。

そのように聞こえる理由はなんだろう。まず、非優先的な行為の特徴が言語によく表れている。この会話以前まで、お互いの肯定的な印象を述べる時は、話すスピードが速く、リズムよく話していた。一方、04 行目から J8 は、「そうなんか >初対面の印象<、私けっこうバンチョウは:」と言い出し、「今の印象と違うかも」と述べるまで、発話を短く区切り、言い淀みや沈黙が挟まれ、非流暢な口調になっている。つまり、時間的な滞りが生じている。そして、もう一つの根拠は、単語の選択である。「なんかね」「違うかも」「けっこう」などのことばの選択は、含意されるものがあるかのように聞こえる。特に、「違う」という大まかな評価は、後から具体的な例や説明が来ることが期待される表現である。

会話例の分析に戻り、「今の印象と違う」という J8 の評価に対して、J7 は「まじ↓で:」と意外であったことを示しており (09 行目)、ここでは受け入れも反発もしていない。情報提供 (informing) に対して、「ほんと」のようにニュースとして受け止める反応は、相手のより詳細な説明を引き出す展開になりやすい (Hayano 2013)。しかし、ここで J8 は、それ以上具体的な説明を進めず、0.8 秒の沈黙が生じる。そして、ここで、J7 が逆に J8 初対面の印象を述べる活動が挟まれるが、これについては、受け手の

サイド・アクティビティとして扱い、6.4.2節で詳細に分析する。

② 相手の否定的側面を述べる発話

受け手の介入が挟まれ、そのやりとりが終わる頃、18行目で、J8は、息を吸いながら「.hhh バンチョって最初たぶんなんか:」と言い出し、再びJ7の初対面の印象を述べる行為に戻っている(18行目)。「最初」という単語を冒頭に置くことにより、今現在とは対照的な事柄を述べることをマークしている。そして、「.hh あんまり:」まで言ってまた発話を中断し、約2.0秒の沈黙後、「なんやろうね: なんかべ↑つに(.) 苦手とかじゃないんやけど」と前置き表現を先に述べている。この前置き表現は、続くこの後の相手に対する描写(記述)が「苦手」というカテゴリーよりは弱い、ネガティブな描写になることを強く表している。ここでも、長い沈黙を挟んだり、言い淀みながら言にくいことをマークしている。これに対して、J7も21行目で、「うん」と笑いながら聞く姿勢を維持している。

そして、ようやく24行目で、「けっこう:(.) グッチと一緒にいる感じのタイプではないかなって感じはあった. さいしょ」と、相手が自分と一緒にいるタイプの人ではないことを述べる。ここでは「タイプ」という用語を使い、タイプに入るのか入らないのかというカテゴリー化をすることで、J7を個人として評価しているわけではないことを示す。また「さいしょ」という用語を後ろに付け加えることにより、最初のみそうであり現在はそうではないことを際立たせている。ここまで至ってJ8は、核心である相手の否定的な側面を述べる発話を行っている。これは、前で述べていた「今と違う」ところの具体的な根拠になるものである。

以上のように、相手のマイナスなどところの指摘など、敏感な話題を取り入れるときは、談話的特徴として、何らかの前触れが先に来ることが多い。この会話例では、言にくいさを表示しながら、「今の印象と違う」という大まかな評価を先に行った後、後ろに具

体的な描写や感想を述べているのが見られる。このような行為を通して、後ろでネガティブな事柄について言及することを予告し、核心である部分を遅らせていると言えるであろう。

(2) 自身の否定的側面について知っているか聞く

相手の否定的な側面を指摘する前に、そのような事実を相手自身も知っているか確認を先に行う会話例がある。

【会話例 6-3】は、J5 が J6 のくせを指摘する場面である。J5 は、J6 が人と話したり、ひとに会ったときに変な動きをしていることを指摘している。この会話は、事前に「相手のくせについて」話すように指示された活動の中で行われたものであり、この部分は会話録音が始まって1分程度時間が経った部分に該当する。これ以前の会話では、共通の知人についてなど、指示している活動とは関係のない別の話題で話が進んでいたが、J5 は、01 行目から本題である「相手のくせ」について言及し始めている。

【会話例 6-3】 日本語会話資料③ 変な動き (J5-J6 20代女性) 1:04

- 01 J5:→ でもさ: けっこうのんちゃんさ:: [あれだよね. くせとかさ: 自分で全然
自覚症状ないよね.
- 02 J6: [ん:
- 03 (0.4)
- 04 J6: だっ[てくせなんかないよ.
- 05 J5: [()-
- 06 (1.0)
- 07 J5: hi:::he こわ(h):[い(h).
- 08 J6: [hhhhh
- 09 J5: [hhhh
- 10 J6: [え:: 私くせはないよ::.
- 11 (.)

- 12 J5: え: なんか::
- 13 J6: ° うん°
- 14 J5→ あの:: ひとと話してたりとか::
- 15 J6: ん
- 16 J5→ ひとに:[あつたときに::
- 17 J6: [うまいね: はなしもってくるの:: hh
- 18 J5: [hhh そう、[ありがとう.
- 19 J6: [hhh [hhh .hhh
- 20 J6: うん [hhhh
- 21 J5→ [あ(h)つた[ときに: (.) .hh 変なう(h)ごきするとか:.
- 22 J6: [hh
- 23 (.)
- 24 J6: あつた[ときに::?
- 25 J5→ [>しよっちゅうしてるじゃん:<
- 26 J5→ しよっちゅうなんか変な、奇怪な動きをする[とか::
- 27 J6: [uhhh う(h)そ:しな(h)[いよ:hh
- 28 J5: [>なんか<
- 29 J5: ふつうに皆集まってしゃべっても:なんか:(.)とつじよ(.)たぶんあきてくるんだと[思うんだけど::
- 30 J6: [hhh
- 31 J6: よく知ってるね:.
 32 J5→ とつじよ (.) なんか (0.5) フウウンって {奇怪な動きの真似}
- 33 J6: hhhhhh hh[hhh [hhh
- 34 J5→ [え(h)↑:: [どうしたの::.
- 35 J5: それを: 処理し- うまく処理するのが私の目標.
- 36 J6: あそ(h)うな(h)んだ(h).

① 話題導入部

01 行目の「でもさ: けっこのんちゃんさ:: あれだよね. くせとかさ: 自分で全然自覚症状ないよね。」という J5 の発話は、相手のくせについて、自覚症状があるか確認を

行っている行為である。上でも述べたが、先立つ会話では別の話題で話が進んでいたが、ここで「くせ」についての話題が初めて取り入れられている。この発話の組み立てを詳しくみると、「でもさ: けっこのんちゃん (J6 のあだ名) さ::」で「でもさ:」と逆接の接続詞で発話を始め、相手の事柄について言及し始めることを予告している。「あれだよね」と話を始める「あれ」は、林 (2008) で言及されている「ダミー語」であり、「あれ」の指示対象が後続の発話の中で特定されることを予示・予告しているものである。

そして、「くせとかさ: 自分で全然自覚症状ないよね。」という発話は、否定疑問文の形式を取っているが、相手がかくせを持っているという前提で行われる確認要求である。また、これは、相手のくせについて自分は知っているが、相手はまだ自覚してないだろうという予測の基で行われる質問である。この会話実験は、話題が設定されているため、相手のくせについて話さなければならない状況である。ここでもし相手が、自覚がないという応答が出たら、これから相手のくせについて指摘する活動が出るだろう。つまり、相手のくせについてこれからの語りを拡張する「前触れ」の役割をしている。

しかし、同意を誘う J5 の発話に対して、J6 は 04 行目で、「だってくせなんかないよ」と答え、自分にくせがあるという前提自体を否定している。その後、何の反応も起きず 1.0 秒の沈黙が生じているが、この沈黙は、J5 がこれから J6 のくせについて語りを拡張しようとしたが、J6 から強く拒絶されたため、次の発話をすぐに述べられない状態を表す。そして、07 行目で、J6 のきっぱりと拒絶した行為に対して笑いながら「こわ (h) :い (h) .」と述べている。ここで (08-09 行目)、二人とも笑うことによって、相手の否定を真剣に受け止めたのではなく、冗談として認識していることを示している。

以上のように、相手のくせを述べざるをえない状況で、「くせ」という話題を取り入れ、くせについて自覚症状があるか確認する行為は、これからくせについて述べていく「前触れ」として聞こえるだろう。

② 相手の否定的側面を述べる発話

J6は、10行目で「え::私くせはないよ::。」と再度強く主張するが、自ら再び「くせ」がないことを言い出し、くせについての話題に戻っている。これに対して、J5は、12行目から「え、なんか::。」と言い出し、そこからJ6のくせの例を挙げ始める。ここで「え、なんか::」の「え」は、相手の直前の発言が自身の認識と一致していないことを示し、「なんか::」は、これからくせについての指摘（描写）を始めることを予告している。このような始め方は、相手の拒否に対する反例を提示していく形で行われている。14-16行目から「あの::ひとと話してたりとか::」「ひとに::あったときに::。」と、くせが出る場面を例示していくが、語尾を伸ばすことで、発話の速度が遅くなっている。このような非流暢な話し方に切り替えることによって、敏感な話題について言及していることをマークしている。

J6は、J5の発話の途中「うまいね:はなしもってくるの::hh」(17行目)と割り込んでJ5をほめている。これは、会話録音において、J5の話題の取り入れ方がうまいことをほめる余談が産出されたものであるが、詳細については、6.4.2節で述べることにする。

そして、21行目に至って、「あ(h)ったときに:。」と前の部分を繰り返し、16行目の元の活動に戻っているが、そこで「.hh変なう(h)ごきするとか:。」と相手のくせの指摘が行われている。

【会話例 6-3】では、相手に対するくせについて語るために、「くせについて自覚症状があるのか」確認することで、話題を導入している。このような確認を通して、これから相手の「くせ」について述べることを予告し、核心である相手のくせを述べる発話の出現を遅らせている。

(3) 以前は否定的側面を知らなかったことを述べる

相手の否定的側面を言いにくそうに述べている韓国語の会話例もみてみよう。

【会話例 6-4】では、K2 が K1 の性格について、普段おおざっぱであっさりとしているが、男と付き合ったら、その男に執着するという K1 のマイナス的な性格を指摘する場面である。K2 と K1 は同学年であるが、K1 の歳が一つ上であるため、姉さん（韓国語で「オンニ」³⁾）と呼んでいる。これ以前の会話では、K1 が K2 の特徴として、男とよく会うことを指摘していたが、その話題が終結した後、01 行目からは、逆に、K2 が K1 の性格について述べ始める。

【会話例6-4】 韓国語会話資料① 09:09

- 01 K2: .shhhh (.) 언니가 누구를:
 K2: .shhhh (.) 姉さんが 誰かを:
 02 (1.5)
 03 K1: ° 응°
 K1: ° うん°
 04 K2: 좋아할:: 때까지 잘 몰랐는데:
 K2: 好きになる:: ときまでは よく 知らなかったけど:
 05 (.)
 06 K1: 응:
 K1: うん:
 07 (2.0)
 08 K1: 내가 누구를 좋아한다고?
 K1: 私が 誰かを 好きになるってこと?
 09 K2:→ 어. (.) 까:: 진짜: 언니 보면: >뭐랄까<. 진짜:: 이효리 비슷한: 부분이 많아.
 K2:→ うん. (.) から:: ほんとに: 姉さん見たら: >なんだろう<. ほんとに::
 이ヒヨ리 似ている ところが多い.
 10 K2: =왜:: 이효리도 딱: 대개:: (.) 딱. (0.4) 말 되게:: (.) 직설적으로 잘 할 거
 같고:: (.) 남자한테도 딱 그럴 거 같고 그런데: (.) 안 그렇잖[아]:
 K2: =だって:: 이ヒヨ리도 けっこう:: (.)すごい. (0.4)話 すごく:: (.)

³⁾ 韓国では、女性が目上の女性に対して、「オンニ（姉さん）」という呼称を使う。

ストレートによく 言いそうで:: (.) 男にも すごい そうしそうで でも: (.)
 そうじゃない[じゃん:

- 11 K1: [남자만 빼:-
 내남자 빼::고 (h). hh 내 남자 빼:고 모두에게 직설적이(h)다 정(h)도(h)?
 K1: [男だけ のぞ- 自分の 男 除::いてね(h). hh 自分の(h)男
 除いて 皆にストレート(h)だ み(h)た(h)いな?
- 12 K2: 그치(h): 내 남자 빼::고.
 K2: そう(h): 自分の 男 のぞいて.
- 13 K1: 어(h). 내 남자 빼고 모두에게 (.) 마구 날린다 정[도?
 K1: うん(h). 自分の 男 除いて 皆に (.) すごく 投げる⁴ みたい[な?
- 14 K2: [그러다 언니가 누구를
 좋아하기 전까지 몰랐지?
 K2: [で 姉さんが
 誰かを 好きになる 前まで 知らなかったでしょ?
- 15 K1: 절:대 모른다니까.=
 K1: ぜ:んぜん 知らなかったから.=
- 16 K2: =그런 면이 있는지.
 K2: =そういう 面が あるの.
- 17 K1: 절대 몰라.
 K1: 全然 知らなかった.
- 18 (.)
- 19 K2:→ 근데 누굴 좋아하고 나니까, 아:: (h) 이 언니가 [참::
 K2:→ でも 誰かを 好きに なったら, あ:: (h) この 姉さん [ほんとに::
- 20 K1: [그리고: 남자들: 도 나랑::
 K1: [しかも: 男たち:도 私と::
- 21 (0.5)
- 22 K1: 그런 (.) 연애관계:(.) 가 되기 전까지는:(.) 절:대 몰라.
 K1: そんな (.) 恋愛関係:(.) になる 前 までは:(.) ぜ:ったい 知らない.
 ((省略))
- 30 K2: .hh 사귀면 절대 막:: 자유::- 사귀어도 계속 자유로울 거 같고 뭐랄까:

4 「ストレートに言う」の比喩的な表現

- K2: .hh 付き合ったら 絶対 すごい:: 自由::- 付き合っても 自由にさせてくれ
 そうで なんだろう:
- 31 (.)
- 32 K1: 그리[다가 이제-
 K1: それ[で もう-
- 33 K2: [집착 안 할 거 같고 [막:
 K2: [執着 しなさそうだし [すごく:
- 34 K1: [뒤-
 K1: [後-
- 35 K2: [근데::
 K2: [でも::
- 36 K1: [뒤통수가:- 뒤통수 맞고, 껍껍거리다가 이제 헤어지는 거지.
 K1: [後頭部が:- 後頭部打たれて⁵ むしゃくしゃしながら もう 別れるんだよね.
- 37 K2: .hh .hh::[:
 K2: .hh .hh::[:
- 38 K1: [저는 집착의 여왕이거든요.
 K1: [私は 執着の 女王ですから.
- 39 K2:→ .hh 사귀고 나면 어:짬 그리 변:신하시는지::
 K2:→ .hh 付き合ったら ど:んだけ 変:身なされるの::
- 40 K1: 집착과 질투의 여왕이랄까? (0.8) 질투의 화신.
 K1: 執着と 嫉妬の 女王っていうかな? (0.8) 嫉妬の 化身.
- 41 (1.0)
- 42 K1: 어릴 때부터 그랬어.
 K1: 小さい ときから そうだったよ.
- 43 K2: h:: .hh .hh
 K2: h:: .hh .hh

① 話題導入部

K2 は「.shhhh」と大きく息を吸った後、「姉さんが 誰かを::」と相手について言い

⁵ 「裏切られて」、「不意打ち食らって」の韓国語の表現

始める (01 行目)。しかし、ここで発話を止め、1.5 秒の間が生じ、04 行目から開始し、「好きになる:: ときまでは よく知らなかったけど:」と述べてまた発話を中断する。K1 は、「うん」とあいづちのみ発し、聞く姿勢を維持している。しかし、K2 が発話を始めず、2 秒程度の沈黙が生じる。

このような話題導入の仕方は、前の会話例で見られるように、非流暢な話し方や、沈黙が挟まれ音調句が小刻みになっていることから、話し手がこれから非優先的な行為をしようとしていることが表れている。K2 は、相手が誰かを好きになるまでよく知らなかった事実のみを「前触れ」として示し、何を知らなかったのかその対象はまだ言及していないが、ここでは、その対象が一言では言えないが、何かネガティブな描写が後ろに続くことが予測される。

そして、08 行目で K1 は、K2 が発話を中断した隙間を利用し、「私が誰かを好きになるってこと?」と相手の発話の理解ができなかった部分を聞き返している。この発話は、相手の発話を促す役割もしている。この確認に対して、K2 は、「うん」と短く応答し、その後、09 行目の長い発話を素早く述べていく。「(だ)から:: ほんとに: 姉さん見たら: >なんだろう<. ほんとに:: イヒヨリ 似ている ところが多い。」と、相手を見たら「イヒヨリ」⁶という有名な歌手と性格が似ているところが多いことを述べている。元々この位置は、相手が誰かを好きなる時までよく知らなかったことが何なのか、その対象に関する説明が来る場である。しかし、ここではその対象となる事柄が述べられず、「イヒヨリ」という芸能人を引き合いに出し、相手を比喩的に描写している。

続いて 10 行目で、「=だって:: イヒヨリも けっこう:: (.) すごい. (0.4) 話 すごく:: (.) ストレートに よく 言いそうで:: (.) 男にも すごい そうしそうで でも:(.) そうじゃないじゃん:」と「イヒヨリ」についての説明を続けるが、相手にターンを譲らないため、

⁶ 「イヒヨリ」という歌手は日本で例えば「倅田来未」のような存在である。「イヒヨリ」のイメージは、普段ストレートな言い方をするクールで気の強い女性であるが、恋愛するときは、彼氏に尽くすというエピソードを放送でよく語っているようである。

前の自身の発話（09行目）が文法的に終わる辺りで、「=だって」と走り込んで⁷この発話を行っている（「=」で表示されている）。このように、相手と芸能人である第3者が「似ていところが多い」と結び付け、第3者を記述することで、間接的に相手への言及を行っている。

この比喻の意図を把握した K1 は、11行目で、「自分の男だけ除いて、皆にストレート(h)だみ(h)た(h)いな」と笑いながら同調している。同時に、「男」を「自分の（恋愛対象の）男」に限定している。

このような K1 の承認後、K2 は、14・16行目では、「だけど姉さんが誰かを好きになる前まで知らなかったでしょ」「そういう面があるの」と言うことで、そのような側面について知っていたか相手に確認をしている。ここで「そういう面」というのは、直前の相手の行動を指している。このように、相手の否定的な側面を指摘する前に、まず、相手の行動や性質を知っているか確認を行う行為は、【会話例 6-3】と類似したところがある。そして、こうした確認要求に対して、K1 は、15・17行目で「全然知らなかった」と答えている。このように、語り手が行う知っていたか否かという確認に対し、聞き手の「知らなかった」という応答は、これからの語りの go-ahead になるだろう。

② 相手の否定的側面を述べる発話

そして、19行目に至って、「でも誰かを好きになったら」と述べながら、01-04行目の「誰かを好きになるときまではよく知らなかったけど」という元の発話に戻っている。そして、「でも誰かが好きになったら」と述べ、声の性質を変え、「あ:: (h)この姉さんほんとに::」とため息をつきながら自身の当時の感情を実演している。「ほんとに::」の後ろの述部は省略されているが、「참::⁸ (ほんとに::)」と嘆くことで、相手が嘆息するよ

⁷ 発話の産出スピードを速め、次の発話につなげることにより、相手が発話順番を開始することを未然に阻止している手立てをいう (rush through: Schegloff 1982)。

⁸ 「참」は「真に」「本当に」の意味で、残念である相手の行動を嘆息する感嘆詞として用

うな行動をしたことを表している。つまり、相手に対する自身の否定的な感情を述べることで、相手への否定的な態度を示しているのである。

その後、21行目から K1 は相手の指摘に対して、自分が男に会ってどのように変わるのか説明してゆき、K2 はこれを聞いているが、付き合う段階の話が出てきたとき、30行目辺りで、K1 の普段のイメージは、「付き合ったら男を自由にさせそうで、執着しなさそう」であることを再度述べている (30・33行目)。ここで「~しなさそう」と元々のイメージを挙げているのは、予測していたイメージと実際が違ったことをマークする言い方である。これを理解した K1 も、先取りして「不意打ちを食らって別れてしまう」と男に執着した結果起きたことを自ら述べている。そして、「私は執着の女王ですから。」と自己卑下を行っている。

このように、【会話例 6-4】を見ると、実際、K2 が K1 について、あからさまに相手の性格を指摘しているわけではない。しかし、お互いの共通認識の基で、K2 は K1 の性格に関する手掛かりを提示していく。まず、K2 は、K1 が誰かを好きになる時までには知らなかったことを述べ、話題を切り出している。そして、K1 をある芸能人の性格と似ているところが多いと指摘し、似ている部分を記述していく。K1 自身も K2 が指摘していることに同調しながら、自らの性格を自嘲的に述べていく。そして、K2 は、K1 が誰かを好きになったら、「この姉さんほんとに::」と嘆息が出るように変わることを述べている。

以上のように、相手に対して否定的側面を語るときは、何らかの前触れを置くなど、話題導入の仕方を工夫し、慎重に談話を組み立てている様子が見られる。

6.4.2 サイド・アクティビティーの挿入

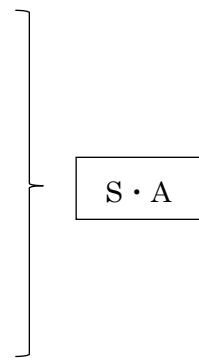
話し手が相手の否定的側面を語る際、受け手からも何らかの行為を始め、別の活動が

いられている。

挟まれている場合がある。これは、語りの途中で挟まれたものとして、ここでは、「サイド・アクティビティー」（会話例では「S・A」と表示）と名付ける。この「サイド・アクティビティー」において、受け手が入っている位置と、これを通して何を行っているかについて分析する。まず、【会話例 6-1'】を見てみる。

【会話例 6-1'】 日本語会話資料④ 初対面の印象

- 08 J8:→ なんかね、今の印象と違うかも。(.) [¥けっこう.¥
 09 J7: [まじ↓で:
 10 (0.8)
 11 J7: .hh 私、あんま変わったらん。
 12 J8: ま(h)、そ(h)うや(h)ね hh[h
 13 J7: [hhh
 14 J8: ま: たぶんなんか私、全然変わらん[人やと思う・
 15 J7: [なんか、明るくて (.)
 いい子、みたいなさ::
 16 J8: あ:: hh ありがとう huhuhu
 17 (.)
 18 J8:→ .hhh バンチョって最初たぶんなんか:



まず、J7のサイド・アクティビティーの開始の位置から検討する。08行目でJ8が「今の印象と違うかも」ということを聞いたとき、J7は、「まじ↓で:」と予想外であったことを示している。上で述べたように、J8の「今の印象と違うかも:」という大まかな評価の後には、より具体的な説明が出てくることが期待される。しかし、J8はそれ以上何も言わず、0.8秒の沈黙が生じる（10行目）。

上のような位置（10-11行辺り）で、自分の事柄を話された受け手として、行われる行為には二つの可能性がある。一つは、話し手を促して話題を拡張していくことである。例えば、「どう違うの?」「そう?どこが?」と質問しながら連鎖を拡張することができる。

しかし、自身のことがネガティブに言われており、しかも相手が言いにくそうに述べていることがわかっている状況で、相手の発話をさらに促すことは、逆に非優先的な行為になる可能性が高い。一方、他に行える行為は、話を他の話題に逸らしたり、別の活動を行ったりすることができる。ここで J7 は、「.hh 私、あんま変わっとらん。」と自分の場合、J8 の印象がそれほど変わってないことを述べ（11 行目）、後者の選択肢が用いられる。また、J7 が逆に J8 に対する初対面の印象を言い出し、評価する側と評価される側の立場が逆転されることによって、J8 が J7 について言及する行為は一時的に中断される。

この発話に対して、J8 は、「ま(h)、そ(h)うや(h)ね hhh」と笑いながら相手の指摘を受け止め（12 行目）、「ま: たぶんなんか私、全然変わらん人やと思う-」と自分自身は全然変わらない人だとやや謙遜しながら特徴付けている（14 行目）。J7 は、この J8 の発話の途中、J8 に対して「なんか、明るくて(.) いい子、みたいなさ::」と、付加的な説明を付け加えている（15 行目）。この「明るくていい子」という表現は、ポジティブなイメージを持ったことをコンパクトで簡潔に表した言い方である。このような「ほめ」に対して、J8 は「あ:: hh ありがとう huhuhu」と照れ笑いを見せながら受け入れている。ここで J8 が「ありがとう」と簡潔に受け止めることで、J8 は、「ほめ-受け入れ」のやりとりをこれ以上拡張せず、連鎖を閉じている。

このように、否定的評価を述べられている受け手 (J7) は、話し手の具体的な説明が期待される位置で、間が生じている場を利用し、逆に相手の初対面の印象がどうだったのか述べている。このような行為は、時間的な滞りが生じた時、偶然起きた現象かもしれないが、結果的には、J8 の否定的側面を語る行為を遅らせることに寄与している。

相手の介入により脇道への脱線がより明示的に起きる【会話例 6-3'】を見てみよう。

【会話例 6-3'】 変な動き

10 J6: え:: 私くせはないよ::.

11 (.)

- 12 J5: え: なんか::
 13 J6: ° うん°
 14 J5:→ あの:: ひとと話してたりとか::
 15 J6: ん
 16 J5:→ ひとに[:あったときに::
 17 J6: [うまいね:はなしもってくるの:: hh
 18 J5: [hhh そう [ありがとう.
 19 J6: [hhh [hhh .hhh
 20 J6: うん [hhhh
 21 J5:→ [あ(h)った[ときに:(.) .hh へんなう(h)ごきするとか:.
 22 J6: [hh

S・A

J6は、17行目で、J5の発話の途中「うまいね: はなしもってくるの:: hh」と割り込んでJ5をほめている。これは、会話録音において、J5の話題の取り入れ方がうまいことをほめる余談・脱線が産出されたものである(17-20行)。J6はなぜこの位置で割り込んでいるのか。J5は12行目から、「え: なんか::」と言い出し、「あの:: ひとと話してたりとか::」と場面を挙げているが、この辺りで、相手がくせについて述べていることは既にわかるだろう。ここのJ5の話し方を見ると、音調句を短く区切り、音を引き延ばすことで、話すスピードが遅くなっている。このように、時間的な進行性に滞りが生じているが、この場を利用し、J6は、J5の話題の取り入れ方をほめている。

そのほめに対してJ5は「hhh そう、ありがとう。」と受け入れている(18行目)。ほめに対する応答を見てみると、J5は「ありがとう」と言いながら、最小限の受け止め方をしている。ここで、相手のほめに対して拒絶や他の反応が来れば、行為の連鎖は他の方向に拡張していく可能性が高い。しかし、J5は「ありがとう」と受け入れることで、それ以上行為を広げず、連鎖を閉じている。

そして、21行目に至って、J5は、「あ(h)ったときに:」と16行目の単語を繰り返して、元の活動(相手のくせの指摘)に戻って、「.hh 変なう(h)きするとか:。」と核心である相

手の否定的なくせを述べる行為を行っている。

【会話例 6-3】でも、相手の話すスピードが遅くなり、進行性に滞りが生じている場を利用し、受け手が別の活動を行っていることで、否定的側面を述べる発話は、結果的に遅れて産出されている。

6.5 考察及びまとめ

本章では、相手に否定的側面を語る談話を取り出し、否定的側面が述べられるまで、どのように談話が展開されていくのか検討した。特に、言いにくさをどのように表示しているのかを検証するため、話し手の話題導入時の行為や、間に挟まれている聞き手の余談・脱線について会話例から分析した。

まず、話題導入時にみられる行為について見てみる。【会話例 6-1】では、J8 が J7 に最初会ったとき、今とは印象が違って、自分の周りにいそうな人ではなかったとことを慎重に述べている。話題に入るとき、J8 が今まで話していた口調が変わり、「なんか」という曖昧なことばを繰り返したり、「なんやろうね」という言い淀みの発話が入ったり、沈黙が長く挟まれていることにより、言葉を慎重に考えていることを表示し、何かネガティブな事柄について言及していることをマークする。また、「今の印象と違うかも。(.) ¥けっこう.¥」という相手の初対面の印象についておおまかな評価を先にして、核心なところをほのめかしている場合も見られる。このような大まかな評価は、どこがどのように違うのかについての詳細な説明が後ろに来ることが予示される「前触れ」として機能する。また、このような前触れを通して、間に様々なやりとりが挟められ、核心部分を遅らせているのが見られる。

【会話例 6-3】では、J5 が J6 の変な動きをするというくせを指摘している。J5 は、相手のくせを指摘する前に、まず、J6 自身が自分のくせについて自覚しているか確認を行っている。このような確認要求は、相手がくせを持っていて、それを自覚していな

いことを前提とした質問である。このような確認要求を通して、話し手は、これから「くせ」について述べることを予告し、相手のくせについて語る環境を作っている。否定的側面を指摘する発話は、語尾を伸ばし、話すスピードを遅くすることで、話すことへの躊躇を表している。

韓国語データである【会話例 6-4】では、K2 が K1 の性格について、普段はあっさりした性格であるが、誰かを好きになるとその男に執着することを指摘している。しかし、初めから端的にその事実を指摘しているのではなく、相手が誰かを好きになるまでは、よく知らなかった事実を先に言及し、さらに、相手を第 3 者に比喻することを通して、相手の性格の否定的な側面を間接的に伝えている。そして、そのような側面を相手自身も知っていたか確認を行い、相手の行動を見て嘆息したことを実演することで当時の否定的な感情を語っている。このような否定的な感情を表示するまで、K2 は、様々な手続きを経て、相手の否定的側面を伝えている。

このように、相手について否定的側面を述べるとき、「前触れ」を置くことでネガティブなことに触れることを予告し、慎重に談話を組み立てていることが明らかになった。提示された三つの会話例の談話構造をまとめると、以下の表 6-1 になる。

そして、話し手が今行っている発話が敏感であることを表示する局所的な手段として、以下のような行為が見られた。

- 発話を短く区切る。
- 間や沈黙を挟む。
- 語尾を伸ばし発話の速度を遅くする。
- 「なんだろう」「なんか」など言い淀みを挟み、適切なことばを探していることを示す。
- 「～かも」「～とか」「～という感じ」「～けど」などの婉曲的な文末表現で終わる。

表 6-1 慎重さを表す談話構造

「慎重さ」を表す談話構造の発話例（話し手の実質的な発話のみを表示）	
【会話例 6-1】	
J8: そうなんか >初対面の印象<, 私けっこうバンチョウは: (.) .hhh なんやろうね. (1.5) なんかね、今の印象と違うかも.(.) けっこう.¥	前触れ
↓	
J8: <u>け</u> っこう: (.) グッチと一緒に <u>お</u> る感じのタイプではないかな <u>っ</u> ていう感じはあつた. <u>さい</u> しょ. (感想・指摘)	否定的評価
【会話例 6-3】	
J5: でもさ: <u>け</u> っこうの <u>ん</u> ちゃんさ:: あれだよ <u>ね</u> . <u>く</u> せとかさ: 自分で全然自覚症状ない <u>よ</u> ね.	前触れ
↓	
J5: あの:: <u>ひ</u> とと話してたりとか:, <u>と</u> に:: <u>あ</u> (h)ったときに: (.) .hh <u>変</u> なう(h)ごきするとか:. (指摘)	否定的評価
【会話例 6-4】	
K2: .shhhh (.) 姉さんが誰かを:. (1.5) <u>好</u> きになる:: <u>と</u> きまではよく知らなかったけど:	前触れ
↓	
K2: うん. (.) (だ)から:: <u>ほん</u> とに: 姉さん見たら: >なんだろう<. <u>ほん</u> とに:: イヒヨリ 似ている ところが多い. (比喩)	否定的評価
↓	
K2: でも誰か好きになったら, <u>あ</u> ::(h) この姉さん <u>ほん</u> とに:: (感情表出)	否定的評価

以上のような行為を通して、核心である否定的評価の発話を最大に遅らせており、最終的に言いたいことを暗示的に述べているのが観察された。

そして、本章では、敏感な話題の展開の途中で現れる受け手のサイド・アクティビティーについても触れている。【会話例 6-1'】では、J8 が J7 について初対面の印象を語る時、逆に J7 が J8 の初対面の印象を述べる行為が挟まれていた。一方、【会話例 6-3'】では、J5 が J6 のくせについて語っているが、この発話の途中、J6 は、J5 の話題の取り入れ方がうまいとほめる発話を入れている。

これらのサイド・アクティビティーが出現する位置を観察してみると、間が生じているとき（【会話例 6-1'】）や、発話の語尾を引き延ばし、速度が遅くなっているとき（【会話例 6-3'】）など、時間的な進行性に滞りが生じたときに産出されることがわかった。敏感な話題を取り入れるときは、言いにくさを示すことによって、このような時間的滞りが生じるが、その結果、相手の余談や脱線を行う機会が多くなるだろう。

また、このようなサイド・アクティビティーは、敏感な話題を述べるメイン活動から一時的に、他の活動をすることで微妙な場の雰囲気や和らげているという解釈ができる。サイド・アクティビティーを挿入することで、その間笑いが生じたり、場を盛り上げることによって、緊張感を和らげる効果があると思われる。会話例として挙げた二つの場面では、受け手（否定的評価を受ける側）がサイド・アクティビティーを開始している。否定的評価を行う話し手は、否定的評価の談話を組み立てる際、今敏感な行為をしていることをマークするが、これを把握した受け手は、相手の発話を促すより、むしろ脇道にそれた余談・脱線を挿入することにより、お互いがより負担を減らす方向に発話を誘導している。サイド・アクティビティーについては、どこからどこまでが余談であるかについてさらに検討し、より詳しい分析が必要である。

本章では、相手の否定的な評価を行ったり、相手の否定的な側面を指摘するという敏感な話題の語りの展開において、話し手の話題導入の仕方と聞き手のサイド・アクティ

ビティ어의存在について分析を行った。相手に対して触れる、しかもマイナス面に言及することは、FTA になりえるので、お互いの配慮が必要となる。このような敏感な行為において、話題開始の仕方の工夫や展開途中でのサイド・アクティビティは、相手に向けた相互作用の結果として現われるものであると言える。

第7章 否定的評価後の FTA 補償行為

7.1 はじめに

親しい友人同士の会話では、相手をけなしたり、非難するなど、否定的な評価を行うことがある。前章で見たように、否定的評価は様々な状況の中で行われており、否定的評価を行うことが親しみを表し、冗談として行われることが多い。しかし、いくら親和的な意図で行った行為であれ、度が過ぎると相手に不快感を与える可能性がある。

否定的評価を行った話し手は、相手のフェイスを脅かす可能性が高い発話を発した場合、あるいは、相手のフェイスを過度に脅かしたと認識する場合、行った FTA を回復させるために何らかの補償行為を行うことがあると思われる。今回の会話データでも、相手の否定的評価を行った後、侵害した相手のフェイスを補うようないくつかの行為¹が観察された。

第7章では、談話全体を視野に入れ、否定的評価における FTA 軽減行為の行い方を分析する。7.2 節では、先行研究から、談話レベルにおける分析の必要性を概観し、7.3 節では、実際、否定的評価における FTA 軽減行為が行われている会話例を取り出し、どの位置で行われているのかを見てみる。また、7.4 節では、否定的評価の後、FTA を補償するために、どのような行為が行われているかを会話例から分析する。そして、7.5 節では、日本語母語話者と韓国語母語話者の FTA 補償行為の出現頻度数を分析し、日・韓においてどのような違いが見られるのか、その相違点を考察する。

7.2 談話レベルにおける分析の必要性

談話全体を視野に入れ、談話の展開に沿ってポライトネスのあり方をトータルに捉える必要性を述べた研究としては、宇佐美（2001）や三牧（2008）がある。

¹ このような行為は、日常的に「フォローする」という言い方も使われている。

宇佐美 (2001) では、「ポライトネス」を、「言語形式の丁寧度」や「言語表現としての丁寧さ」に影響されやすい「一文、一発話レベル」や「いくつかの発話の連鎖レベル」というような短い談話レベルで捉えるだけでは不十分であることを示し、「ディスコース・ポライトネス (DP)²⁾」という概念を提示している。

三牧 (2008) も宇佐美の「ディスコース・ポライトネス」を引用し、一連の発話群のみを切り取って解釈するだけではなく、談話のその後の展開 (会話全体の流れや結末) も含めて分析することが必要であるという。そして、三牧 (2008) では、相手へのフェイスの侵害の程度が非常に大きい FTA を遂行した会話を取り上げ、フェイスを侵害した側の参加者および、フェイスを大きく侵害された側の参加者が、談話の進行と共にどのような相互行為を行うのか明らかにした。三牧は、「FTA バランス探究行動」には、(1) 過度の FTA を犯したと認識する相手から FTA を誘導し、フェイスを侵害された側も相手からの誘導に応じて FTA を遂行する、(2) 過度の FTA を犯した側が、その後自らに対して FTA を遂行する、(3) 相手から多めに FTA を受けたと認識すると自発的に相手に対して FTA を遂行する、という 3 種類の方法を指摘している。

三牧 (2008) では、談話全体において、一方のみが FTA を遂行しているのではなく、相互が FTA アンバランスの調整を行っていることを指摘している点は、意義があると思う。しかし、説明されている「バランス探究行動」の会話例を見てみると、FTA を受けた側は、相手から FTA を受けたため、自発的に FTA を遂行するような質問を行うと解釈している。しかし、このような話題展開時の質問行為は、単に別の話題を進める中で偶然 FTA が遂行されたのかもしれない。このように、その因果関係の必然性が薄いと感じられる分析がいくつか見られた。

²⁾ 宇佐美 (2001:11) では、「ディスコース・ポライトネス」を「一文レベル、一発話行為レベルでは捉えることのできない、より長い談話レベルにおける要素、及び、文レベルの要素も含めた諸要素が、語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体」と定義している。

そこで、本章では、直前に行われたフェイス侵害行為と関連がある³軽減行為のみに限定し、否定的評価を行った側の参加者がどのように、行った否定的評価を補っているのかを分析する。

7.3 否定的評価における FTA 軽減発話の位置

否定的評価における FTA 軽減行為は、否定的評価の前か後ろに、あるいはその途中で、FTA の程度を軽減する行為が行われる場合が見られる。7.3 節では、まず、否定的評価の発話を「FTA 発話」として扱い、談話における FTA 軽減行為がどの位置で行われるのか見てみる。

7.3.1 FTA 発話の前に行われる場合

まず、FTA 軽減行為が、FTA 発話の前に行われる会話例を分析する。否定的評価の前に FTA 軽減行為が来る場合、それは肯定的な評価である場合が多い。【会話例 7-1】は、J3 が J4 の性格について語る場面である。J3 は、01 行目から、「T {J4 のあだ名} (の)性格な::」と相手の性格について言い出し、少し考えた後、04 行目で、「けっこう皆のこと:(.) 考えてくれてるな. いつも。」と思いやりのある相手の性格を挙げている。

【会話例 7-1】日本語会話資料② 05:02

- 01 J3: .hhhh (0.8) T {J4 のあだ名} (の)性格な::
 02 J4: うん
 03 (8.0)
 04 J3: けっこう皆のこと:(.) 考えてくれてるな. いつも.
 05 J4: そう::? hh
 ((省略))
 12 J3:→ でも:: (1.2) .hhh (.) なんか一人でちゃっかり:(.) ね.

³ 関連性があるか否かは、内容や位置（直後）で判断した。

- 13 J4: ° うん?
 14 J3:→ なにかを終わらせたりとか.
 15 J4: hhhhhh そ[れは:: .hh そんなことは:: .hh
 16 J3: [ね.
 17 J3:→ う::ん すごい- あの:: おれからしちや: 几帳面すぎるというか.

そして、04行目で、J4の性格として、「けっこう皆のこと:(.) 考えてくれてるな. いつも。」と、気配りがよい性格であるというよい点を挙げている。そして、そのやりとりが少し続くが、その後、12行目から「でも::」という逆説のマーカ―を使い、「なんか一人でちゃっかり:(.) ね. なにかを終わらせたりとか:」と一人で抜け目なく何かを終わらせるという行動の例えを挙げ、「おれからしちや: 几帳面すぎるというか」と相手の行為について几帳面過ぎると否定的に価値づけている。

このように、否定的評価を行う行為に先立ち、肯定的評価を行うことは、FTA軽減行為が事前に行われている典型的な例である。このような行為は、何か評価すべき場面(研究会、反省会)でよく見られる現象である。

ここでもう一つ、否定的評価の前に肯定的評価を行っている会話例(韓国語データ)も見てみる。会話例は、K6が、K5の性格について初めは、すごく活発な性格だと思ったが、後で知り合ったらそれほど活発な性格でもなかったことを述べている。01行目で、K6がK5に対して、「すごく活発な性格だなと思ったよ」と言いながら、03行目から活発な性格だと思った根拠を挙げていく。

【会話例 7-2】韓国語会話資料③

- 01 K6: 응:: 그리고: 대개: 음:: (0.4) 되개 활발한 성격인줄 알았어.
 K6: う::ん それと すごく うん:: (0.4) すごく 活発な 性格だなと 思ったよ.
 02 K5: 나?
 K5: 俺?
 03 K6: 어. 왜냐면 연- 그 연락부장:: 지원했잖아: 오빠가::

- K6: うん. なぜかというと れん- その 連絡係 志願したでしょ: 兄さんが::
- 04 K5: 응.
- K5: うん.
- 05 K6: 어. 그래가지고 (.) 갑자기 막: 못 보던 얼굴인데:: 막, 지원하는 사람 아무도 없었는데: 그 전에는: 오빠가 막 하니까, 아, 되게 활발한 성격 이구나, 그랬지::
- K6: うん.それで (.)いきなりすごい見たことない顔なのに::志願する人誰もいなかったのに:その前に:兄さんがやったからあ,すごく活発な性格なんだ,そう思った::
- 06 K5: [응::
- K5: [うん::
- 07 K6:→ [>근데<(.) 막상 알고 보니까 그렇게 활발한 성격도 아니더라고:.
- K6:→ [>でも<(.) 이ざ知って みたら そんな活発な性格でもなかったね:.
- 08 K5: chch {기침} 아니야: 나 되게 활발해.
- K5: chch {咳} いや::俺 すごく活発だよ.
- 09 (0.8)
- 10 K6:→ 그건 아니지:.
- K6:→ それはちがうでしょ:.

01行目で、K6が「すごく活発な性格なんだなと思ったよ。」とK5が最初会ったときは、肯定的なイメージだったことを述べている。そして、03-05行目で、活発と判断した根拠として、K5が最初に、誰もしようとしなかった連絡係を志願していたことを挙げている。しかし、このような肯定的な側面を挙げた後即座に、「>でも<(.) 이ざ知って みたら そんな活発な性格でもなかったね:。」と取り上げた肯定的側面を打ち消し、否定的評価を行っている。

この会話例では、肯定的評価を行ってFTAを軽減しているというよりは、否定的評価を行うために、肯定的評価を行い、関連する話題を事前に取り入れているようにも見える。その根拠として、まず、「最初~だと思った」という形式が、予想していたこと

と実際違ったという時に用いる前置きの形式であることが挙げられる。そして、相手の肯定的な印象を述べた直後、07行目で走り込むように、「>でも<」という逆説の接続詞を用いて、肯定的な印象が知ってみたら違っていたという発話を素早く述べている。このように、発話が文法的に終わる場所で、走り込むように次の発話を始めることは、相手が発話順番を開始することを未然に阻止している行為であり、ここでは、相手が反応する機会を与えていない (rush through: Schegloff 1982)。これにより、自身が言いたかったことを先に言い終わらせようとしているように見られる。

このような肯定的な側面を打ち消す行為は、7.4節で説明する FTA 後の補償行為(否定的側面の解消・改善)と正反対の行為である。

7.3.2 FTA 発話の途中で行われる場合

FTA 軽減行為は、複数の相次ぐ FTA 発話の途中で行われる場合も見られる。【会話例 7-3】では、K7 が K8 と出会う前にメールのやりとりだけをしていた頃、メールを読んで、「姉さん (ヌナ)⁴」と呼んでいる共通の知人と話し合ったエピソードを語っている。ここでは、K7 がメールで、若者言葉を使っていたことに対して、共通の知人と否定的な評価をしていたことを伝えている場面である。

【会話例7-3】 韓国語会話資料④ 04:00

- 01 K7: 처음에 니가 메일:- 메일을 나[랑 주고 받았을 때:
K7: 最初 お前が メール:- メールを 俺[と やりとりしてた とき:
- 02 K8: [hhhh어
K8: [hhhhうん
- 03 K8: 어.
K8: うん.
- 04 K7: 메일에 대해서 누나랑 얘기한 적이 있어.

⁴ 韓国では、男性が年上の女性を呼ぶとき、「ヌナ (姉さん)」という呼称を使う。

- K7: お前の メールに ついて 姉さんと 話した ことが あるの.
- 05 (0.5)
- 06 K7: 아이 그 친구가 이렇게 메일이 왔었다:: 그러니까 누나가 그랬단 말이야.
K7: ああ その友達から こう メールがきてた:: そうゆったら 姉さんが 言ったの.
- 07 K7:→ 썸?
K7:→ 先生⁵? {縮約形で発話されている、若者言葉}
- 08 K8: hh
K8: hh
- 09 K7:→ 이거 막 썼잖아 니가. hey yo.
K7:→ これ すごい 書いてたじゃん お前が. ヘイ ヨー⁶.
- 10 K8: ㄹ어:ㄹ
K8: ㄹうん.ㄹ
- 11 K7:→ 쌤: 이런거 치니까, 아:: 개: 좀 이상하다고 누나가 그랬었어. (0.5)
지금은 누나랑 니가 베스트지만:
K7:→ 先生 {縮約形} こういうの 書いてたから, あ:: あの子: ちょっと おかしい
って 姉さんが 言った. (0.5) 今は 姉さんと お前が ベストフレンドだけ^ど:
- 12 K8: 어 hhhh
K8: うん hhhh
- 13 K7: 그때 당시에 누나가 아: [나는-
K7: その時 当時は 姉さんが あ: [私は-
- 14 K8: [>그뻘<
K8: [>そのときゃ<
- 15 K8: 어=
K8: うん=
- 16 K7:→ =애랑 좀 못 어울릴 거 같애. 이런 스타일 안 좋아해: 막 이러더라구
누나가::.
K7:→ =この子と ちょっと 付き合えなさそう. こういう スタイル好きじゃない:
こう言ってたよ 姉さんが::.

⁵ 「쌤 (セム)」は、先生の縮約形であり、若者言葉である。ネット用語に由来しており、最近
は日常生活でもよく使われている。ここでは、三人の共通の知人である「指導先生」を指す可能
性が高い。

⁶ 「hey yo」と、英語の挨拶（呼びかけ）であり、ヒップホップをしている若者が使っているイ
メージがある。

01-04 行目で、K7 は、「最初お前がメール∴ メールを俺とやり取りしてたとき：メールについて、姉さんと話したことがあるの。」と、K8 のメールに対して、共通の知人（姉さん）と話し合ったことがある事実を述べ、初対面の印象に関連する話題を取り入れている。そして、06 行目から、共通の知人と話し合った内容をそのまま再現している。

K7 は、「ああ その友達から こう メールがきてた∴ そう言ったら 姉さんが言ったの。」と、当時 K8 から来たメールの内容を共通の知人に話したら、共通の知人が何か言ったことを述べていることから、その話の引用が続くことが予測される。しかし、その話の内容がすぐには出て来ず、07 行目から 10 行目まで、当時 K8 がメールで使っていた言葉の確認を行う作業が挟まれる。07 行目から、「先生 {縮約形}」や「ヘイヨー」など K8 がメールでよく使っていた言葉を次々と挙げてゆき、K8 の確認（10 行目）を得ている。そして、11 行目から K7 は、「先生 {縮約形}、こんなの書いてたから、あ∴ あの子ちょっとおかしいって姉さんが言ってた。」と共通の知人と、相手（K8）に対して「おかしい」と評価していたことを伝えている。

その後、「今は姉さんとお前がベストフレンドだけど∴」と現在は、相手と姉さん（共通の知人）のベストフレンドであるほど仲がいいことを付け加えているが（11 行目）、続き 13 行目から、「当時は、姉さんがあ∴ 私は- この子とちょっと付き合えなさそう。こういうスタイル好きじゃない∴ こう言ってたよ姉さんが∴。」と姉さんが言った内容を述べ、まだ知り合う前の当時は、共通の知人（姉さん）と一緒に否定的に評価していたことを語っている。

このように、共通の知人が相手の悪口を言ったことを伝える FTA 発話の間に、今はその知人と仲がいいという事実を挟み、当時のみそうだったことを際立たせ、FTA の程度を軽減しているのである。

7.3.3 FTA 発話の後に行われる場合

FTA 発話の後に行われる軽減行為は、前に行った FTA の内容を補償させる働きが強い。そのため、FTA の後ろに行われる軽減行為は、「FTA 補償行為」と呼ぶことにする。

ただし、このような補償行為は、FTA 発話の直後に行われる場合もあれば、一連の「評価（からかい）－反応」の長いやりとりが終わったあと、行われる場合もある。あるいは、会話データには出てないが、会話録音が終わった後、何らかの機会を利用し、補償行為（謝罪、弁償等）が行われる場合もあるだろう。本研究では、会話データに出現している否定的評価に対する補償行為のみを分析の対象とする。

7.4 節では、このような否定的評価の後の補償行為がどのように行われているのか、その行為の具体的なやり方（方略）を分析する。

7.4 否定的評価後における FTA 補償行為の種類

否定的評価を行った後、話し手が FTA を補償する言語行為として、(1) 否定的な側面の肯定化、(2) 相手の立場から弁解する、(3) 自分もそうであることを述べる、(4) 否定的側面の解消・改善、(5) 他の側面をほめる、(6) 自身の判断を疑う、という六つの行為が見られた。会話例をみながら、それぞれの行為について説明する。

(1) 否定的な側面の肯定化

否定的な側面を肯定化する行為は、相手に対して否定的な側面を話した後、そのような否定的な側面に肯定的な側面もあることを述べ、マイナスの程度を和らげる行為である。

次の【会話例 7-4】では、J2 が、自身の声の大きさについて言い出している（01 行目）。これ以前の会話で、J1 は J2 のくせとして、声が大きいかを指摘している。その後、別の話題の会話が挟まれるが、J2 が再度「自身の声の大きさ」の話題を持ち出

している場面である。

【会話例 7-4】 日本語会話資料① 07:57

- 01 J2: 声でかいというのは昔から::=
- 02 J1:→ =昔からね. そうわかりやすい-
- ((省略))
- 10 J1:→ いや 俺がね:: [ほんとに あ:: この人声大きいなあ[と思ったのは::
- 11 J2: [うん [hhhh
- 12 J1:→ .hh たっちゃん {J2のあだ名} (.) と あと中国人全般だよ.
- 13 J2: [あ::↑::: そうやね::
- 14 J1: [hhhhh
- 15 J1: ちゅうごく-
- 16 J2: [うんうん
- 17 J1: [旅行行ったときに:: まじこいつら声でけえな::
- 18 J2: uhhhh
- 19 J1: もう二回ぐらい. hh
- 20 J2: なるほどね.=
- 21 J1: =うん
- 22 J1: いやいいことだと思うけど[ね. FTA 補償行為
- 23 J2: [わる. 確かに.
- 24 J1: 特にプレゼンの時とかね. FTA 補償行為

01行目でJ2は、自身の声の大きいことは昔から言われているという事実を言い出す。この発話に対して、J1は、J2の声が大きいことはわかりやすいと同調している。さらに、J1は、声が本当に大きいと思った人は、J2と中国人全般だと述べながら、中国に行ったとき、本当に声が大きいと感じたことが2回あるという経験を述べている。この経験に対して、J2も笑いながら(18行目)、「なるほどね。」と納得する様子を見せる(20行目)。

しかし、J2の声の大きさに関するひとまとまりの話題が終わろうとしているとき、

J1は、22行目から「いや」と話を転換するマーカーを使い、「いいことだと思う」と、声が大きい特徴について、「よいこと」というプラスの方向に変えている。そして、「特にプレゼンテーションの時とかね」と、声が大きい事柄が有利である状況の一例を挙げている(24行目)。J1はこれ以前の会話で、J2の声が大きいことをからかうように指摘していたが、22行目から、声が大きいというマイナスな事柄はよい点もあると、マイナス評価をプラス評価に転換しながら、前に行ったFTAを緩和している。

韓国語会話例でも似たような例が見られる。次の【会話例7-5】では、K1がK2の特徴の一つとして、男に(人数的に)よく会うという事柄を挙げている。

【会話例7-5】 韓国語会話資料① 08:24

- 01 K1:→ G. 남자를 잘 만난다. hhhhh
 K1:→ G {K2のフルネーム} . 男によく会う. hhhhh
- 02 K1:→ G의 특징 일. 남자를 잘 만난다.
 K1:→ G의 特徴 いち. 男によく会う.
- 03 K2: 그다지↑::
 K2: そんなに↑::
- 04 K1:→ 뭐: 그다지야↑::
 K1:→ 何が: そんなにだよ↑::
- 05 K2: 사실 몇 명 안 되잖아::
 K2: 実際 何人かに 過ぎないじゃん::
- 06 (1.0)
- 07 K1:→ 기간이 짧잖아:: hh[hh
 K1:→ 期間が 短いでしょ:: hh[hh
- 08 K2: [hh
 K2: [hh
- 09 K1:→ 기간이 짧잖아. 기간이::
 K1:→ 期間が 短いでしょ. 期間が::
- 10 (1.0)
- 11 K1: 아주: 근데: 좋은 특징이야.

- K1: **すごい: でも: よ:い 特徴だよ.** FTA補償行為
- 12 (0.8)
- 13 K2: **뭘[:?]**
- K2: **何が[:?]**
- 14 K1: **[바람직해.**
- K1: **[望ましい.**
- 15 K2: h: {鼻笑い}
- K2: h: {鼻笑い}
- 16 K1: **잘 만나야지:: (1.0) 못 만나는데 낫냐? 잘 만나는데 낫지.**
- K1: **よく 会わなきゃ:: (1.0) 会えない ほうが いいの? よく 会えるほうが**
いいでしょ. FTA補償行為
- 17 K2: **그런가::**
- K2: **そうかな::**

K1は、01行目から、「G (K2のフルネーム)、男によく会う。」と、言いきり⁷の形式で、相手が男によく会うことを特徴として指摘している。この事実は一見ほめのように見えるが、女子同士の会話において、「男とよく会っている」という事柄は一人の男に定着できず、次々に新しい男に多く会うことを意味し、好ましい性質ではない。K2は、K1の指摘に対して、「そんなに↑::」とそれほど会っていないと否定し(03行目)、「実際、何人かに過ぎないじゃん::」と数的には多くないことを述べている(05行目)。K1は、K2の否認に対して、「(付き合う) 期間が短いでしょう。期間が::。」と、数ではなく、「期間」の問題であると、「期間」という属性を強調している。

しかし、その発話の後、K1は、11行目から「すごい: でも: よ:い特徴だよ」と、男とよく合う特徴がよい性質であることを述べながら、プラス方向に転換させている。続いて、「望ましい」と述べ、肯定的な価値づけを行っている。このK1のプラス評価の発話に対して、K2が鼻で笑うと、K1は、「よく会わなきゃ::」と述べ、「男を会えない

⁷ 発話の末尾に、「の」「だろう」「よ/ね」などの文末の要素が付加されない形式

より、よく会える方がよい」という、男と多く会う利点を挙げている。つまり、「男とよく会う」という事柄の否定的な側面を肯定化し、よい面を取り上げることで、行った FTA を補っている。このように、初めは、からかうように否定的評価を行っているが、後からそれがよい点もあることを述べることで、否定的な側面を肯定化しているのである。

その他にマイナス評価をプラスに転換させる例として、日本語のデータでは、相手の奇怪な動きを指摘した後、それがおもしろいと述べたり (J4-J5)、相手がいじられるのが好きな性格であることを指摘した後、自分はいじるのが好きな性格なので、お互い補え合えてよいと述べる (J2-J3) ものがあった。

韓国語のデータでは、相手の初対面の印象が冷たかったことを述べた後、社会ではそのような印象がいいときもあることを話し合ったり (K10-K11)、相手の学期初期の失敗談を指摘した後、その結果、皆が覚えてくれる利点もあることを述べていた (K1-K2)。

(2) 相手の立場から弁解する

相手の否定的な行動や性格について述べたが、その後、取り上げた行動や性格に対して、相手の立場から弁解している行為もみられる。つまり、これは、否定的評価を行った者が、評価された相手の立場になって、そのような行為をした正当な理由を代弁したり、そのような結果になった経緯を相手の代わりに説明する等の行為を指す。

【会話例 7-6】では、J1 は、J2 がおてんばなところがあって何かをよくこぼしたりする行為について言及しながら、昨日も J2 が短時間の中で 2 回ぐらいこぼしたことを指摘している。

【会話例 7-6】 日本語会話資料① 11:07

01 J1:→ 昨日もなんか:: (.) すごい短時間のときに- たんじ- [短時間の中で-

02 J2: [3 時間で hh

- 03 J1:→ なんか2回ぐらいこぼしたよ(h)ね.
 04 J2: hhhh こぼ(h)した(h).
 05 J1: [hhh
 06 J2: [あのね(h)::
 07 J2: さっきも::h
 08 J1: うん
 09 J2: 一人である実験室にいる間こぼした(h).
 10 J1: aha[hahahaha
 11 J2: [hhhhh
 12 J2: 水こぼしてる.
 13 J1: ま: せ↑まいというのものもあるよね. FTA 補償行為
 14 J2: せまいけど::

J1は、01-03行目で、「昨日もなんか::(.)すごい短時間のときに・たんじ・短時間の中で、なんか2回ぐらいこぼしたよ(h)ね。」と相手が何かをこぼした行為を指摘している。J2自身もその指摘に対して、笑いながら「こぼ(h)した(h).」と認め、06-09行目では、「先ほども一人で実験室にいる間、水をこぼした」という経験談を語っている。このようなJ2の失敗談の後、二人は笑っているが、J1は、13行目から、「まあ、せ↑まいというのものもあるよね。」と、「狭い」という実験室の特殊な事情を挙げている(13行目)。これは、実験室が狭いので、ものをこぼす可能性が十分ありえるという、相手の失敗の妥当性を代わりに説明するものであり、相手の失敗が一般的にありえる行為であることを述べている。

【会話例 7-7】では、K4が大学に入学した初期のころ、他の人と付き合わず、一人で遊んでいたことを他の人の話を引用しながら指摘している場面である。

【会話例 7-7】 韓国語会話資料② 02:30

01 K3:→ 그냥 애들이, 재 조금 되게 잘 놀 거 같은데: 막, 은근히 막 [혼자 논다고:

- K3:→ ただ 他の子たちが. あの子 ちょっと すごい よく 遊びそうなのに:
ひそかに [一人で 遊ぶって:
- 02 K4: [hhh: .hhh
K4: [hhh: .hhh
- 03 K3:→ 반수하는 애 아니냐고:: 그래가지고
K3:→ 半浪人⁸してる 子 じゃないって:: 言っててさ
(省略)
- 06 K4: 그때 내가 (.) 그때 처음에 또 친해지는 방법도 잘 몰랐고, 그래가지고.
K4: その時 俺 (.) その時 初め- また 仲よくなる 方法も よく 知らなくて,
それで.
- 07 K3:→ hhh 친(h)해(h)지(h)는- 친해지는 방법을 몰라(h)?
K3:→ hhh な(h)かよ(h)く(h)なる- 仲よくなる 方法を しらないの(h)?
- 08 K4: 어. (0.6) 아이, 벌써 이미 다 친해져 있는거 같아가지고 나는:=
K4: うん. (0.6) ああ, 既に もう 皆 仲よくなっている ようでさ 僕は.=
- 09 K3: =응 끼기가 힘들지? [원래.
K3: =うん (仲間に) 入りづらいよね? [もともと. FTA補償行為
- 10 K4: [어. 그렇지.
K4: [うん, そう.

K3は、01行目で、「他の子たちが. あの子 ちょっと すごい (.) よく 遊びそうなの
に: ひそかに 一人で 遊ぶって:」と、K4が学期の初めに一人で遊んでいたことを他人
の話を引用しながら指摘している。そして、K4が半浪人しているのではないかと疑っ
たことを告げている(03行目)。この指摘に対して、K4は、弁解として、06行目で、
「その時初め- また仲よくなる方法もよく知らなくて、それで。」と、当時初めは親しく
なる方法を知らなかったことを述べる。この発話に対して、K3は、07行目で、「仲よ
くなる方法を知らないの(h)?」と笑いながら相手のことばを聞き返しているが、これは、
大学生にもなり、他人と親しくなる方法を知らないということは、常識から外れる思考

⁸ 大学に籍を入れたまま、再度受験勉強をして、よりレベルの高い大学に受かったら大学を移る浪人の仕方をいう。

であるため、「非難」として機能している。

K4 は、この非難に対して、08 行目で、「ああ、既にもう皆仲よくなっているようさ、僕は。」と、最初皆と仲よくなれなかった理由として、既に皆仲よくなっているように見えたことを言い換えて述べている。この相手の理由を聞いた K3 は、「うん、入りづらいよね?」と同調しながら、既に親しくなっている仲間に入ることは難しいという相手の立場に共感を示している。さらに「もともと」という言葉を加え、一般化することによって、より相手の行動を正当化している。

このように、相手の失敗談やマイナスな行為を指摘した後、相手の立場からそれを弁解することは、そのような失敗や行為が十分ありえるものであり、基準から外れていないことを説明することにより、マイナスの程度を軽減しているのである。

その他、日本語データでは、相手の机が汚いことを述べた後、きれいなのは正直使いづらいと述べたり (J1-J2)、相手が変な動きをすることを指摘し、恐らく飽きてきたのであろうと相手の立場からの予測を述べる行為 (J5-J6) が見られた。

韓国語データでは、相手の初対面の印象について全く覚えがないことを述べた後、恐らく相手がオリエンテーションに来ていなかったためであろうと理由を付け加え、相手の代弁をしていた (K1-K2)。

(3) 自分もそうであることを述べる

相手の行動や性格について否定的評価を行った後、そのような行動を自分も行ったことを、そのような性格を自分も持っていることを述べ、自身がへりくだることで、行った FTA を軽減する場合もある。

【会話例 7-8】では、J5 が J6 の初対面の印象を述べる場面で、04 行目で、「最初に会ったのが自治会の集まりだったじゃん:」と、笑いながら、最初に会ったときの出来事を語り出している。

【会話例 7-8】 日本語会話資料③ 11:05

- 01 J5: さいしょなんだっけな::
 02 J5: なん[か-
 03 J6: [う::ん
 04 J5: hh ¥最初に会ったのが自治会の集まりだったじゃん:¥
 05 J6: そう.
 06 J5:→ で自治会の集まり出たらすごいやそんな顔して: ()hhh
 07 J6: あほんと:↑::
 08 J5:→ ¥ちょうめんど[くせ::¥ h
 09 J6: [うっそ::
 10 J5:→ もうまじ帰ってえみたいな::
 11 J6: [hhhhh うそ::
 12 J6: へ::: 自覚なかった
 13 J5:→ でKさん⁹がしゃべってるのとかも何この人み(h)たいな[そんな感じ
 だった.=
 14 J6: [そう::
 15 J6: [=ほんと?
 16 J5: [でもそれに親近感を抱いた. h[hh FTA 補償行為
 17 J6: [え::
 18 J5: 私もめんどくさいとか思ってた:: FTA 補償行為
 19 J6: 超(やばい)やつじゃん.

J5 は、04 行目で、最初に J6 に会ったのが自治会の集まりであったと語り出し、06 行目で、「で自治会の集まり出たらすごいやそんな顔して:」と、相手が自治会の集まりでとてもいやそうな表情をしていたことを指摘している。そして、08-10 行目で、「ちょうめんどくせ::」、「もうまじ帰ってえみたいな::」と当時相手が面倒くさがっている様子を、声を変え相手の感情になった振る舞いをしながら、次々と描写している。これに対して、J6 は、「うそ」「ほんと?」と驚き・不信を示しながらも、笑いながらおもしろ

⁹ 共通の知人の名前

がって聞いている様子が見られる。

しかし、J5 は、16 行目から、「でも」と流れの方向性を変えるマーカー（逆接の接続詞）を使い、「それに親近感を抱いた.hhh」と笑いながら述べ、そのような相手の行動を見て、違和感よりは「親近感」という肯定的な感情を持ったことを述べている。そして、「私もめんどくさいとか思ってて::」と、親近感を抱いた理由として、自分もそうであったと相手への共感を示している。このように、相手の行動を否定的に述べるが、自分もそうであることを述べることにより、相手へのFTAを補っている。

韓国語データでは、自分自身がへりくだる補償行為は見られなかった。しかし、以下の会話例のように、相手を否定的に述べた後、その側面について、「私たち」と共通の枠組みに入れ、自分もそうであることを暗示的に述べる方法が見られた。【会話例 7-9】では、お互いの初対面の印象を語っている中、K9 が K10 の普段の話し方について、「暖かい話か方ではないようである」と婉曲的に述べている場面である。

【会話例 7-9】韓国語会話資料⑤ 03:08

- 01 K9:→ 응, 말투가 (.) 따뜻한 말투는 쏘아닌거 같(h)애(h).ㅁ
 K9:→ うん, 話し方が(.) 暖かい話し方では ㄹないみたいㄹ.
- 01 K10: 어::↑::
 K10: え::↑::
- 02 K9: 아닌[가?
 K9: ちがう[かな?
- 03 K10: [그래?
 K10: [そう?
- 04 (0.8)
- 05 K10: 몰라 나도 모르지::. 난 내 말투는 그냥- (0.8) 그냥 내 말투니(h)까(h).
 K10: しらない 私もしらないよ::. 私は 自分の 話し方は ただ- (0.8) ただ 自分の 話し方 だ(h)か(h)ら.
- 06 (1.0)

- 07 K10: 아:: 따뜻한 말투가 아니다.=
 K10: あ:: 暖かい話し方じゃない.=
- 08 K9: =따뜻한 말투가 뭐 [딱히 있냐? 근데].
 K9: =暖かい話し方って [なんか 別に あるかな? でも].
- 09 K10: [어떻게 따뜻하게 하지?
 K10: [どのように 暖かく するんだろう?
- 10 K9: 따뜻한 말투는 되게, J가 따뜻한 말투야.
 K9: 暖かい話し方はすごい, J {共通の知人の名前} が 暖かい話し方だよ.
- 11 K10: [° 응::°
 K10: [° うん::°
- 12 K9: [J 같은 게.
 K9: [J {共通の知人の名前} のような.
- 13 (1.0)
- 14 K9:→ ° 우린- 우린 아닌 거 같애.°
 K9:→ ° 私たち- 私たちは 違うかも.° FTA 補償行為

K9はK10の話し方について、01行目で、「暖かい話し方ではないみたい」と笑いながら述べている。K10は、この指摘に対して、09行目で、「どのように暖かく話すのか」を質問する。そして、K9は、10行目で、暖かい話し方をしている共通の知人(J)を例として挙げるが、「私たちは違うかも」(14行目)と自身と相手を結び付けて、自身と相手を暖かい話し方をしない枠組みに入れている。このように、相手を否定的に述べているがその属性に自分も含めることで相手に対するFTAを補償している方法が見られる。

その他、否定的評価後に、自分もそのような側面を持つことを述べる行為は、日本語データでは、実験室の相手の机が汚いことを指摘した後、自分の場合、部屋がそれほどきれいではないことを告白したり(J1-J2)、相手が椅子に座ると回るくせを指摘しながら、自分も回していると言及する行為(J5-J6)が該当する。韓国語では、否定的評価の直後、自身の否定的側面を述べる行為は、【会話例7-9】以外には見られなかった。

(4) 否定的側面の解消・改善

相手の過去の印象や行動について、否定的に述べた後、そのような否定的な側面が現在は解消されたことや改善されたことを述べる行為である。

【会話例 7-10】では、J6の初対面の印象が今とは違ったことについて言及している場面である。

【会話例 7-10】 日本語会話資料③ 10:38

01 J5:→ Nちゃん {J6の名前} 初めと印象違うな::

02 J6: あ、そうかな:

03 J5:→ うん. なんかもっとね:: つきあいづらい人かと思った::.

04 J6: あほんとに?=
=

05 J5: =うん

06 J6: ふ::ん そっか:=

07 J5: =うん. 全然ふたを開けたらね、全然だった.

FTA 補償行為

J5はJ6に対して、初めは今と印象が違うことを言い出し、03行目で、「なんかもっとね:: つきあいづらい人かと思った::。」と、初めは、付き合いづらい人だと思った感想を述べている。一般的に、相手の初対面の印象に関して「付き合いづらい」というのは、マイナスの印象を述べるものである。しかし、冒頭で、「初めと印象違うな::」と言及しているので、初めはマイナス印象であったが、その印象が変わったことを前提とした否定的評価である。

これに対して、J6は、最初は「あほんとに?」と意外であることを示すが、J5が05行目で「うん」と素早く確認を与えると、06行目で「ふ::ん そっか:」と、特に反発をせず受け入れている。そして、この一連のやりとりが終わった後、J6は、07行目で、「全然ふたを開けたらね、全然だった」と言い、知り合ってみたら（「ふたを開けたら」と表現されている）、全くそうではなかったことを比喩的に述べ、否定的な側面を打ち

消している。ここで、否定的側面を打ち消している時は、「全然」を繰り返すことで強調している点が見てとれる。

次の韓国語の【会話例 7-11】は、K2がK1の初対面の印象を述べる場面である。K2は、K1の初対面の印象は、入学したばかりの当時、K1がパーマをしてきた姿のみしか思い出せないことを話している(03行目)。

【会話例 7-11】 韓国語会話資料① 00:23

- 01 K2: 첫인상?
K2: 第一印象?
- 02 (2.0)
- 03 K2:→ 그것밖에 생각 안 하는데. (0.8) 언니가: (1.0) 입학했을 때: 머리를 파마를 하고 와서: HAHAHA
K2:→あれしか思い出せないけど. (0.8) 姉さんが: (1.0) 入学した時: (.) 髪にパーマをかけてきて: HAHAHA
- 04 K1: 너무 강렬했구나.
K1: {印象が} あまりにも 強烈だったんだ.
- 05 K2:→ .hh .hh 그게 첫인상이 너:무 강렬해서::=
K2:→ .hh .hh 그게 第一印象が す:ごく 強烈で::=
- 06 K1: =아휴:[::
K1: =あ:[:: {ため息をつく擬態語}
- 07 K2:→ [나는 언니가: (0.4) 나이가 훨씬 더 많은 줄 알았잖아(h), 파마하고 와서::hh
K2:→ [私は 姉さんが: (0.4) 年が すごく もっと 上かと思ってたよ(h), パーマかけて きて::hh
- 08 (0.8)
- 09 K1: 실수였어.
K1:ミスだった.
- 10 (1.0)
- 11 K2: .hh {코 훌쩍거리는소리}
K2: .hh {鼻をすする音}

- 12 K2: 그래서 막:: 갑자기 파마를 풀고 나타나니까: 헉
 K2:それで すごい:: いきなり パーマ とって 現れたら, はっと
- 13 K1: 십 년[은 젊어 보여].
 K1: 十年[は 若く 見える.
- 14 K2: ()
 K2: ()
- 15 K2: 사람이 왜 이렇게 다른거야::
 K2:ひと가なんでこんなに違うの:: FTA補償行為

K2 は、K1 に対して、「姉さんが: (1.0) 入学した時: 髪にパーマをしてきて::」まで言った後、「ハハハ」と大きく笑っている。「パーマをかけてきて::」まで述べて、述部は省略し、大きく笑っていることで、相手のパーマ姿がおかしかったことが暗示される。K1 も、相手の省略された述部を察知し、「強烈だった」ことを付け加えている。さらに K2 は、05 行目で、笑いながら「.hh .hh それが第一印象 す:ごい強烈で::」と相手のことばを受けて、07 行目で、「私は姉さんが: (0.4) 年がすごくもっと上だと思ってたよ(h), パーマかけてきて::hh」と、パーマ姿により、相手が年より老けて見えたことを告げている。この否定的評価に対し、K1 は、08 行目で、ため息をつきながら、「ミスだった。」と自身の非を認めている。

しかし、その後、K2 は、12 行目で、「それでいきなりパーマをとって現われたら、はっと」とパーマと取った姿を見て、驚いたことを実演し、15 行目では、「ひとがなんでこんなに違うの::」と、K1 のパーマをとった後の変化が大きかった当時の感想を述べている。これは、パーマ姿により老けて見えた相手が、パーマをとることで、驚くほど変化したことを述べ、マイナスの姿が改善されたことを意味している。このように、過去の姿は否定的であったが、今はそれが解消・改善されたことを述べることにより、否定的側面を打ち消す結果になる。

このような否定的側面が改善・解消されたこと述べる他の例は、日本語データでは、

相手の初対面の印象について、周りにいそうなタイプの人には見えなかったが、次第にイメージが上がってきたことを述べたり (J7-J8)、相手の初対面の印象が派手であったが、今ならなぜそのように派手な格好をしているのかわかったことを述べる (J5-J6) で、否定的だった印象が解消されたことを述べている。

韓国語データでは、初めは相手がオタクのような人であろうと予想していたが、そういう子ではなかったことを述べたり (K7-K8)、相手を初めて見たとき、近づきにくい印象だったが、今は仲良くなっていることを述べる (K3-K4) 行為も見られた。

(5) 他の側面をほめる

相手に対する否定的評価を行った後、現在話題となっている否定的評価の対象とは異なる別の側面を肯定的に評価し、前に行った FTA を回復させる行為も見られた。

【会話例 7-12】では、J5 が J6 の発言が時々不思議であることを指摘している。

【会話例 7-12】 日本語会話資料③ 09:01

01 J5:→ でもなんか時々発言が不思議だよね::

02 J6: ° そうかな:°

03 (0.4)

04 J6: なんだろうなんか[こう-

05 J5:(→) [()]

06 J6: ふ::ん

07 J5: でも裏表ないよねほんと.

FTA 補償行為

08 J6: ないよ. 裏表ある人って私あんまり見たことないけど.

J5 は、この前の会話を見ると、「相手に抱いている印象」という話題について、J6 が「不思議。」であると言で表現するが、これに対して、J6 は、自分はわかりやすいタイプの人で裏も表も何もないと相手の意見に反発している。すると、J5 が、01 行目

から「でもなんか時々発言が不思議だよね:」と相手の「発言」が時々不思議であることを指摘すると、J6は「そうかな」と反発も受け入れもしない。しかし、J5は、07行目から、「でも裏表ないよね、ほんと」と、前に言及された別の側面のよい点を挙げている。このように、否定的評価を行った後、他の側面をほめることによって、行ったFTAを緩和しているのである。

韓国語の会話例も見てみる。【会話例 7-13】では、K8がK7に初めて会った時の印象を述べている場面である。K8がK7を初め外見だけ見たとき、ヘビースモーカーのように見えたことについて言及している。

【会話例 7-13】 韓国語会話資料④ 06:23

01 K8:→ 나는 어. 진짜 한국스러워가지고 처음에 봤는데: 근데 (.) 진짜 골초일 줄 알았어.

K8:→ 俺は、うん. ほんとに 韓国人 らしくて 初め 見たら: でも (.) ほんとヘビースモーカーだ と 思った.

02 K8:→ 맨처음에. 술도 엄청 먹고 골초에: 막. 그래도 있잖아: 방에: 자기 병 재떨이에 담배꽂초 모으는 애들 있잖아:

K8:→ 一番最初に. 酒も すごい 飲んで ヘビースモーカーで: しかも いるじゃん: 部屋に自分の 灰皿に 吸い殻 集めてる やつら いるじゃん:

03 (0.4)

04 K8:→ 좀(h) 그(h)런(h)줄(h) 알았어.

K8:→ ちょ(h)っと そ(h)うだ(h)と(h) 思った.

05 K7: 하대장 간지 아니야, 하대장 간지. (1.0) 술병 막 쌓아 놓고, 담배 막 꺾 쌓아놓고 막.=

K7: 八大将¹⁰ の感じじゃん, 八大将の感じ. (1.0) 酒瓶 集めて, タバコの 箱 積んで おいて.=

06 K8:→ =어:, 웬지 그럴 거 같았어. 아:: 근데 의외로 대게 섬세한거야: 애가.

K8:→ =ん:, なんか そう 見えた. あ:: でも 意外と すごい 繊細でさ: こいつが.

¹⁰ 長く服役した軍人の姿のキャラクターの比喩

- 07 K7: 섬세한 사람이야 나::
 K7: 繊細な 人だよ 俺は::
- 08 K8: 어 기억력 존(h)나(h) 세고 (.) 다 지적하는거야: 갑자기 어느 순간:
 K8: うん 記憶力 ちょ(h)う(h) よくて (.) 全部 指摘するんだよ: いきなりある瞬間. FTA補償行為

01 行目で、K8 は「俺は、うん.ほんとに韓国人らしくて初め見たら: でも (.) ほんとヘビースモーカーだと思った.」と K7 の初対面の印象が「ヘビースモーカー」という否定的なイメージの人に見えたことを述べている。さらに、02 行目で、「酒もすごい飲んでヘビースモーカーで: しかもいるじゃん: 部屋に自分の灰皿に吸い殻集めてるやつらいるじゃん:」と、K8 がヘビースモーカーのカテゴリーに入る人の特色を挙げ、「ちょっとそ(h)うだ(h)と(h)思った.」と、K7 がそのようなイメージを持つ人（酒好き、ヘビースモーカー）のように見えたことを笑いながら言っている。K7 はそれに対して、K8 が挙げているイメージの人が「ハ大将」というキャラクターであることを言いながら、冗談として流している。

このようなやりとりがあったが、K8 は、06 行目から「あ:: でも意外とすごい繊細でさ:: こいつが」と、相手を「こいつ」と差し、知り合ってみたら意外ととても繊細だったという感想を述べている。続いて、「記憶力ちょ(h)う(h)よくて (.) 全部指摘するんだよ: いきなりある瞬間.」と相手の記憶力がよいことを述べている。このように、ある事柄について否定的評価を行ったが、その後、前の対象と関係のない別の側面をほめていく場面が見られた。

このように、相手をけなした後、別の側面をほめることで、行った FTA を回復させることができるだろう。Bayraktaroğlu (1991) によると、このような行為は、フェイスを持ち上げる行為 (Face-boosting acts : FBA) とも言われている。

他の側面をほめる補償行為は、韓国語データで多く見られた。例えば、相手の男に執

着する性格を指摘しながら、普段の相手の性格は、活発であっさりしているという別の性格をほめていたり (K1-K2)、相手が学期の初め一人で遊んでいたことに対して、皆、噂話をしていたが、それにも限らず初対面の印象はよかったとまとめている様子 (K3-K4) が見られた。

(6) 自身の判断を疑う

否定的評価を行った後、自分が判断したことが正しいのか疑うような発話を発したり、自身の判断が間違っていたことを述べ、行ったFTAを和らげる場面も見られる。

【会話例 7-14】では、J2がJ1のくせについて言及する場面である。J2はJ1が笑うとき、眉毛が八の字の模様になることを指摘している。

【会話例 7-14】日本語会話資料① 07:03-

01 J2:→ .hhh でもくせね:: ボッチ {J1のあだ名} のね、くせはね::

02 J1: うん.

03 J2:→ なんかね、変なときにわらうとね、眉毛がこう八の字になる.

04 J1: ehe[hehehe

05 J2: [hhhhh

((省略))

46 J2:→ すごいよ::

47 (.)

48 J2: .hhh **それがね くせというか::**

49 J1: うん

50 J2: **まあくせなんだろうな.**

51 J2: **くせでも(.) まあちがうかもしれないけど.**

FTA 補償行為

01-03行目で、J2は、「ボッチ (J1のあだ名) のくせはね::」「なんかね、変なときに笑うとね、眉毛がこう八の字になる。」とJ1のくせを指摘している。省略された部分で

も、眉毛がいつ八の字になるか、八の字の程度がすごいというからかい混じりのやりとりが続く。一連のからかひのやりとりが終わる頃、J2は、48行目で、「それがね、くせというか:: まあくせなんだとうな: くせでも(.) まあちがうかもしれないけど。」と、自分がくせとして指摘したものがくせに当てはまるのか疑う表現を使って話題を締めくくっている。つまり、続けて相手の面白おかしい姿を描写しながらからかっていたが、最後に、今まで行っていた否定的側面の指摘が正しい行為なのか疑うことで、前の行為を緩和している。

韓国語の会話例も見てみる。【会話例 7-15】¹¹では、K9がK10の普段の話し方について言及し始める場面である。K9は、K10の話し方について「たんたんとしている」と描写しながら、「暖かくない」と婉曲的に述べている。

【会話例 7-15】 韓国語会話資料⑤ 02:54

01 K9: 너도 근데 (이와)- 나는 어떤지 모르겠는데, 너는 근데 원래 말투가::

K9: あんたも でも ()- 自分は どうか しらないけど, あんたも でも
元々 話し方が::

02 (0.8)

03 K9:→ 대게 조곤[조곤- 조곤조곤 (.) 해가지고::

K9:→ すごく たん[たん- たんたんと (.) しててき::

04 K10: [차갑냐? hhh

K10: [冷たい? hhh

05 (0.8)

06 K9: 막 (0.4) 몰라 말투가-

K9: すごい (0.4) しらない 話し方が-

07 K10: 그래서 차가- 조곤조곤은 안 차가워 보여야 되는 거 아니야?

K10: それで つめ- たんたんとは 冷たく なく 見えるんじゃないの?

08 K9:→ 응, 말투가 (.) 따뜻한 말투는 아닌 거 같(h)애(h).

K9:→ うん, 話し方が (.) 温かい 話し方では ない み(h)たい(h).

¹¹ 【会話例 7-9】の少し前の部分から始まる。

- 09 K10: 어::↑::
 K10: え::↑::
- 10 K9: 아닌[가?
 K9: ちがう[かな? FTA補償行為
- 11 K10: [그래?
 K10: [そう?

01-03 行目で、K9 は、「あんたもでも ()・ 自分はどうかしらないけど、あんたもでも元々話し方が:: (0.8) すごくたんたん・ たんたと (.) しててさ::」と、K10 の話し方が「たんたんとしている」と擬態語で描写している。このような描写に対して、K10 は、07 行目で、「たんたんとは冷たくなく見えるんじゃないの?」と聞き返し、相手が挙げている「たんたん」という擬態語が「冷たい」という性質と関連があるか疑問を示す。それに対して、K9 は、その疑問には答えず、「話し方が (.) 温かい 話し方ではないみ(h)たい(h)」と笑いながら、相手の話し方について意見を述べている。ここでは、K9 が、K10 の話し方に対して、「暖かい話し方」の範疇には入らないことを言うことで、「冷たい話し方」であることを婉曲的に伝えている。

このような評価に対して、K10 が 09 行目で、鳴き声で「え::↑::」といやがる様子を見せると、K9 は、「違うかな?」(10 行目) と自身の判断を疑う表現を使い、一旦、態度を引き下げる様子を見せる。このように、自身の判断が正しいのか疑う表現を使うことは、直前に行った相手への FTA の内容に確信がないことを示す。

このように、否定的評価を行った後、自身の判断が正しいのか疑ったり、自身の判断が正しくないということを述べることは、行った FTA を打ち消すことになるだろう。

以上、否定的評価の後に現れる FTA 補償行為について日本語と韓国語の会話例からそのストラテジーを分析した。7.5 節では、日本語と韓国語の母語話者がどのような FTA 補償行為を多く使っているのかその頻度数を比較する。

7.5 FTA 補償行為における日・韓比較

7.5 節では、日本語母語話者と韓国語母語話者がそれぞれ用いた FTA 補償行為の頻度を比較・分析する。日本語母語話者と韓国語母語話者が使用した FTA 補償行為の頻度を以下の表 7-1 にまとめる。

表 7-1 日本語母語話者と韓国語母語話者の FTA 補償行為の出現頻度

FTA 補償行為	日本語母語話者	韓国語母語話者
(1) 否定的な側面の肯定化	5 (24%)	3 (16%)
(2) 相手の立場から弁解する	3 (14%)	3 (16%)
(3) 自分もそうだと述べる	5 (24%)	1 (5%)
(4) 否定的側面の解消・改善	4 (19%)	5 (26%)
(5) 他の側面をほめる	1 (5%)	5 (26%)
(6) 自身の判断を疑う	3 (14%)	2 (11%)
合計	21(100%)	19(100%)

FTA 補償行為の回数は、日本語母語話者が 21 回、韓国語母語話者が 19 回で、両者に大きな違いは見られなかった¹²。

日本語母語話者と韓国語母語話者に共通して多かった FTA 補償行為は、取り上げた否定的側面を打ち消すストラテジーであった。例えば、(4)のように否定的側面が今は改善されていることを述べたり、(1)のように否定的側面に肯定的側面もあるように述べたりする行為がそうである。つまり、マイナスな側面がもう無くなったことについて言及したり、マイナスをプラス方向に転換させたりすることで、前に述べた否定的な側面を打ち消すストラテジーである。次に、日・韓共通で出現していた補償行為は、(2) 相手の立場から弁解するという補償行為である。これは、取り上げた否定的評価の内容は打ち消していないが、相手の立場になり、相手の代わりに述べるという、「共感を示す」

¹² 一つのセルに 5 以下のものがあり、カイ二乗検定は使えないので、ここでは、表に出ている数値で論ずる。

ポジティブ・ポライトネスに基づいた行為である。

日・韓の相違点として、日本語母語話者の場合、相対的に多かったのは、(3)の相手の否定的な側面を自分自身も持っていることを是認することであり、相手の否定的評価の後、自らに対しても否定的に述べ、自身がへりくだることによって、FTA を補償している様子である。韓国語母語話者の場合、補償行為として、自分自身に対して否定的に述べることはあまり見られなかった。しかし、(5)のように相手の他の側面をほめるという、否定的評価の後、相手の肯定的な側面を取り上げるストラテジーを使うことで、脅かしたフェイスを回復させるような行為を行っている場面がみられた。

(6) 自身の判断を疑う補償行為は、日・韓両国とも比較的少なかった行為であるが、事前に行った否定的評価の主張を弱めることで、FTA の程度を軽減している。ただ、本論文で行われた否定的評価は、親しい友人同士で、「冗談」として行われていることがわかっているため、また、評価の対象の多くが知識的な内容というより、経験的な内容であるため、自身の判断を疑う補償行為が少なかったと思われる。

7.6 本章のまとめ

Brown & Levinson (1987)の FTA 軽減ストラテジーは、一発話レベルの現象に集中している。しかし、FTA を軽減するストラテジーは、FTA 発話だけでなく、その前から、あるいは、FTA 発話が行われた後ろにも表れる。本章では、まず否定的評価における FTA 軽減行為の位置を概観し、否定的評価のやりとりの後ろに「FTA 補償行為」が行われることに注目し、どのような行為を行っているのかを分析した。

続いて、7.3 節では、否定的評価における FTA 軽減行為が、否定的評価の発話を基準として、その前に来る場合、途中に来る場合、後に来る場合の会話例を見てみた。否定的評価の前に FTA 軽減行為が行われる場合は、「肯定的評価」が先に来る場合が見られた。

そして、7.4節からは、否定的評価を行った後、話し手が脅かしたフェイスを回復させる行為を「FTA補償行為」と名付け、その行為を下位分類した。その結果、FTA補償行為には、(1) 否定的な側面を肯定化する、(2) 相手の立場から弁解する、(3) 自分もそうだと述べる、(4) 否定的側面が解消されたり、改善されたことを述べる、(5) 他の側面をほめる、(6) 自身の判断を疑う、という行為が観察された。

7.5節では、日本語母語話者と韓国語母語話者のFTA補償行為頻度を比較し、両国の話者がどのようなストラテジーをより多く使っていたのか分析した。その結果、日本語母語話者と韓国語母語話者とで、共通に多かった行為は、行った否定的評価の内容を解消させたり、改善させる行為であった。日本語母語話者の場合、相手の否定的評価を行った後、自分自身についてもへりくだるストラテジーをよく使っていたが、韓国語母語話者の場合、このようなストラテジーはあまり見られず、否定的評価の後、相手の他の側面をほめるストラテジーをよく用いていた。このように、FTA補償行為の違いに、日韓の言語行動の違いも表れているだろう。

第8章 本研究のまとめと今後の課題

第8章では、本研究の分析をまとめ、総合的考察を行い、最後に今後の課題を述べる。

8.1 本研究のまとめ

本研究では、日・韓の母語話者の親しい友人同士が会話をするとき、実際にどのように否定的評価を行っているのかを分析した。以下においては、本論の主要な議論である第4章から第7章までの各章の目的と、分析により明らかになったことの概要を示す。

第4章

第4章では、否定的評価の発話がどのような状況で出現するのか会話例から分析し、その出現パターンを分類した。そして、日・韓の出現パターン別頻度数を調査し、韓国語母語話者の否定的評価はなぜ唐突に感じられるのかを、否定的評価の発話状況から分析した。

まず、否定的評価が出現する状況には、(1) 行い手主導の否定的評価、(2) 受け手の言動に対する否定的評価、(3) 受け手の自己否定に対する同調、という三つのパターンに分けることができる。

そして、日・韓それぞれの母語話者同士の会話例から、状況の出現パターン別頻度数を分析した結果、日本語話者の場合、「(3) 受け手の自己否定に対する同調」のパターンが多かったが、韓国語話者の場合、「(2) 受け手の言動に対する否定的評価」のパターンが多かった。日本語話者の場合、受け手が自らの非を先に述べることが多く、それに対して、行い手が同調することで、否定的評価が行われるケースが多かった。一方、韓国語話者の場合、受け手の発話・行動に対して行い手が否定・非難するケースが多く見られ、その結果、韓国語話者の否定的評価がより唐突に感じられるのではないかと思

われる。

第5章

相手の直前の発話や行動が、通常から逸脱している場合、それに対する否定的評価を伝えるのに様々な表現形式が用いられる。第5章では、自然会話に近いデータから、相手の直前の発話や行動に対する否定的評価の表明に疑問文の形式が多く使用されている点と、それらが「非難」として使用されている点に注目し、通常の「質問」として行われる疑問文とどのように違うのか、「非難」として機能する疑問文の発話がどのように組み立てられるか分析した。

その結果、通常の「質問」は、対象に対して、欠けている情報があり、その情報を聞き手に求めている行為であるが、疑問文が「非難」として理解される場合は、対象に対して情報が欠けているのでもなく、聞き手にその情報を求めているのでもないことがわかった。そして、このような「非難」として機能する疑問文は、相手の直前の言動をそのまま言語化したり、解釈しながら確認を行ったり（→真偽疑問文）、もしくは、相手の直前の言動の意味や理由を問う形（→疑問詞疑問文）で行われていることがわかった。

第6章

友人同士で否定的評価が行われる場面を観察すると、冗談でさりげなく話す場面が多いが、言いにくそうに相手の否定的側面を伝えるもケースもある。第6章では、相手の否定的側面を言いにくそうに語る談話を取り出し、否定的評価の発話が出現するまで、話し手と聞き手がどのような手続きを経ているのかを詳細に分析した。

その結果、談話的特徴としては、話題導入時に、ネガティブなことをこれから言及すると予告をする前触れや前置き表現があることが見られた。そして、話し手が今行っていることが敏感なものであることを表示する手段として、沈黙を挟んだり、言い淀んだ

り、語尾を伸ばすことで、発話の速度を遅くしている事実が観察された。また、聞き手も、相手が敏感さを表しているのを察知し、相手の発話を促すよりは、余談・脱線を行うことで、否定的評価の発話を遅らせていることが見られた。

第7章

否定的評価は、フェイスを脅かす可能性が高いため、その後、補償行為が行われる場合がしばしば見られる。第7章では、否定的評価後、脅かした相手のフェイスを回復させるために話し手がどのような行為を行っているかを分析した。また、FTA 補償行為における日本語母語話者と韓国語母語話者の相違点について分析した。

まず、否定的評価後の FTA 補償行為としては、(1) 否定的側面に肯定的な側面もあることを述べる、(2) 相手の立場から弁解する、(3) 取り上げた否定的な側面を自分も持っていることを述べる、(4) 否定的側面が現在は、改善され、解消されたことを述べる、(5) 他の側面をほめる、(6) 自身の判断を疑う、という行為が見られた。

そして、日・韓の FTA 補償行為のタイプ別頻度数を調査し、相違点を分析すると、日・韓共通で多かった FTA 補償行為は、(4) 否定的側面が今現在は改善・解消されたり、(1) 取り上げた否定的側面には肯定的な側面もあることを述べる行為である。日本語母語話者と韓国語母語話者が異なる点としては、日本語母語話者の場合、(3) 相手の否定的評価の後、自分も取り上げた否定的側面を持っていることを是認する行為が相対的に多かった。一方、韓国語母語話者の場合、(5) 相手の他の側面をほめるという、相手の肯定的な側面を挙げることで相手のフェイスを補っていた。

以上のような結果から、日本語母語話者は自身がへりくだることで、韓国語母語話者は相手をほめることで、行った FTA を補償していることがわかった。

8.2 総合的考察

8.2.1 日本語と韓国語における言語行動の違い

日本語と韓国語は、語彙や文法など言語形式の面では類似しているところが多いが、実際の言語使用においては、誤解や摩擦が起こりえる場面が多い。本研究では、日本語と韓国語の母語話者同士の会話から、「否定的評価」の言語行動を比較・分析した。このような研究を通して、日・韓のコミュニケーションの一面を記述できたと思われる。

洪^{ホン} (2007:107) では、林 (1990) の論文を引用し、日・韓・中、三カ国のコミュニケーションの特徴を全体的に見ると、日本人は韓国人に比べて親しみや暖かみが足りないという特徴が目立ち、韓国人は日本人と中国人に比べて衝動的で自己主張が強いという特徴を挙げている。また、任^{イム} (2006:11) では、韓国人と日本人のコミュニケーション・スタイルの特徴として、「攻める韓国人と待つ日本人」と表現している。つまり、「韓国人の話し方は、日本人の目にはストレートで攻撃的にとらえられ、日本人の話し方は、韓国人には、核心をつかないもどかしいものであり、相手に心を開いていない印象を与える」と述べている。本論文が分析対象としている「否定的評価」の言語行動においてもこのような日・韓の違いが現れる場面がいくつか見られた。

まず、否定的評価が出現する状況における日・韓の言語行動の違いが見られた。日本語母語話者は、否定的評価の受け手が先に自身の非を話題として持ち出すことが多く、それに対して、話し手(行い手)が同調する形で否定的評価が行われる場面が多かった。これは、自らの非を持ち出すことによって、相手の否定的評価を引き出しやすい環境を作っていると解釈できる。一方、韓国語母語話者の場合、受け手が自身に対する客観的な情報や自分の意見を述べたとき、それに対して行い手が否定や非難をすることで、否定的評価が行われる場面が多かった。以上をまとめると以下のように図示することができる。

受け手：自己否定、自己卑下、失敗談

↓ 同調

行い手：否定的評価

受け手：自身に関する情報、自分の思考

↓ 否定・非難

行い手：否定的評価

〈日本語母語話者の場合〉

〈韓国語母語話者の場合〉

このような出現パターンの相違が、韓国語母語話者の否定的評価が唐突(ストレート)であるという印象をもたらす原因となっているものと思われる。

さらに、相手に対して否定的評価を行った後、どのような FTA 補償行為を行っているかに関して、日・韓の違いが見られた。日本語母語話者は、相手の否定的評価の後、自身がへりくだることで、相手のフェイスを補償していたが、韓国語母語話者は、相手の他の側面をほめることで、相手のフェイスを補っていた。このような傾向は、日本語母語話者は自分を謙遜することで相手の領域にはそれ以上踏み込まないという形で、ネガティブ・フェイスを優先させているが、韓国語母語話者は相手の他の側面に踏み込み、それについてほめるという形でポジティブ・フェイスを満たしていると解釈できる。

以上のような言語行動の違いは、既存の日・韓対照研究でも指摘されているように、相手の私的領域にできるだけ触れないようにする日本語母語話者と、相手の私的領域に触れ、相手を積極的にほめたり、けなしたりすることで、親近感を表す韓国語母語話者の特徴が反映されている結果である。

近年、経済や文化など様々な分野において、日・韓の交流が増えているが、本研究を通して、このようなお互いの違いを理解することで、異文化コミュニケーションにも役立つだろう。

8.2.2 親和的關係における否定的評価

「ほめ」は人間関係を有効に保つための「潤滑油」とされるが、人間関係によっては

「ほめ」よりもむしろ「けなし」のほうが「潤滑油」としての効力を発揮する場合があるという。「汚い字だ」と否定的評価を伝える行為もそれが可能なほど親しい関係であることの表明だからである（山路 2006）。Leech（1983）の「冷やかし」の原理にも、「聞き手との親密性を示すためには、聞き手にとって（i）明らかに偽りであること、および（ii）明らかに失礼であることを言え。」と、丁寧度を低くすることで、親密性が上がることが指摘されている。本論文の会話データでも、親しい友人同士の会話を観察すると、相手へのけなしや非難の発話が多く出現していることがわかった。このような否定的評価は、「遊び」として行われることが多く、笑いを誘発したり、相手への関心を示し、会話の友好的な雰囲気形成に役立つことが観察された。

今までの言語行動の研究は、「丁寧さ」に焦点を当てた研究が多く、相手への「親密さ」をどのように表しているかという点について論じた研究は少なかった。さらに、相手を低く価値づける言語行動を実際の会話を対象に分析した研究は、関崎（2014）以外にはあまり見られない。本研究では、「親密さ」を表す言語行動の一つとして、友人同士が「否定的評価」をどのように行っているのかを分析した。また、否定的評価の発話に限らず、否定的評価を行う前の前触れや、行った後の FTA 補償行為を分析することで、対人関係の調整のためのストラテジーも記述できた。

このようなコミュニケーションの研究は、日本語教育や学習の研究へとつなげることも可能である。例えば、学習者は、単なる情報を要求する質問が「非難」として理解されることもありうることを認知することで、質問を行うときの状況や言語表現により注意を向けることが可能となる。また、日本語母語話者が否定的評価の後、補償行為をどのように行うかを理解することで、対人関係調整の仕方の習得につながると思う。

8.3 今後の課題

本研究では、親しい友人同士の日常会話における「否定的評価」を分析の対象にして

いる。そのため、遊びとして行われる非難やけなしなどが多く、本気で相手を低く価値づけるような行動はあまり見られなかった。

しかし、「否定的評価」の言語行動は、会話のタイプや場面によって、目的に応じた形が出現すると思われる。授業や反省会など相手に忠告をする目的で行われる否定的評価は、相手の言動について意図を聞いたり、改善を求めるような形で行われるだろう。また、嫌いな相手を攻撃したり、職場で相手を批判するなどの場面における否定的評価も、親和的な場合とは全く違う形で行われるだろう。このように、今後は、日常会話だけではなく、教育や会議、反省会など制度的な場面¹での否定的評価も観察することで、親和的な意図で行われる否定的評価との比較を行っていきたい。

また、他の言語行動との比較・分析も可能であろう。「ほめ」のような肯定的評価を行うときと、否定的評価を行うときと表現の仕方がどのように違うのか、また、受け手の対応はどのように異なるのか見ることによって、否定的評価についての理解がさらに深まるものと思われる。

否定的評価という言語行動の研究は、以上のような多角的な方面からの研究を進めることにより、人間のコミュニケーションの仕方や対人関係の原理の解明に迫る研究へと発展することが可能なテーマであると考えられる。

¹ 「制度的場面」とは、医療行為場面・救急コールでのやりとり・法廷場面・教室授業場面・心理療法場面・会議場面などである。これらの特徴は、普通の日常会話場面とは異なっている。

参考文献

<日本語>

- 安達太郎 (1999) 『日本語疑問文における判断の諸相』 くろしお出版
- 安達太郎 (2002) 「第5章 質問と疑い」『新日本語文法選書4 モダリティ』pp.174-202, くろしお出版
- 安部達雄 (2005) 「漫才における「フリ」「ボケ」「ツッコミ」のダイナミズム」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』51-3, pp.69-79, 早稲田大学大学院文学研究科
- 井出洋子 (2006) 『わきまへの語用論』大修館書店
- 李恩美 (2008) 『日本語と韓国語の初対面二者間会話における対人配慮行動の対照研究：ディスコース・ポライトネス理論の観点から』東京外国語大学博士論文
- 李善姫 (2004) 「韓国人日本語学習者の「不満表明」について」『日本語教育』123, pp.27-36, 日本語教育学会
- 李善姫 (2006) 「日韓の「不満表明」に関する一考察—日本人学生と韓国人学生の比較を通して—」『社会言語科学』8-2, pp.53-64, 社会言語科学会
- 林始恩 (2010) 『親和的關係における否定的評価—日本人・韓国人の母語話者同士の会話から—』筑波大学人文社会科学研究科修士論文
- 任榮哲・井出里咲子 (2004) 『箸とチョッカラク：ことばと文化の日韓比較』大修館書店
- 任榮哲 (2005) 「言語行動」『日本語学』24-7, pp.58-59, 明治書院
- 任榮哲編 (2006) 『韓国人による日本社会言語学研究』おうふう
- 任炫樹 (2004) 「日韓断り談話におけるポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」『社会言語科学』6-2, pp.27-43, 社会言語科学会
- 元智恩 (2005) 『日韓の断りの言語行動の対照研究—ポライトネスの観点から—』筑波大学博士(言語学)論文
- 宇佐美まゆみ (2001) 「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想—」『第7回国際シンポジウム報告書—談話のポライトネス』国立国語研究所編, pp.9-58, 凡人社
- 宇佐美まゆみ (2002) 「ポライトネス理論と対人コミュニケーション研究」『日本語教育通信』42, pp.6-7, 国際交流基金
- 宇佐美まゆみ (2003) 「異文化接触とポライトネス—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—」『国語学』54-3, pp.117-132, 武蔵野書院
- 宇佐美まゆみ・李恩美・鄭榮美・金銀美 (2007) 「基本的な文字化の原則(Basic Transcription

- System for Japanese : BTSJ)の韓国語への応用について」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作 平成 15-18 年度科学研究費補助金基盤研究 B(2)研究成果報告書』 pp.48-82
- 大津友美 (2004)「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス―「遊び」としての対立行動に注目して―」『社会言語科学』 6-2, pp.44-53, 社会言語科学会
- 大津友美 (2007)「会話における冗談のコミュニケーション特徴―スタイルシフトによる冗談の場合」『社会言語科学』 10-1, pp.45-55, 社会言語科学会
- 大野敬代 (2005)「「ほめ」の意図と目上への応答について―シナリオ談話における待遇コミュニケーションとしての調査から」『社会言語科学』 7-2, pp.88-96, 社会言語科学会
- 岡本真一郎 (2009)「ポライトネス」大坊郁夫・永瀬治郎 (編)『講座社会言語科学第 3 巻 関係とコミュニケーション』 pp.38-59, ひつじ書房
- 小川一美・吉田俊和 (2009)「ダイナミックな対人関係」大坊郁夫・永瀬治郎 (編)『講座社会言語科学第 3 巻 関係とコミュニケーション』 pp.120-139, ひつじ書房
- 奥山洋子 (2005)「話題導入における日韓のポライトネス・ストラテジー比較-日本と韓国の大学生初対面会話資料を中心に」『社会言語科学』 8-1, pp.69-81, 社会言語科学会
- 尾崎喜光編 (2008)『対人行動の日韓対照研究―言語行動の基底にあるもの』 ひつじ書房
- 川口義一・蒲谷宏・坂本恵 (1996)「待遇表現としてのほめ」『日本語学』 15-5, pp.13-22, 明治書院
- 川村よし子 (1998)「目上に対して「親しさ」を表す会話のストラテジー」『講座日本語教育』 33, pp.1-19, 早稲田大学日本語研究教育センター
- キムギョンブン 金庚芬 (2005)「会話に見られるほめの対象に関する日韓対照研究」『日本語教育』 124, pp.13-21, 日本語教育学会
- キムギョンブン 金庚芬 (2007)「日本語と韓国語の「ほめの談話」」『社会言語科学』 10-1, pp.18-32, 社会言語科学会
- キムギョンブン 金庚芬 (2012)『日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究』 ひつじ書房
- キムジナ 金珍娥 (2013)『談話論と文法論―日本語と韓国語を照らす』 くろしお出版
- 金水敏 (1992)「ボケとツッコミ―語用論による漫才の分析―」大阪女子大学国文学研究室 (編)『上方の文化 上方のことば』 pp.61-90, 和泉書院
- 小玉安恵 (1996)「談話インタビューにおけるほめの機能 - 会話者の役割とほめの談話における位置という観点から―(1)」『日本語学』 15-5, pp.59-67, 明治書院

- 串田秀也 (2005) 「「いや」のコミュニケーション学—会話分析の立場から」『月刊言語』34-11 pp.44-51, 大修館書店
- 熊取谷哲夫 (1989) 「日本語における誉めの表現形式と談話」『言語習得及び異文化適応の理論的・実践研究』2, pp.97-108, 広島大学教育学部日本語教育学科
- 申媛善^{シウオンソン} (2008) 「文末スタイルの運用に関する日韓対照研究—人間関係の変化とポライトネス・ストラテジーの関わり—」筑波大学人文社会科学研究科博士論文
- 杉浦秀行 (2011) 「否定疑問文を使用した評価への抵抗：文法と連鎖位置の接点」『社会言語科学第28回大会発表論文集』pp.60-63, 社会言語科学会
- 杉戸清樹 (1996) 「日本語学と対照言語学：言語行動の対照」『日本語学』15-8, pp.140-146, 明治書院
- 杉戸清樹 (1987) 「発話の受け継ぎ」『国立国語研究所報告 92 談話行動の諸相—座談資料の分析』pp.68-106, 三省堂
- 杉戸清樹 (2001) 「敬意表現の広がり—「悪いけど」と「言っていないかなあ」を手がかりに—」『日本語学』20-4, pp.22-33, 明治書院
- 梶本総子 (2004) 「提案に対する反対の伝え方—親しい友人同士の会話データをもとにして—」『日本語学』23-8, pp.22-33, 明治書院
- 鈴木睦 (1997) 「日本語における丁寧体世界と普通体世界」田窪行則 (編)『視点と言語行動』pp.45-76, くろしお出版
- 関綾子 (2005) 「漫才の笑い—ズレの構造と体系—」中村明・野村雅昭・佐久間まゆみ・小宮千鶴子 (編)『表現と文体』pp.14-23, 明治書院
- 関崎博紀 (2013) 「日本人大学生同士の雑談に見られる否定的評価の言語的表現方法に関する考察」『日本語教育』155, pp.111-125, 日本語教育学会
- 関崎博紀 (2014) 『日本人大学生同士の会話における言語行動としての否定的評価の研究』筑波大学人文社会科学研究科博士論文
- 大坊郁夫・磯友輝子 (2009) 「対人コミュニケーション研究への科学的アプローチ」大坊郁夫・永瀬治郎 (編)『講座社会言語科学第3巻 関係とコミュニケーション』pp.2-35, ひつじ書房
- 田中博子 (2008) 「阿吽の呼吸—暗示的談話の生成」『社会言語科学』10-2, pp.109-120, 社会言語科学会
- 玉城里奈 (2007) 「Social Swearing の相互構築—成員カテゴリー化と会話の連鎖を中心に—」Kyushu Communication Studies, Vol.5, pp.1-21, 日本コミュニケーション学会

九州支部

- 中村雅彦 (1999) 「友人関係のコミュニケーション」『親しさが伝わるコミュニケーション—出会い・深まり・別れ』 pp.116-149, 金子書房
- 中山昌子 (1995) 「親しさと冗談・からかいの表現」『日本語と日本語教育—阪田雪子先生古稀記念論文集』 pp.163-187, 三省堂
- 中山晶子 (2003) 『親しさのコミュニケーション』 くろしお出版
- 中山晶子 (2007) 「親しさを伝える」岡本真一郎 (編) 『ことばのコミュニケーション：対人関係のレトリック』 pp.50-65, ナカニシヤ出版
- 西尾純二 (1998) 「マイナス待遇行動の表現スタイル—規制される言語行動をめぐって—」『社会言語科学』 1-1, pp.19-28, 社会言語科学会
- 西尾純二 (2001) 「マイナス敬意表現の諸相」『日本語学』 20-4, pp.68-77, 明治書院
- 西尾順二 (2007) 「罵りとその周辺の言語行動」岡本真一郎 (編) 『ことばのコミュニケーション—対人関係のレトリック』 pp.194-208, ナカニシヤ出版
- 西阪仰 (2008) 「Pre-pre (プレプレ)」『月刊言語』 37-5, pp.72-77, 大修館書店
- 西阪仰・串田秀也・熊谷智子 (2008) 「特集「相互行為における言語使用：会話データを用いた研究」について」『社会言語科学』 10-2, pp.13-15, 社会言語科学会
- 林建彦 (1990) 「日本人・韓国人・中国人の表現構造比較」『行動科学研究』 30, pp.15-42 東海大学社会科学研究所
- 林 誠 (2005) 「『文』内におけるインターアクション—日本語助詞の相互行為上の役割をめぐって」串田秀也・定延利之・伝康晴 (編) 『活動としての文と発話』 pp.1-26, ひつじ書房
- 林 誠 (2008) 「相互行為の資源としての投射と文法・指示詞『あれ』の行為投射的用法をめぐって」『社会言語科学』 10-2, pp.16-28, 社会言語科学会
- 星野命 (1971) 「あくたいもくたい考—悪態の諸相と機能—」『季刊人類学』 2-3, pp.29-52, 京都大学人類学研究会
- 星野命 (1989) 「マイナス敬語としての軽卑語・罵語・悪口」『日本語教育』 69, pp.110-120, 日本語教育学会
- 洪珉杓 (2007) 『日韓の言語文化の理解』 風間書房
- 牧原功 (2008) 「不満表明・改善要求における配慮行動」『群馬大学留学生センター論集』 7, pp.51-60, 群馬大学留学生センター
- 水島梨紗 (2004) 「発話の連携における疑似批判的コメントの機能と伝達について：『つつ

- こみ』と呼ばれる言語現象と相互作用」『国際広報メディアジャーナル』2, pp.205-222, 北海道大学院国際広報メディア研究科
- 水島梨紗 (2006) 「日本語日常会話における「からかい表現」のフレーム分析」 *Human Communication Studies* Vol.34, pp.53-72, 日本コミュニケーション学会
- 三牧陽子 (1997) 「対談における FTA 補償ストラテジー—待遇レベル・シフトを中心に—」 『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』創刊号 pp.59-78, 大阪大学留学生センター
- 三牧陽子 (2003) 「引用とポライトネス—FTA 軽減を目的とした引用について—」大阪大学言語文化研究科研究プロジェクト：自然会話における引用, pp.42-51
- 三牧陽子 (2008) 「会話参加者による FTA バランス探究行動」『社会言語科学』11-1, pp.125-138, 社会言語科学会
- 三牧陽子 (2013) 『ポライトネスの談話分析』くろしお出版.
- メイナード, 泉子・K (2004) 『談話言語学—日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』くろしお出版
- メイナード, 泉子・K (2000) 『情意の言語学—「場交渉論」と日本語表現のパトス—』くろしお出版
- 山路奈保子 (2005) 「〈相手を評価する発話〉についての一考察—日本語の「ほめ」と「けなし」をめぐる—」『比較社会文化研究』17, pp.109-115, 九州大学大学院比較社会文化学府
- 山路奈保子 (2006) 「日本語の「ほめ」についての一考察—「ほめ」を攻撃的に作用される要因の分析」『日本語教育』130, pp.100-109, 日本語教育学会
- 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』研究社
- <韓国語>
- 박용익 (1998) “대화분석론” 한국문화사
- [パク ヨンイク (1998) 『会話分析論』韓国文化社]
- 박용익 (2003) ‘질문이란 무엇인가?’ “텍스트언어학”14 pp.295-319, 텍스트언어학회
- [パク ヨンイク (2003) 「質問とは何か」『テキスト言語学』14, pp.295-319, テキスト言語学会]
- 송경숙 (2003) “담화화용론” 한국문화사
- [ソン ギョンスク (2003) 『談話語用論』韓国文化社]

- 이원표 (1998) ‘한보청문회에서의 질문 분석:제도상황과 화자의 태도표현’ “사회언어학” 6-1, pp.1-52, 한국사회언어학회
- [イ ウォンピョ (1998) 「ハンボ聴聞会での質問の分析:制度的状況と話者の態度表現」『社会言語学』 6-1,pp.1-52, 韓国社会言語学会]
- 이원표 (2001) “담화분석” 한국문화사
- [イ ウォンピョ (2001) 『談話分析』 韓国文化社]
- 이찬규·노석영 (2012) ‘의사소통에서 나타나는 울타리 표현의 특성에 관한 연구’ “화법연구” 21, pp.245-286, 한국화법학회
- [イ チャンギョ·ノ ソクヨン (2012) 「会話で現れるヘッジ表現の特性に関する研究」『話法研究』 21, pp.245-286, 韓国話法学会]
- 전은주 (2013) ‘드라마 직장 대화에 나타난 질문 화행 분석’ “화법연구” 22, pp.21-37, 한국화법학회
- [ジョン ウンジュ (2013) 「ドラマの職場の会話に現れる質問の語用分析」『話法研究』 22, pp.21-37, 韓国話法学会]
- 허명자 (2009) ‘공유감을 만드는 한국어, 거리감을 두는 일본어’ “언어표현을 통해서 본 한일문화”1, 한국일어일문학회
- [ホ ミョン ज्या (2009) 「共有感を作る韓国語、距離感を置く日本語」『言語表現を通してみた日韓文化』 1, 韓国日語日文学会]

<英語>

- Austin, J.L. (1962) *How to Things with Words*. Oxford: Oxford University Press. (坂本百大訳 (1978) 『言語と行為』 大修館書店).
- Bayraktaroğlu, A. (1991) Politeness and Interactional Imbalance. *International Journal of the Sociology of Language*, 92-1, pp.5-34
- Brown, P., & S. C. Levinson (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, G. & G. Yule (1983) *Discourse Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bolden, G. B. & J. D. Robinson (2011) Soliciting Accounts with Why-Interrogatives in Conversation. *Journal of Communication*, 61, pp.94-119
- Goffman, E. (1967). *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*. New York:

- Gardner Press (広瀬英彦・安江孝司訳 (1986) 『儀礼としての相互行為』法政 大学出版局) .
- Grice, H. P. (1975) Logic and Conversation. In P. Cole & J. Morgan (Eds.) *Syntax and Semantics3. Speech Acts*, pp.41-58, New York: Academic Press.
- Hayano, K. (2013). Territories of Knowledge in Japanese Conversation. Doctoral dissertation, Radboud University Nijmegen, Nijmegen.
- Ikuta, S. (1983) Speech Level Shift and Conversational Strategy in Japanese Discourse. *Language Science*, 5-1, pp.37-53
- Jefferson, G. (1972) Side Sequences. In D.N. Sudnow (Ed.) *Studies in Social Interaction*, pp.294-338, New York, NY: Free Press.
- Park, J. (2013) The Two Forms of English Negative Yes/No Question and Practices of Challenging in Conversation *담화와인지 (談話と認知)*, 20-2, pp.99-125, 담화인지언어학회 (談話認知言語学会)
- Kim, K. (1999) Other-initiated repair sequences in Korean conversation: types and functions *담화와인지 (談話と認知)*, 6-2, pp.141-168, 담화인지언어학회 (談話認知言語学会)
- Lakoff, R. (1973) The Logic of Politeness; or, Minding Your p's and q's. *The Ninth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, pp.292-305, Chicago: Chicago Linguistic Society
- Leech, G. N. (1983) Principles of Pragmatics. London: Longman. (池上嘉彦・河上誓作訳 (1987) 『語用論』紀伊国屋書店)
- Pomerantz, A. (1978) Compliment Response. In J.Schenkein (Ed.), *Studies in the Organization of Conversational Interaction*, pp.79-112, New York: Academic Press
- Pomerantz, A. (1984). Agreeing and Disagreeing with Assessment. In J.M.Atkinsonhn& J.Heritage (Eds.), *Structure of Social Action*, pp.57-101, Cambridge: Cambridge University Press
- Rawlins, W.K. (1994) Being There and Growing Apart: Sustaining Friendship during Adulthood in D.J. Canary & L. Stanford (Eds.), *Communication and Relational Maintenance*, pp.275-294, New York: Academic Press.
- Schegloff, E. A. (1982). Discourse as an Interactional Achievement: Some Uses of 'uh

- huh' and Other Things that Come between Sentences. In D. Tannen (Ed.) *Analyzing Discourse: Text and Talk*, pp.71-93, Washington D.C.: Georgetown University Press
- Schegloff, E. A. (1997). Practices and Actions: Boundary Cases of Other-Initiated Repair. *Discourse Processes* 23, pp.499-545
- Schegloff, E. A. (2007) *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Searle, J. R. (1969) *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*, Cambridge: Cambridge University Press (坂本 百大・土屋 俊訳 (1986) 『言語行為——言語哲学への試論』 勁草書房)
- Sperber, D. & D. Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell. (Second edition 1995) (内田 聖二, 宋 南先, 中達 俊明, 田中 圭子訳 (1983) 『関連性理論—理論と認知』 研究社)
- Terasaki, A.K. (2004) Pre-Announcement Sequences in Conversation, in G. H. Lerner (ed.), *Conversation Analysis: Studies from the First Generation*, pp. 171- 223, Amsterdam: John Benjamins
- Tannen, D. (1984) *Conversational Style: Analyzing Talk among Friends*. Norwood, NJ: Ablex.
- Zajman, A. (1995) Humorous Face-Threatening Acts: Humor as Strategy. *Journal of Pragmatics*, 23, pp.325-339

各章と既発表論文および口頭発表との関連

第1章 新規執筆

第2章 新規執筆

第3章 新規執筆

第4章 否定的評価の発話状況と日・韓の比較

林始恩 (2013) 「親しい友人同士の会話における否定的評価—発話状況の分析と日・韓の比較」『日語日文学研究』86-1, pp.163-186, 韓国日語日文学会

林始恩 (2010) 『親和的關係における否定的評価—日本人・韓国人の母語話者同士の会話から—』筑波大学人文社会科学研究科修士論文

第5章 自然会話における非難の表現形式 —疑問文を中心に—

林始恩 (2014) 「非難の言語形式—疑問文を中心に—」『日語日文学研究』91-1, pp.391-413 韓国日語日文学会

林始恩 (2013) 「友人同士の会話における「からかい」について」韓国日本言語文化学会 2013 年秋季国際学術大会 口頭発表

第6章 相手の否定的側面を語る談話の組み立て方

林始恩 (2011) 「相手の否定的側面を語る談話の組み立て方—プレ行為とサイド・アクティビティーを中心に—」『筑波応用言語学研究』18, pp.127-138

林始恩 (2013) 「会話における否定的評価の特徴」韓国日語日文学会 2013 年春季国際学術大会 口頭発表

第7章 否定的評価後の FTA 補償行為

林始恩 (2010) 「親和的關係における否定的評価—日・韓の話者の話し方と FTA 補償行為に注目して—」『筑波応用言語学研究』17, pp.99-109

第8章 新規執筆